バカとテストと優等生
Another

鳳小鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

にじふぁん時代に投稿していた明久×優子ｓｓの原点。

原作６．５巻以降、優子が明久のことを意識していたらという妄想の元執筆していた二次創作です。

前作とはところどころで修正、ないし変更点を加えながらゆっくりと更新していきます。

例によって誤字脱字は感想まで　※現在更新停止中

目次

アタシと吉井君と秘密の関係

第1話 …… 1
第2話 …… 13
第3話 …… 29
第4話 …… 44
第5話 …… 57
第6話 …… 68
第7話 …… 81
第8話 …… 92
第9話 …… 103
第10話 …… 116
第11話 …… 128
第12話 …… 140
第13話 …… 156
第14話 …… 171
第15話 …… 184
第16話 …… 197
第17話 …… 208
※おまけ バカとサンタと潜入ミッション！ …… 221

アタシと吉井君と秘密の関係
第1話

とある男子トイレ。
そこの一番奥の個室の中で、僕は誰にも知られてはいけない秘密の取引を行っていた。
「……一枚五百円」
「ぐ……、うううぅ、せめてあと百円負けてよっ!!」
「……わかった。じゃあ四百円で」
「買った!! ありがとうムッツリーニ!!」
「……毎度あり」
今、この僕、吉井明久の手元にはある１０枚の写真が握られている。
同じ文月学園の最低ランクのＦクラスに所属する絶世の美女、木下秀吉の隠し撮り写真だ。
撮ったの勿論親友である土屋康太ことムッツリーニ。

つい先日、『木下秀吉の胸が成長している』と噂されムッツリーニが輸血パック片手に（文字通り）命を賭けて撮影した希少な一品なんだ。
そしてムッツリーニは、そんな写真を親友である僕〝だけ〟に特別に売ってくれた。
やっぱり持つべきものは友達だよね。
「うーむ、さすがムッツリーニ、完璧なアングルだ」
どうやって撮影したのかもわからないほど完璧な正面からのローアングル
こんなこと僕では絶対（美波と姫路さんがいるから）真似できない。ムッツリーニ様々だ。
でも、おかげで僕のお小遣いはすっからん。当分ゲーム買えないよ…。
いやいや！　後悔するな吉井明久！　貴重な秀吉の写真を買うのになんの躊躇いがあるんだ。
「やっぱり秀吉は可愛いなー。…どうして秀吉は自分が男だと言い張るんだろう」
何かにかけて秀吉は『ワシは男じゃ！』と言ってくる。
そりゃあ戸籍だと男ってことになってるらしいけど、秀吉は歴とした女の子だと思うんだ。
きっと木下家の教育の一環なんじゃないかな。高校卒業まで男として過ごさなきゃいけないとか、

昨日見たドラマにそんなのあったし。
そんなことを考えながらトイレから出て廊下を歩いていると、
「きゃあっ!?」
「え?――おおぉっ!?」
ゴンっ!!と鈍器を叩きつけたような音をしながら僕は何かと激突した。
痛たた…、秀吉の写真の夢中で前を見てなかった。
「ご…ごめん！　大丈夫――あれ?」
「あ痛たた……、なんなのよ……。……吉井君?」
「木下……さん?」
目の前で尻餅をついていたのは僕の手にある秀吉の写真と瓜二つの顔。
文月学園で最高ランクのＡクラス。そして秀吉の双子の姉でもある木下優子さんだった。

☆

アタシ、木下優子は優秀な生徒である。
学力、運動能力共に学年上位であり、社交性にも優れるまさに模範的に生徒だった。

その評価故、先日に文月学園のプロモーションビデオにも選ばれたこともある（もっとも、出たのはアタシじゃないけど）

そんな聞いたら誰もが羨ましがるような評価も……昔の話かもしれない…。

今のアタシは、

『同性愛趣味』

『スカートの中は常にノーパン』

『気になる異性は１２歳以下の美少年』

という、女の子好きなショタコンノーパン主義の、紛うこと無き変人扱いだった。

「うう…、思った以上に堪えるわね」

廊下にいたアタシは気疲れしてしまって手を窓に押し当てながら弱弱しく溜息を吐いた。

この前のプロモーションビデオ撮影の際、アタシは弱点である『音痴』を隠すべく愚弟の秀吉にお互いの姿と役割を交換した。

考えてみればこの時点で間違っていたのかもしれない。

多少顔にくまが出来ようと夜通しで発声練習でもなんでもやればよかった。

Ｄクラスの女子に『あの、木下さんって男子より女子のほうが好みなんですよね!!』と言われた時はもう返す言葉が見つからなかったわ。

違うのよ。私はちゃんと同世代の男子が好きなんだから、だからそんな羨望と期待の眼差しで見ないで欲しい……。

Ａクラスでも妙に囁かれ噂されるわでもう散々。アタシの築き上げた優等生像を返して。

ああ、…なんか段々ムカついてきた。家に帰ったらもう一回秀吉を絞めてやる。何もかもあいつが悪いんだから！

気を取り直し今度は如何にして秀吉を痛めつけようかと考えながら歩いていると、

ゴン！

いきなり、何かがぶつかってきた。

「きゃあっ!?」

「え?――おおぉっ!?」

痛ったぁ―……。勢いで尻餅をついた所為でお尻が痛い。

ったく、一体何処の誰よ。

「ご、ごめん！　大丈夫――ってあれ?」

「あ痛たた…、なんなのよ……。……吉井君?」

「木下……さん」

アタシの前で心配そうに手を伸ばしたのは学年最低Ｆクラス。さらにバカの中のバ

カと言われる『観察処分者』にも任命されている。
吉井明久君だった。
「ごめんね。僕がよそ見してたら。木下さん怪我とかない？」
「だ、大丈夫よ。アタシもちょっと考え事してたからお互い様。吉井君こそ。何してたの？」
「えっ!?」
なんでそんなに狼狽えるのよ。
「えっとぉ……。そう！　観察処分者の雑用をちょっとね!!いやもうほんと参っちゃうよ～。はははははっ……！」
そう言って高笑いする吉井君は何故か必死に右手を自分の背中に隠している。
……またFクラスは何か問題を起こそうとしてるのかしら。
「じゃあそういうわけで、もうすぐ授業始まるから、またね木下さん！」
「あっ!?　ちょっと吉井君！」
有無を言わせない勢いで吉井君はFクラスのある旧校舎へ向かって走っていった。
まったく、何なのよ。
置いておかれたアタシは小さく嘆息を吐く。
と、さっきまで吉井君がいた場所に紙みたいな物がヒラヒラと中を舞って落ちた。

「あれ？　何か落ちてる。…吉井君の落し物かな？　そうだ。…せっかくだしＦクラスの偵察も兼ねて持っていって――」

――木下秀吉のローアングル写真（超近距離＆ヘソちら）

「何よこれーーっ!?」

何なのこれ!!　なんで吉井君がこの写真を大事そうに持ってるの！

いやいやそれより！

「これ、写ってるのアタシじゃない。……いつ撮られたの？」

家族すら見間違うほどアタシと弟は容姿が似ている。

きっと吉井君はこれが本物の秀吉だと思っているのだろう。

でも違う。いくら似てようと毎朝鏡で見ている自分の顔を間違えたりしない。

――これは、アタシだ。

きっとプロモーションビデオを撮った日に秀吉の姿をしたアタシ。

それ以外考えられない。いつのまに……？

「ど、どうしようこれ…。返さないといけないのかな…？」

自分が写っている写真を両手に持ってプルプル震えるアタシ。

自分自身が写ってる写真を男性に渡すなんて、一体なんの罰ゲームなのよ！

いくらなんでも恥ずかしすぎる！

いや、待てよ…。確かに写ってるはアタシ、木下優子だけどその姿は誰が見ても愚弟の秀吉。

「そうよ。写真だけ見れば秀吉にしか見えないんだから、焦らずに堂々と返してあげればいいのよ。『吉井君、さっきこれ落としたわよ』とか大雑把に、…でもFクラスには秀吉もいるのよね」

アタシが自分の姿形を見間違えないのと同様で秀吉だってこれを見れば一発で自分じゃないって気付くじゃない。

あいつ演劇部にいるし、些細な特徴一つですぐにアタシだと看破されるだろう。

そうしたら吉井君にも当然伝わるから…、

キーンコーンカーンコーン！

「やば、チャイムだ」

ええい、この件は後回し！　とりあえず今日帰ったら秀吉の関節を全部逆に曲げてやる！

☆

「ふう、危なかったー」

Ｆクラスの教室についた僕はようやく安堵の溜息を吐くことが出来た。
それにしてもまさかあんな場所で木下さんに会うことになるとは…。
ついうっかり『秀吉』って呼んじゃうところだったよ。
ズボンのポケットには秀吉の写真もある。木下さんに見られなくてよかった。
秀吉のお姉さんである木下さんに秀吉の〝あの〟写真を見せるのはいろんな意味でまずいだろうし。
チャイムはもう鳴ったのに鉄人がいないけど、何かあったのかな？
「アキ。こんなギリギリまでどこ行ってたの？」
自分の卓袱台に戻った瞬間、美波が尋ねてきた。
「た…ただのトイレだよ」
「それにしては妙にズボンの右ポケットを気にしてるようだが？そこに何か入ってるのか？」
おのれ雄二!!　余計なことを…っ
「――明久君」
「アキ……。ポケットに何が入ってるの？」
「えっ……、ちょっと美波！　姫路さん！　ホントに怪しい物なんか僕の腕がもげるぅぅーーーーーっ！」

「さあ！　ポケットに何が入ってるか見せなさい！」
「往生際が悪いですよ明久君！」
「わあああぁっ!?」
「明久も大変じゃのう」
「……（コクコク）」
「そう思うなら助けてよーーっ！」
　ああっ　僕の大事な秀吉の写真がぁ…。
「何これ!?　全部木下の写真じゃない!!　まさかアキってば本当に木下のことを」
「そんな……、酷いです。明久君はなんだかんだ言っても女の子が好きだと思っていたのに……、明久君は木下君のどこがよかったんですか？」
「ワシの写真じゃったのか!?」
「へぇ……、さすがムッツリーニ。綺麗に撮れてるじゃねえか」
「……これぐらい、朝飯前」
「とにかく！　これは没収ですからね！」
「そんな殺生な～！　ああーっみんなして僕のコレクションを回し見しないでぇーっ！」
　くっ　いくら美波や姫路さんでも今月のお小遣いをすべて使ったこの写真を没収さ

れるわけにはいかない！

今僕の写真を持っているのは、雄二が1枚で美波が3枚。姫路さんが4枚で秀吉が1枚か…。

……ん？

あれ？　おかしいな、9枚しかない？

まさかまだポケットの中に……、やっぱりない。……あれ？

「ちょっと待ってみんな!!　落ち着いて今持ってる写真を全部床に置くんだ！」

「なんじゃいきなり……、恥ずかしいからあまりワシの写真を大っぴらに見せないでほしいのじゃが」

「まだ懲りないの!?」

「わあぁっ!?暴力反対！　……お願いだから言う通りにしてよ。もしかしたら大変なことになってしまったかもしれないんだから」

「はぁ？なんだそりゃ」

「……仕方ないですね」

渋々と言った感じにみんなが持ってる秀吉の写真を自分の目の前に置いた。

うん。やっぱり数は間違ってない。僕のポケットは裏返しにしても出てこないし、みんなが1枚だけ隠してるとも考えにくい……。じゃあ一体どこにいったの!?

「……ない。ない！　ないよ!!　僕の一番のお気に入りのベストアングルの写真が！」
　おかしい！　ちょっと前までちゃんと手に持っていたのに！
「明久のやつどうしたんだ？　なんか今日は一段と変だぞ」
「アキが変なのはいつものことじゃない」
「美波ちゃん、……それはちょっと言いすぎじゃないでしょうか」
「どうやら、写真を1枚落としてしまったようじゃな。明久がここまで慌てるとは、ムッツリーニよ。一体明久にどんな写真を売ったのじゃ？」
「……まさか。明久」
「ムッツリーニ……」
「すまない。学校の催しの準備で遅くなってしまった。それでは授業をはじめるぞ！」
　鉄人!!　なんてタイミングの悪い！
　今はこれ以上探すことはできない。だが次は昼休みだ。チャンスは残ってる。思い出せ吉井明久、僕はどこで写真を落とした！

第2話

「それでは、これで授業を終了します。各自しっかりと予習復習を怠らないようにしてください」

授業が終わりお昼休みになった。

普段は静かなAクラスだけど、この時間だけは少し賑わいを見せる。

そんな雰囲気の中、アタシは少しだけ気落ちしていた。

結局、アタシは秀吉の格好をした自分の写真に関する処遇をまったく決められなかった。

返すべきか、捨てるべきか…、

「はぁ～、なんでこんなことで悩んでるんだろ。アタシ……」

いつものアタシなら迷わず捨ててたと思う。

秀吉の姿をしてるとはいえ、本人の許可なく勝手に撮影され挙句、それを男子が懐に忍ばせてるなんて気持ち悪いだけじゃない。と一言で切って捨てる。

なのに、不思議と今回はそんな気持ちにならなかった。一体どうして？

「優子。ご飯食べようよ」

うんうん悩んでると愛子が声をかけてきた。
「うん。すぐ行くね」
「……なんか悩んでたみたいだけど、何かあったの？」
こういう時、愛子の感は一々鋭い。
かといって、正直に話してもなんだかからかわれてしまいそうだし今は黙っておきましょう。
「ううん。ちょっとさっきの授業で分からない箇所があっただけ。大した事じゃないわ。すぐ行くから代表の所で待ってて」
「そっか。……優子がそういうなら、先に行ってるね～」
そのまま愛子は踵を返し代表の元へ歩いていく。
それを横目で見ながらアタシは小さく嘆息した。
もう割り切ってしまおう。これは秀吉の写真なんだ。アタシとは一切合財関係ないんだから
だから吉井君にだって後ろめたい気持ちなんかない。あるわけない。あっていい訳がない。
そうだ。
これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…こ

れは秀吉の写真…これは秀吉の写真…秀吉コロス。

よしっ！

尊い犠牲のおかげで少し気が楽になったアタシは惣菜パンをもって代表にいるテーブルに向かった。

が、

「……あれ？　代表も愛子もいない。ここで合ってる筈なんだけど」

いつもの場所にいるはずの2人の姿がなかった。

その代わり、テーブルの上に畳んで置いてある便箋があった。置手紙かしら？

この模様は代表が使ってるヤツだ。手にとって裏を捲ると『優子へ』とご丁寧に名指しまでしてある。

アタシはその場で封を切って中身を見た。

『優子へ。ごめんなさい。至急雄二を粛清しなければいけなくなったのでお昼ご飯は食べられそうにありません。愛子もいるので用事があったらFクラスまで来て下さい』

……坂本君に一体何があったの？

「でも、Fクラスならある意味好都合ね」

ちょうどアタシもFクラスに用事がある。

一人で食べるのも味気ないしアタシもFクラスに行こう。

あくまで愛子と代表と一緒にご飯を食べる為にね。
秀吉（中身はアタシ）の写真を落とし主に届けるのはそのついでなんだから！

☆

ムッツリーニ曰く、僕が落としてしまった写真に写っていたのは秀吉ではないらしい。
屋上でお弁当を食べながらその言葉を聞いた僕は、驚きのあまり思わずお箸を落としてしまいそうになった。
「秀吉じゃないってどういうことムッツリーニ？　僕ずっとあれ見て歩いてたけどどうみても秀吉にしか見えなかったよ？」
「……あの写真を撮影してる途中、微かに背中からブラ線が見えた」
「そりゃ当然だよ。秀吉は女の子なんだから」
「待て!?　どこら辺が当然なのかワシにはさっぱり分からんのじゃが」
今ここにいるのは僕とムッツリーニと秀吉の三人だ。
雄二はついて来なかった。清涼祭の時と同じでアイツは興味の無いことにはとことん無頓着だ。

美波と姫路さんもいない。
きっと今頃三人、中むつまじくFクラスでお弁当を食べているだろう。
……、ピッピッピ
「明久よ。何をしておるのじゃ？」
「霧島さんにメール。今Fクラスで雄二が女子二人と仲良くお弁当食べてるよって」
「悪魔かお主は…」
さっき僕を貶めた仕返しだ。
「……話を戻す。きっとあれは秀吉に変装した木下優子だ」
「えぇっ!?」
秀吉とお姉さんが入れ替わってたなんて話、僕初耳だよ!?
「そうなの秀吉！　いつのまにお姉さんと入れ替わってたの!?」
「あ、あー…、いろいろあってのう。一時的に姉上と容姿を入れ替えたことがあったのじゃが、そうか、その時の写真じゃったか……」
「……（コクン）木下優子の写真はあれ一枚のみ、そのほか九枚はすべて本物の秀吉だ」
「――」
「どうしたのじゃ明久。そんなに全身汗まみれになりおって」

やばい、やばいよ僕……。じゃあ僕はお姉さんがいる前でお姉さんの写真を眺めてニヤニヤしてた変態ってことじゃないか。

そんなことがもしお姉さんにばれたら……、まずは美波と姫路さんに知れ渡ってしまい僕は美波に全身の関節を外されて姫路さんの手料理を口に押し込まれる！

そして何故か姉さんにまで知られてしまい罰として姉弟の甘い口付けの近親ＥＮＤ……。

駄目だ！　本当にそんなことになってしまったら僕は肉体的にも精神的にも社会的にも死んでしまう。

くっ…!?　確かに前の試召戦争では秀吉がお姉さんに変装したことがあったけど、まさかその逆パターンがあろうとは……、

「じゃあ、例の『秀吉の胸が成長している』噂の正体ってひょっとしてお姉さんだったのか……」

「……恐らく」

「できれば早く忘れてほしいのじゃ…」

秀吉が分かりやすく落ち込んでいた。

大丈夫だよ。胸なんか無くたって僕にとっては秀吉が美少女であることに変わりはないからね。

――あっ!?

「僕、ムッツリーニと取引した後、教室に戻る途中でお姉さんとぶつかっちゃったんだけど、もしかしたらその時に落としたのかも……」

「なるほどのう」

「……だがそうなると、あの写真は現在、木下優子が所有していることになる…」

「姉上の目ならワシと入れ替わった姿でも自分を間違えたりせんじゃろうし。回収は絶望的やもしれぬぞ」

「回収も大事だけどなにより僕の命が危ないよ!」

こうなったらお姉さんが拾っていないか、万が一、写真を自分と気付いていない2択に掛けるしかない。

Aクラスに行ってみよう。たとえ写っているのが秀吉のお姉さんであろうと、あの写真は取り戻したい! そして生きたい!

お願い神様! 今日ぐらいは僕の味方でいてください!

……、

「木下さんならいないよ。さっき出て行ったから、確かFクラスがなんとか言ってから

多分今はＦクラスにいるんじゃないかな？」
　この世に神なんていないんだぁぁぁーーーーーーーーーーーっ!!!
　もう駄目だ！　お姉さんは完全に僕の命を殺りにきてる！
「終わったー!?　もう僕の人生完璧に終わっちゃったよーっ!?　ごめんおじいちゃん。今そっちに行くからね…」
「待て待て！　窓枠に手を掛けるでない明久！　まだ希望は残っとるぞ！」
「……明久目当てとは限らない」
「…はっ！　そうか！　もしかしたら妹の秀吉に用があったのかもしれないよね！」
「その場合ワシの命が危険なのじゃが…。後ワシは男じゃと言うとるのに」
　今のＦクラスには霧島さんもいると思うし、場合によっては僕はその場で雄二と共に阿鼻叫喚の地獄絵図が……っ！
　いや、それでも僕は、ここで立ち止まるわけにはいかないんだ！
　その後、Ａクラスを出た僕らは考えをまとめていた。
「お姉さんはＦクラスか……、入れ違いになっちゃったのかな？」
「……かもしれぬ。　霧島がＦクラスにおるのならその付き添いという線も捨てきれぬが」
「……行ってみればわかる」

「そうじゃの。どの道もうお昼休みも終わりに近いし、ちょうどよかったのかもしれぬぞ」
「……いざ、Ｆクラスへ」

☆

　Ｆクラスに着き教室の扉を空けた途端、そこにはアタシの常識とはかけ離れた光景があった。
「……雄二。もう二度と浮気ができないようにしてあげる」
「待て翔子!?　お前はあの馬鹿に騙されてるぞ！　俺は誰とも浮気なんてしていない！、いやそもそもお前とも付き合ってるわけじゃあばばばばばばばばばばば―っ!?」
「……（ビリビリ）」
　教室の中心で何故か全身亀甲縛り。黒い布で目隠しをされ天井に吊り下げられている坂本君と、その傍でスタンガンを持って佇む代表がいた。
　坂本くんは全身に力をなくしたように宙ぶらりんの体勢のまま微動だにしていないけど、あれはまだ生きてるのかしら？
「あれ。……木下さんですか？」

呆然としていると、横から突然声を掛けられた。
そっちに顔を向けると、声の主はＦクラスに咲く一輪の花。姫路瑞希さんだった。
「姫路さん。ええ。代表と愛子を追いかけて来たんだけど、……一体どういう状況なのこれ」
「えっと、ちょっと前に突然翔子ちゃんがすごい形相で教室に入ってきて、坂本君を一瞬で気絶させた後、携帯のアドレス張をチェックして鞄の中身と衣服のポケットをすべて点検した後に目を覚ました坂本君をスタンガン片手に尋問していたんです」
一体坂本君はどんな重罪を犯したんだろう。
二人は付き合ってるって話だけど、彼は代表にきちんと人間扱いされているのだろうか。
……干物になった坂本君と彼を抱きしめている代表は一先ず置いておいて、アタシは姫路さん達がお弁当を食べている卓袱台の元に向かった。
「あっ！　優子。優子も来たんだね」
「木下さん？　へぇ、Ｆクラスに来るなんて珍しいわね」
「あんな置手紙されちゃ気になって当然じゃない。こんにちは島田さん。相席させてもらってもいい？」
「勿論よ。どうぞ座って」

島田さんから綿が半分くらいしか入ってなさそうな座布団をもらってアタシはようやく腰を下ろした。

そしてさり気なく教室を見回すと、あれ？　吉井君いないじゃない……。普段よくつるんでる秀吉と土屋君の姿も見えない。

どこ行っちゃったんだろう……？

「吉井君達はいないの……？」

「明久君なら、前の休み時間の最中に大事な写真を一枚落としてしまったみたいで、授業が終わった途端に土屋君と木下君を連れて何処かに飛んでいってしまいました」

「えっ！」

そ、それってまさか……、

「まったく、アキもアキよねー。なんでそんなに木下の写真が大事なんだか、もう百枚以上もってるんじゃないの？」

「そりゃあ、木下君は可愛いからねー」

やっぱりぃーーーっ!?

吉井君はこの写真を探してるんだ！　でも幸いまだ中身がアタシだとはバレてない様ね……。

どうやらアタシ達は入れ違いになってしまったらしい。はぁ、今日はとことんツイて

ない……。どうしてこうなるんだか、
なんだかこのもやもやした思いを金属バットに乗せて吉井君に叩きつけたくなってきたわ。
――考えてみればなんでアタシってば、自分が写ってる写真なのにそれを吉井君に返したがってるかな……。
捨てることだって考えたけど、どうしても実行に移すことはできなかった。
吉井君なんて別になんとも思ってないはずなのに、でも何故か心の奥ではそれは違うと否定してしまう。
吉井君がこの写真を秀吉だと勘違いしてるなら、その間にアタシだとバレないようさっさと渡してしまおうと思ったのに、Ｆクラスに来た途端、そんな考えなんてもう頭の隅っこにすらなかった。
ＰＶを撮影した日以来、アタシの中で、吉井君の存在が少しだけ大きくなっている気がする。
と、そこまで考えて、吉井君のことで思考に没頭していた自分にハッとした。
嘘……、嘘嘘嘘!?　まさか……、まさかアタシは吉井君ことがっ!?
「……」
（優子が顔真っ赤にしてパン持ったままプルプル震えてるよ）

（……なんか木下さんの様子変じゃない？　心ここにあらずというか）
（でも今の木下さんはすごく可愛いです。勿論いつも可愛いんですけど、今はなんだか恋する乙女の顔みたいで）
（恋かぁ……、優子って学校では妙に堅物でプライド高いからそういう話はあんまりなかったんだよねー。……そういえば優子ってここに何しに来たんだろう）
（二人を追いかけてきたんじゃないの？）
（でもさっき明久君はいないのとか……）
（（……まさか））
「……何をヒソヒソ話してるの？」
「「うひゃあっ!?」」
「えっ!?」
代表と3人の大声でアタシは思考を強制的にシャットアウトした。
危なかった…、これ以上考えてたらアタシの中の吉井君像が物凄いことになっていたかもしれない。
「……翔子ちゃん！　坂本君はどうしたんですか!?」
「？　……雄二ならあそこ」
代表が指を指した先には、卓袱台の上にだらんと両手を投げ出し顔を突っ伏した坂本

君がいた。
彼の顔はアタシ達の方とは反対方向に向いていて、ここからだとたてがみのように逆上がった髪しか見えない、見ようによっては寝てるようにもとれるけど違う意味で意識はないんじゃないかな。
「そういえばそろそろお昼休みが終わりだね。ボク達もＡクラスに戻ろっか」
「……もうそんな時間」
携帯を開いて時間を見るともう次の授業が始まるまで１０分もない。えー、まだアタシまだパン食べてないのに……、
しょうがない。残念だけど時間切れね。結局昼休みは吉井君には会えなかった。
もしかしたら今日はもう吉井君には会えないかもしれないわね……。
アタシたちはＦクラスを後にし、Ａクラスに戻った。
……廊下でも会わなかったけど、ホントに吉井君どこいったの？

☆

ふと、一つの考えが僕の脳裏をよぎった。
どうしてＦクラスに向かっていたはずの僕たちが今補習室にいるんだろう――と、

そうだ。僕たちはFクラスへ向かう途中で鉄人に会ったんだ。
その時、鉄人は大きな段ボール箱を持っていた。
話しを聞くと、どうやら僕たちから没収した品がロッカーに入りきらなくなって保管場所を移動させているらしい。
忙しそうに僕らを通り抜けようとする鉄人を見て、僕はある考えが浮かんだ。
今鉄人をぶちのめせば没収された品を取り戻せるんじゃないか?と、
幸い鉄人はダンボール箱で両手が塞がっている。奇襲にはもってこいの状況だ。
ムッツリーニと秀吉にアイコンタクトをする。すると2人は小さく頷いた。どうやら考えは同じのようだ。
僕たちは慎重に襲うタイミングを窺った、そして鉄人が僕らに背を向け歩き出した瞬間っ!?
「お前達は少しぐらい学習するという考えはないのか?」
見事、返り討ちにあったんだ。
「俺がなんの警戒もなしにお前達から預かった物を持ち歩くわけが無いだろう」
「いくらなんでもエロ本やゲームが大量に入ったダンボール箱で直接ぶん殴ってくるな

んて思いませんよっ！」
「……計算外」
「あれにはワシも度肝を抜かれてしもうた」
　あんなの並の鈍器より数倍殺傷能力があるぞ！
「この卑怯者めっ！」
「まだ減らず口が叩く元気があるようだな。いいだろう、もう１つ問題集を追加してやる。授業の出席は布施先生に俺から連絡しているから安心しろ。今日は放課後まで思う存分相手になってやるからな！」
「「うぎぃぃぃぃ！」」
「明久!!　お主また余計なことをっ！」
「吉井っ！　お前は放課後に雑用も頼むつもりだから覚悟しておけっ！」
「そんなぁーーーっ!?」
　僕はただ写真を取り戻したいだけなのにどうしてこうなっちゃうのーーっ!?
　その後、僕らは放課後までみっちり絞られた…。

第3話

放課後。

――コン、コン、

「先生、補習課題と世界史の教材の整理、没収品の移動終わりました」

今日の授業が終わったところで教室を出て帰ろうとしたところ、偶然廊下で大荷物を抱えた西村先生を見つけたアタシは、先生の雑用の手伝いを買ってでていた。

それが思いのほか時間が掛かり、気づいてたらもう日が落ちかかっている時間。

すべての作業を終えたことを報告する為、補習室の扉をノックした後声を掛けると、中から威厳のある太ましい声が返ってくる。

「木下か、入ってくれ」

はい。と返事をし扉をスライドさせると、中には教卓に顔を落としている筋骨隆々の男性。西村教諭の姿があった。

普段馴染みのない補習室は窓から夕焼けが射して室内を赤く染め上げている。

風が吹いているのか白いカーテンがゆらゆらとなびいていて、殺風景な教室を神秘的な景観に作り変えていた。

アタシは僅かに息を飲んで教室に足を踏み入れると、西村先生は教卓から顔を上げてアタシの方に視線を回した。
「ごくろうだった。すまないな生徒に教師に仕事を任せてしまって」
「気にしないでください。したいと申し出たのはアタシの方ですから。それに生徒が教師に協力するのは当然の義務です」
「うむ、木下の働きは他の先生方からもよく聞いている。とても高い評価をと共にな。口にする先生は誰もがまさに理想的と優等生だと言っていた。先生も同じ教師として鼻が高いよ」
「ありがとうございます」
「これは少ないが先生からのお礼だ。受け取ってくれ」
そう言って、先生はスーツのポケットから缶コーヒーを取り出した。
「いえそんな、アタシが勝手にやった事ですから」
「気を使わなくていい、先生からの感謝の気持ちだ。もらいっぱなしというのは俺としても申し訳ないからな。もらってくれ」
「……そういうことでしたら、ありがたく」
右手を差し出して缶コーヒーを受け取る。
手にとった瞬間、触れている部分からひんやりと冷たい感覚を感じた。

それを制服のポケットに突っ込んで、再び先生の方を見ると、教卓を見下ろしてそこに広げられたプリントに目を通している所だった。。
「先生は何してるんですか?」
「ん?　ああこれか。雑務と破損した設備の修繕と改装の内容書の確認だ。とっても実のところはFクラスが起した損害の一覧表だがな」
「Fクラス、ですか」
「ああ。あいつらは週に三回は問題を起してくれるのでな。おかげで俺もこうして苦労が絶えんのだ」
西村先生はボリボリと後頭部を掻きながらところどころに赤ペンでチェックをつけている。
「そのチェックはなんなんですか?」
「ここはそれほど被害にあってない部分だ。問題の度にわざわざ業者を呼ぶのももったいないからな。代わりに観察処分者である吉井にやらせる予定のところだ」
「っ」
〝吉井〟という言葉を聞いた途端、ドキンッと胸の鼓動が一段階上がった。
それに驚いてつい手を胸に当てると制服の上からでも分かるほど心臓の鼓動がはっきりと手の内から伝わってきた。

あ、あれ？　なんでアタシこんなにドキドキしてるの？
「どうかしたか？」
「な、なんでもないです！」
「……そのわりには顔が赤くなってるが、もしかして風邪か？」
「夕日に当てられただけですから、全然大丈夫です！」
「そ、そうか」
ふう、今が夕方でよかった……。
「……吉井といえば、図書室の書庫の整理をやらせていたはずだが中々帰ってこんな。まったく、終わったら報告に来るよう言っておいたというのに」
「吉井君、まだ学校にいるんですか？」
「いると思うが――何だ。吉井に何か用でもあるのか？」
「まあ……ちょっと」
ちらりとアタシは左手に下げている鞄に視線を落とす。
結局、休憩時間に拾った例の写真はまだ返せていないままだった。
休み時間毎にＦクラスを覗きに行ったけど、一度も吉井君に会えなかったし。
……ひょっとしてアタシ、避けられてる？
「落し物があったので届けようと思ってたんですけど何故か一度も吉井君に会えなく

て」
「なるほどな――。なんなら俺が代わりに届けようか？」
「えっ？」
西村先生から意外な提案が来た。
「俺はFクラスの担任だから嫌でも吉井と顔を合わせることになるからな。その時にでも折を見て渡しておこう」
こ、これはチャンスかもしれない。
先生から届けてもらえば直接吉井君と顔を合わせなくてもこれを返す事ができるし、アタシも恥ずかしい思いをしなくても済む。
まさに一石二鳥。これってやっぱり普段からの行いがいいからよね！
「それなら――」
お願いします――。と続けようとした途中、口が凍りついた。
あの写真は至近距離からローアングルで撮った明らかに盗撮写真。
それを規律遵守、規則を守りルール違反は絶対許さない風紀の化身みたいなこの先生が素直に吉井君に返してくれるだろうか？
寧ろ没収と称して取り上げてしまうんじゃあ……。
「――いえ、やっぱり自分で渡します」

「む、そうか」
駄目だ。先生には渡せない。
何故だかわからないけど、それはすごくよくない。
「吉井君は図書室にいるんでしたよね」
「そうだが、これから行くのか？」
「はい」
これ以上悶々としたくないし。
「忘れ物を届けたらそのまま帰宅しますので、それでは失礼します」
「うむ、日も大分落ちかけてる。気をつけて帰るようにな」
扉の前で最後に先生に軽く一礼した後、補習室を後にする。
時間も遅い所為か、廊下には人影は一つもなかった。
耳を澄ますと微かに部活か何かの喧騒が聞こえてくる。まだどこかで部活動をしているのだろう。
ホラーとかだと定番だけど、人気のない学校ってどうしてこんなに不気味に感じるのかな。
まあ、今はまだ日が出てる分明るいからそれほどでもないけど。
――さて、じゃあ図書室に行きますか。

☆

がらがらがら――と図書室の扉を横に開いた。

「し、しつれいしまーす……」

覗き込むように顔を突き出して、首を左右に振り室内を見回す。

閑散とした室内は時間が止まっているかのように静かでアタシが入室しても何の反応も返ってこない。

どうやら誰もいないらしいけど――鍵が開いてるってことは誰か入るってことよね？

僅かに息を飲み、アタシは扉を閉め恐る恐る歩き出した。

「……書庫って確か奥だったわよね」

靴音を響かせながら本棚を間を抜けていく。

西村先生の話では吉井君はそこで雑用を任されているらしいけど、異常なぐらいの静寂を保っている図書室は人のいる気配が微塵も感じなかった。

本の整理をしてるなら多少音はすると思うんだけど、やっぱり帰ったのかな。

もし、探してもいなかったら……その時は縁がなかったってことで諦めよう。

西村先生に写真を渡して後の処遇は先生に任せる。それでこの件はすっぱり終わりにすればいい。

考えているうちに、書庫に通じる扉の前にたどり着いた。

「――ここね」

思わず息を飲む。

入った事ない部屋に加えてこれからすることに少し緊張している所為か、扉は人一倍大きく見えた。

恐る恐るドアノブに手を置く。

さあ――開けるわよ。

ゆっくり、なるべく音を立てないよう静かに扉を引いた。

「何、この匂い……」

初めて入る学園の書庫は、なんだか埃っぽかった。

一番初めに目に入ったのは、アタシの身長の二倍以上ありそうな荘厳な本棚の列。

部屋の隅には添えるようにちょこんと机と椅子が一つ置かれている。

周りには出したまま放置されているらしい本が積み重ねられていて、あまり広いとは言えない書庫をさらに狭くしていた。

見る限り整理したとは思えない乱雑な室内だけど……、

「吉井君……？　いないの？」
声を出してみても、返事は返ってこない。
しばらく歩き回ってみたけど人の姿はどこにもなかった。
……やっぱり帰ってしまったんだろうか。
「……はぁ、なんか勝手に緊張してドキドキしてた自分が恥ずかしい」
結局、現実なんてこんなもんよね。
ドラマやアニメみたいに都合よく会えるわけない。
吉井君の性格を考えたら教師の見張りのない雑用なんてサボるに決まってるのに、そんなことも思いつかないぐらい頭が回ってなかったのか。
「帰ろ」
落胆に肩を落として踵を返し書庫から出ようとする。
げしっ。
「んげっ!?」
柔らかいものが足のつま先に当たって下から奇声が聞こえた。
何か蹴った？
視線を地面に落として足に当たった物体を確認する。

「むにゃ……ひどいよみな――み。……」
足元には、本を何冊積んで枕代わりにしてそこに頭を乗せて横になっている吉井君がいた。
「なっ、な、」
アタシは驚きのあまり絶句して、思わず半歩後ずさった。
いきなり目の前でびっくり箱を開けられたかのように、心臓の鼓動が一瞬で跳ね上がる。
「ね、寝てる……の？」
ずいっと顔を少しだけ突き出して、仰向けで横たわる吉井君を覗き込むように観察する。
若干顔色を悪くしているが、すぅ、すぅと規則正しい寝息を立てながら、吉井君は眠っていた。
……はぁ、
「びっくりした……。驚かせないでよまったく」
胸に手を当てながらそんな言葉を口から漏らした。
すると、胸に当てていた手の平の先から、ドクンドクンという鼓動が手に取るように伝わってくる。

うわぁ……どうしよ。アタシすごいドキドキしてる!?　なんなのこれ!?
もう少しだけ眼下の吉井君に顔を近づけると、さらに鼓動は激しくなった。
どうやら今のアタシの心拍数は吉井君との距離によって変動するらしい。
なにこの恋する乙女。
じー。
「……すう」
しばらく見つめていても起きる気配は微塵もない。
……寝顔は結構可愛いかも。
これなら当分見ていても退屈しな――って何してんのよアタシは！
「違う違う！　バカバカバカ！　ずっと見ててどうするのよ。ここに来たのは落し物を届けるためでしょうが」
自分で自分を注意して頭を振り煩悩を追い払う。
危うく自分でも良く分からない領域に入り込んでしまいそうだった。
でも――どうしよう。
別にアタシとしてはこのまま胸元にでもこの写真を添えて退室してもいいんだけど、こんな不清潔極まりないところで吉井君を放置するのもなんだか気が引ける。
長時間ここにいたらいくら吉井君でも何か病気になっちゃうかもしれないし。

それはまあ――アタシとしてもいろいろ困るし……。
「……そうよね。ここではいさようならなんて優等生がすることじゃないし。仕方ないから――そう仕方ないから起こしてあげましょう」
そうろと吉井君の肩の辺りに手を当てて軽く揺すってやる。
「吉井君起きて。起きなさい」
「ん、んー……」
煩わしそうに顔をしかめる吉井君。
あれ？　そういえば何で吉井君ここで寝てるの？
……まあ本人から聞けばいいか。
ちょっと力を入れて揺すってやる。
「ちょっと、起きてよ」
「……むー」
「聞こえてるの」
「んー、だめだよー。まだねむいったら……ひめじさん――むにゃ」
「……」
ぷちっ。
なんだろう。何も起こってないのにアタシの沸点が一瞬だけボーダーラインを越え

た。
　すぅ……。
「起きろーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!!!」
「うぎゃあぁ!?」
　自分でもびっくりするぐらいの大声が口から飛び出た。
　傍で居眠りしていた吉井君はまるで爆発音を聞いたような驚き顔で飛び起きてきた。
「な、なんだ!?　鉄人か！」
「誰よ鉄人って。それより前に言う事あるでしょ」
「え？」
　目を丸くして吉井君はようやくアタシの姿を視界に納めた。
　そのままじーっと考え込むように唸りながらアタシを見つめてきた。
　……な、なんか緊張するな。赤くなるなアタシ！
「な、何よ？」
「…………」
　考え込むこと十秒。
「……そうか。分かったよ」
　何かを悟ったような顔で、吉井君はそんなことを言って来た。

いままでバカなことばっかりしてきた彼にしては珍しい真剣な表情で、不覚にも少しかっこいいと思って――だから違うってば！

「な、何がよ」

「ううん、言わなくていいんだ。僕って同じ気持ちなんだから」

「は？」

「でもこういうってやっぱり男のほうから告げるのがセオリーだよね。正直緊張で心臓バクバクだけど、僕だって男だ。決める時ははっきり決めるよ」

何言ってるんだろう。起きぬけでまだ頭回ってないの？

「あの、吉井く――」

唐突に、アタシの言葉は途中で途切れた。

いきなり、何の前触れもなく。吉井君がアタシの両手を包み込むように掴んで胸の前まで持ってきたのだ。

え？　えーーーーーーーーーーーーーー!?

「な!?　なななななな！　何をいきなり！」

言語機能が故障したようにドモリまくるアタシ。

心拍数は過去最高の記録を進行形で更新している。

窓のないこの部屋ではもうあからさまだけど、きっと夕日が差し込んでいても今の赤

面を誤魔化す事はできないだろう。

そして――――――。

「僕はいつだって、君のことが大好きだったよ」

埃が漂ってカビ臭い書庫の一角で、アタシは人生最大の分岐点に訪れた。

第４話

恋なんてある日突然唐突にやってくるものである。

友達だと思っていた相手が途端に愛おしくなったり、小さい頃から一緒だった人に友達以上の好意を持ってしまったり。場合によって道で通り過ぎた名前も知らない相手と偶然目が合っただけで一目惚れする。なんて事例もある。

そういう有象無象に比べれば、これはどちらかというと常識的な部類に入る告白ではないだろうか。

しかし、だからと言ってそれを理解、納得できるかと言われればそういうわけでもないわけで。

「――――ふぇ？」

両手を掴まれたまま、アタシは思わず間抜けな声をあげてしまった。

何がなんだかさっぱり分からない。

吉井君を起こしたと思ったら、今度はいきなり愛の告白をされてしまった。

何を言っているかわからないと思うけど、アタシにもわからないから多分大丈夫。

「えっと、また何かの冗談？」

Ｆクラスがまた変なことでも企んでるのかと邪推してそんな言葉が口から出る。
それが気に入らなかったのか、吉井君はむっとした表情をした。
「冗談なんかじゃないよ。僕は本気なんだ。真剣に君のことを愛してるんだ」
「な」
歯に衣着せぬ台詞に心臓がドキンと高鳴る。
燃えているような吉井君の瞳にはアタシしか写っていない。
掴まれた腕から伝わる力が決して冗談ではないと雄弁に語っていた。
「そんな……の、いきなり言われても……」
「ここまで口火を切った以上僕ももう後戻りできない。それに、簡単に諦められるほど軽い気持ちで言ったんじゃない。だから真剣に答えてほしいんだ」
「っ!?」
真摯な告白に思わず背筋がびくっと飛び上がった。
本気だ。吉井君は本心からアタシのことが好きだと言ってくれている。
で、でもどうしたらいいのよ!?
吉井君のことは嫌いじゃない。
寧ろ先の弟との入れ替わりの件からこっち、変に吉井君ことを意識している始末だ。
そこでこの告白。あまりに出来すぎている。まるで舞台に上に立っている役者のよ

うな気分だった。
　頭の中が真っ白になって吉井君から視線が外せない。ああもう心の準備とか全くできてないのにこんなの卑怯すぎる!?
「あ、アタシは……」
「いきなりでごめん。混乱してるよね」
「あ、当たり前でしょ！　いきなりす……好き……だなんて……言われても」
「うん。それに関しては申し訳ないと思ってる。でも約束する。君を一生大事にするって。浮気もしない。本気なんだ。僕は死ぬまで君の傍に居たいと思ってるんだ」
「――――あ」
　その言葉に、アタシは自分の心が射抜かれたような衝撃を受けた。
　――ああ、だめだ。
　こんなこと言われたら撃沈する。
　胸の鼓動はここに来て最高潮。
　すでに書庫に来た理由なんて綺麗さっぱり忘れてしまった。
　今はもう目の前のことしか考えられない。
　感情は乱されっぱなしだけど、不思議と心は幸福な気持ちでいっぱいになっていた。
「もう一度言うね。君のことが好きです。――僕と、付き合ってください」

その言葉に抵抗する術はすでになくなっていた。
アタシは何か温かいものに包まれたような気分で顔どころか首筋まで真っ赤に染め、無言のままこくんと、一つ頷いた。
瞬間、吉井君の表情が目に見えて喜びの色を表す。
かくいうアタシも、頭の中で幸せの小さい花が咲き乱れて……。

「本当に！　嬉しいよ。『秀吉』！」

一瞬で枯れ果てた。
「……。秀吉……？」
「うん！　やっぱり僕達は相思相愛だったんだね！　正直緊張バリバリで足とか震えてたんだけど勇気出して本当に良かったよ!!」
まるで人生の天国に行き着いたかのように大喜びしている吉井君。
掴まれたままの両腕をぶんぶんと上下に振られて、アタシは何がなんだか分からないまま成すがままにされていた。
え？　え？　どういうこと？
「あ、あの、よしい……くん？」

「よし。じゃあ早速デートに行こう！　あ、お金の心配ならいらないよ。こう見えて実はほしかったゲームを買うために少しずつ小遣いを貯めてるんだ」
　どこ行く？　どこ行こうかと騒ぎまわる吉井君に、アタシはまだ理解が追いついていなかった。
　つまりどういうこと？
「ちょ、ちょっと待って！」
「ん？　どうしたの？」
「吉井君。貴方の目の前にいるのは誰？」
「？　秀吉でしょ。どうしたのさ急に」
「貴方が好きな人は？」
「勿論秀吉だよ」
「……」
　あー、そういうこと。
　つまり彼はよりにもよって弟、男とアタシを見間違えた挙句告白したと。
　ちなみにスカートを穿いている事に関してはまったく違和感は抱いてないらしい。
「ね、吉井君」
「ど、どうしたの秀吉？　なんか笑顔が怖いよ？」

さっきまで笑顔満点だった吉井君が段々と恐怖のそれになっている。
おかしいわね。どうして吉井君はそんなにびくびくしてるのかな～？
ここにはカビ臭い本と机しかないのにねー。
「ううん、何でもないの。ただアタシが勝手に期待して喜んで挙句勘違いしただけだから」
「勘違い……？」
「でもね」
うん。吉井君もそうだけど、正直喜んだあたしも責任はある。
元々アタシと吉井君はそこまで親しい仲じゃないし。それがいきなり好きですなんてのがそもそもおかしいことにもっと早くに気が付くべきだったんだ。
普段から吉井君は秀吉秀吉言ってたし。きっとさっき居眠りしてた時に変な夢でも見たんでしょうと勝手に推測してみる。
まあ仕方ない。きっといろいろありすぎてアタシの頭も回っていなかったんだろうからね。
でも、でもね。
「ふざけんじゃないわよーーーーーーーーーーーーーーーーーー

!!!!!!!!
」
この気持ちの放出だけは抑えられないのよ。
「ぐぼぁっ!?」
強烈なアッパーカットで吉井君は天高く舞い上がる。
だん！　だん！　どかどか!?　どしん!!と鈍い音を立てながら地面に自由落下した吉井君は床に転がっていった。
本棚に直撃して彼の頭の上にだらだらとかなり厚みのある書籍が滝のようになって落ちていく。
そして埃が舞い上がりまるで映画のアクションシーンのような状態になって、吉井君はそのまま動かなくなった。
「はぁ、はぁ、はぁ」
我ながら会心の一撃。
秀吉にもやったことのない威力の拳が見事に吉井君の腹にクリーンヒットした。
あとに残るのは、残骸となった本の山はその前で肩を上下させているアタシ。
「まったく」
パンパンと手を叩きながら溜息を吐く。

なんだか泡沫の夢から覚めたような空しい気分だった。
できれば永遠に覚めてほしくなかった幸福なおとぎ話だったのに。
「なんでこうなっちゃうかな……」
天井を見上げながらぼそっと呟く。
力ない声が無人の書庫（一人気絶中）に響いて消えた。
さっきまで熱いぐらいに感じていた体温はすでに冷め切っていた。
しかし、それに反抗するように心の熱、心臓の鼓動はまだ激しい活動をやめていない。
人の感情っていうのは難しい。
たとえそれが誤解から生まれたものだったとしても、人間一度自覚してしまった感情はそう簡単には覆らないものだ。
それは、つまり。
「……責任取りなさいよね。バカ」
そういうことだった。

☆

本の墓標に埋まった吉井君を放置して家に帰った頃には、すでに日も落ちる時間帯だった。
「ただいまー」
「おかえり姉上。なんじゃ、今日は随分遅かったのう」
リビングに顔を出すとTシャツにタンクトップとラフな部屋着でソファに座っている秀吉がいた。
「別に、いろいろあったのよ。ええ、……いろいろね」
「な、なんじゃ。どうしてワシを睨むのじゃ」
「……別に、じゃあアタシ部屋にいるから、ご飯できたら呼んでね」
そっけなく返してリビングから背を向ける。
「あ、ちょっと待つのじゃ姉上」
扉のノブに手をかけようとしたところで、背後から秀吉の呼び声が聞こえた。
「何？」
「あー、その……じゃな」
奥歯に物が詰まったように歯切れの悪い秀吉。
頬をポリポリと掻いて言うまいか言うべきか悩んでいるらしい。
その困ったような表情がつい数時間前の自分を鏡で見ているような気分になって、つ

い無意識に棘のある口調になる。
「何なの？　言いたい事があるならハッキリ言いなさいよ」
「……じゃあ言うが。姉上、今日廊下に何か拾わなかったか？　例えば……写真とか」
「写真？」
「し、知らないなら良いのじゃ！　変なことを聞いて済まぬ。忘れてくれ」
「あー」
取り繕うような秀吉の早口に、アタシは書庫に行った理由をようやく思い出した。
スカートのポケットを手で探ると、ツルツルとした感触が指先に触れる。
そういえば吉井君と土屋君とコイツがこれ探してたんだっけ。
「これ？」
秀吉（ｉｎアタシ）が写ったプロマイドを取り出して見せる。
秀吉は一瞬だけ絶句した後、何かを諦めるように深い嘆息を吐いた。
「……や、やはり姉上が持っておったのか。実はじゃな、それは――」
「秀吉の格好してるけど写っているのはアタシで吉井君が探してたやつでしょ」
「――明久が――って何故知っておるのじゃ!?」
「そりゃ自分の姿なんだから見間違えないわよ。それにこれは廊下で吉井君がぶつかってきた時に偶然拾ったのよ」

「そ、そうじゃったのか」
納得したような、そうでないような曖昧な返事をする。
別に秀吉の機敏なんてどうでもいいので、アタシは無視して切り出した。
「で、いるのこれ？」
「何……？」
「だから、この写真いるの？　いらないの？」
「も、もちろんいるのじゃ、しかし良いのか!?　姿がワシとはいえ映っているのは姉上自身なのじゃぞ！　それを見ず知らずの男子に」
アタシの台詞が予想外すぎたのか秀吉は相当てんぱっていた。
焦りまくる秀吉の気持ちは分からなくもない。
でも件のことがあった所為で、アタシの中でこの写真はどうでもいいものにランク落ちしていた。
別にこれでアタシの評価が上下するわけでもないし。少し寛容になってみても悪くない。
「良いわよ別に、こんなのもっといっぱいあるんでしょ」
「う、否定できぬ。すまぬな」
秀吉は手を伸ばして写真を受け取ろうとする。

が、ふと写っているアタシ（ｂｏｄｙ秀吉）の姿が目に入って、アタシの手は空中で一時停止した。
まったく、この写真の所為でアタシは今日一日右に左と翻弄されっぱなしだった。
何でアタシがこんなに悶々としなきゃいけないのよ。たかが写真ごときに。
そうよ。思い返せばこいつがすべての元凶だったんだ。
「……」
……あー、なんだかこれを眺めているとまたむかついてきたわ。
「あ、姉上？　ちょっ――何故そこで写真を折るのじゃ!?ってあーーーーーっ!?」
びりびり
二つに折って破いてそれをさらに４つにして破いて最後に８つの紙くずにする。
最後に手でくちゃくちゃに丸めた後ゴミ箱にぽいっと投げ捨てた。
ぱらぱらと紙吹雪となってゴミ箱に吸い込まれる写真だったものを見て少しだけ溜飲が下がった。
「あー、すっきりした」
「あ、あ、あ。なんてことを」
「はじめからこうしておけば良かったわ。じゃあねー」
呆然としている秀吉を置いて、アタシは清清しい気分でリビングを後にした。

さて、復習でもしましょうか。

第5話

昨日と同じく、僕と秀吉とムッツリーニは屋上で昼食をとっていた。
「これが、探していた写真じゃ」
すっ、と秀吉は懐から封筒を取り出して床に置く。
「推測通りというか予想通りというか。やはり姉上が拾っておった」
「……そ、そう」
「……どうした明久。顔が真っ青」
「な、なんでもないよ。ははは」
顔どころか背筋が冷や汗でいっぱいです。
理由は昨日、僕はどうやら秀吉と姉の木下さんを間違えて愛の告白をしてしまったらしいからだ。
らしい、というのは僕自身あの時の記憶がかなり曖昧だからだ。
勘違いの告白に激怒した木下さんにぶん殴られた記憶はあるんだけど、その前後のやりとりがどうも思い出せない。
まあ正直思い返すだけで顔が真っ赤になるぐらい恥ずかしい黒歴史だから思い出さ

ないほうがいいんだけど。
　きっと僕の脳が危険を察知して記憶中枢に鍵を掛けてしまったんだろう。
　その木下さんの手から返ってきた写真だ。中がどうなっているのかまったく想像できない。
「秀吉。それで木下さんの様子はどうだったの……？」
「……、すべてはその中じゃ」
「何その殺人事件のラストシーンみたいな台詞!?」
　何だ、この封筒の中のどうなってしまったの!?
「……開ければ分かる」
「そ、そうだね」
　開けてはならないパンドラの箱臭がぷんぷんするけどこのまま放置はできない。
　僕はびくびくしながら震える手で封筒を手に取った。
　当たり前だが、重さはまったく感じない。
「あけるよ？」
「うむ」
「……（こくん）」
　二人が固唾を飲みながら頷く。

それを確認した僕は恐る恐る封筒の先を開いた。
ぱらぱらぱら、
手に平に8つの紙くずがゆっくりと落ちてきた。
「……」
沈黙する僕とムッツリーニ。
僕の手の上には秀吉の顔や手や腰っぽい部分がばらばらに分裂しているかつて写真だったものがある。
見ようによってはいろいろぐろい。
あまりに凄惨な残骸に木下さんの僕に対する気持ちがありありと伝わってくるようだった。
「は、ははは。……僕もう木下さんと顔合わせないほうがいいかも」
「……激しく同意」
禿同するムッツリーニ。
少し状況が変わっていれば八つに裂かれていたのは僕だったかもしれないと思うと震えが止まらない。
「と、取り合えずこれは持って帰るよ。まだ修繕できるかもしれないし。ありがとう秀吉」

「うむ、それは良いのじゃが、明久よ。昨日姉上に何をしたのじゃ？　昨日家に帰ったときの姉上は全身から激憤を放っておったぞ」
「い、言わなきゃ駄目……？」
「言いたくないというなら無理には詮索せぬが、明久とてこのままではいろいろ息苦しかろう」
確かに、学校で常に僕は命の危機にさらされているなんて勘弁願いたい。
そういうのは雄二だけで十分だ。
秀吉と木下さんは姉弟だし、もしかするとお姉さんの機嫌を直すこともできるかもしれない。
意を決して、僕は二人に事情を説明する事にした。
「実は、昨日木下さんに告白したんだ」
「……詳しく（ちゃき）」
「うん……。でもその前にその懐から取り出したカッターを仕舞おうかムッツリーニ」
「……抜け駆けは死刑」
「誤解だよ！　僕は本当は秀吉に告白するつもりだったんだ。ていうかしたんだけど」
「なぜワシに告白するのじゃ!?」
「好きだからに決まってるじゃないか!!」

「そんな恥ずかしいことを豪語するでない！」
「……どちらにせよ有罪」
「ストップストップムッツリーニ!?　ボールペンは人を刺す為のものじゃないよ。まだ話は終わってないんだ」
「落ち着くのじゃムッツリーニ。明久への制裁は事情をすべて聞いてからにせい」
「……わかった」
「聞いても僕の死刑は変わらないの!?　そして秀吉もさりげにひどい！」
「それで？　それからどうなったのじゃ？」
「……わからない」
「は……？」
　秀吉とムッツリーニがハモる。
「お姉さんにお腹殴られて気絶したのは覚えてるんだけど、その前後がなんか曖昧で」
「ふむ、推測するに姉上はワシと自分を間違えれていると知り激情のあまり明久を殴って気絶させてしまったのじゃな」
「どうしてお姉さんは怒ったんだろう……」
「男のワシと勘違いされたら怒るのは当然じゃろう……」
「……不可思議」

「ワシの発言はスルーなのじゃな」
「とにかく！　このままじゃよくないよね」
　立ち上がって声高に声を上げる僕。
「なんとかお姉さんのご機嫌をとらないと。そんなわけで秀吉、何かいい案ない？」
「そうじゃのう……」
「……ショタの写真とか」
「それは駄目じゃ。今度こそ姉上が噴火してしまう。あと一応弁解しておくと姉上はショタコンではないぞ。ついでにノーパンでもレズでもない」
「……ノーパッ（ぶしゃああ）!?!?!?」
「む、ムッツリィーニィイッ!?」
「敏感すぎじゃ」
　ムッツリーニは周囲に真っ赤な水溜りを作りその中心でピクピク痙攣していた。
　保健室に連れて行くべきか迷ったけど、しばらくするとゆったりと起き上がってきた。
「……だ、大丈夫」
「顔を真っ赤にしてもまったく説得力はないぞ。取り合えずほれ」
　秀吉がティッシュを取り出してムッツリーニに差し出す。

「……ありがとう」
「うむ。しかし難しいのう。本来ならこういうのは雄二の十八番なのじゃが」
「雄二は駄目だよ。アイツは自分の興味のあることにしか動かないし、何より今雄二が関わると僕にとって悪影響しか思い浮かばない」
僕の不幸は蜜の味。なんて最低なことを平然とのたまってくる雄二がこの事を知ったら余計面倒くさいことになるのは容易に想像が付く。
絶対に雄二に知られるわけにはいかない。
「とにかく雄二は抜き。いいね」
「ではどうするのじゃ？」
「……物で釣るとか」
「物？　プレゼントってこと？」
「ふむ、何かプレゼントを用意して『この前は申し訳なかった』と侘びの気持ちも込めて贈るということじゃな。良いのではないかの？　単純じゃが効果的であろう」
「おお！　そう言われるとなんだかいい気がしてきた」
絶望しかなかった未来に少しだけ明光が射す。
女の子は贈り物に弱いと言うし、木下さんだって少しは怒りを収めてくれるかもしれない。

「良し！　じゃあそれで行こう！」
「肝心の品はどうするのじゃ？」
「あー、そうだね。……女の子って何あげると喜んでくれるのかな？　服とか？」
「ちょっと安易ではないかのう」
「……スカートなら任せろ」
「どうしてそこでスカートをチョイスするのか分からないよ」
「……男のロマン」
「それってただのムッツリーニの自己満足だよね？　僕の命が掛かってるんだから真剣に考えてよ！」
　三人寄ればなんとやらだけど、約一名に明らかな問題があるようだ。
　忘れかけていたけど、ここに集まっている全員がＦクラスであることを前提に頭に入れておかなければいけない。
「料理というのはどうじゃ？　明久の得意分野じゃろう」
「んー、悪くないんだけど、姫路さんと美波の時は何故か対抗意識出されちゃったからね。秀吉、お姉さんって料理得意なの？」
「……いや、見た事がない」
「つまり、場合によっては第二次姫路さん大戦が勃発するかもしれない、と」

「……断固阻止!?」

がくがくと体を震わせながらぶんぶんと勢いよく首を振って言葉を紡ぐムッツリーニ。

ここに集まる三人は姫路さんの料理の怖さを体の隅から隅まで覚えさせられている。

僕達にとって姫路さんの料理を食べるというのはある種の自然災害レベルの危機だった。

「ちなみに、姉上は負けず嫌いじゃ」

「……絶望的な未来しか見えない」

「料理は却下だね。……んー、プレゼントって言っても難しいね」

うんうん唸る僕達。

なんとか頭を捻るも中々良い考えが浮かばなかった。

お昼休みも残り少ない。

できればプレゼントの品ぐらいはこの場で決めてしまいたいところなんだけどなぁ。

「根本的な問題なのじゃが」

秀吉が腕を組みながら重たい顔色で言葉を紡ぐ。

「そもそもワシら三人で女子のプレゼントを考えるというのがそもそも無理なのではないか？　やはりここは適材適所ということで同じ女子である姫路か島田にも聞いてみ

るべきじゃろう」
「何言ってるのさ。女子ならここにいるじゃないか」
「……（こくこく）」
「もう突っ込まんぞワシは。ともかく、一度ワシらだけでなくほかの者の意見も聞いてみるべきじゃろう」
「意見か、うーん」
　秀吉の提案に考えを巡らせる。
　確かに秀吉だけでなくほかの女の子の意見もほしいところだ。
　工藤さんや霧島さん辺りなら木下さんと同じＡクラスだし日ごろからそういう話もしてるかもしれない。
　そんなこんなしていると、今度はムッツリーニが口を開いた。
「……いっその事木下優子に直接聞けば良いのでは？」
「できればそれは最終手段にしたいな。僕達のやろうとしてることがばれるかもしれないし」
「そうじゃな。取り合えず今はほかの意見も参考にしつつワシら三人を中心に姉上へのお詫びの品を考えるという事で良いのではないか」
「だね」

「……了解」
三人で目を合わせながら頷きあう。
それを見計らったかのように、予鈴のチャイムが学校に鳴り響いた。
次は鉄人の授業だ。絶対に遅れるわけには行かない。
「それじゃ、くれぐれもよろしくね二人」
「……任せておけ」
「ワシは家族の問題でもあるからの。その為の協力は惜しまぬぞ」
「……ありがとう」
二人のやさしさに僕は歓喜のあまり思わず涙目になりそうになった。
ああ、友情って素晴らしい。
僕は今ほどこの二人と友達になってよかったと思った事はないよ！
「……でも、秀吉に告白したことはまた別問題、この件は法廷で裁きを下す（ぎらり）」
「せっかく芽生えた友情が台無しだよ！」

第６話

そんなわけで僕達は詳しい事情は伏せたまま他の人の意見を聞いていた。
ここでは取り合えず個々のほしいものについて質問してみた。

ｃａｓｅ１：島田美波

「え？　ほしいものはあるかですって？　……んー、そうね。もう秋になるし新しい服とかかしらね」

ｃａｓｅ２：姫路瑞希

「ほしいもの……、ですか？　特には……明久君がくれるなら何でも嬉しいです」

ｃａｓｅ３：工藤愛子

「そうダネ～。くれるのならボクは何でも受け取るよ。勿論いろんなところに穴の開いたスク水でもＯＫダヨ～？」

ｃａｓｅ４：霧島翔子

「……雄二の愛」

ｃａｓｅ５：清水美晴

「お姉さまからの愛に決まっていますわ！」

ｃａｓｅ６：玉野美紀

「アキちゃん！　というわけで今ここに偶然フリフリのゴスロリがあるんだけどせっかくだから着てみましょう！」

☆

「……以上」
　これは予想外の結果だ。
「驚くぐらい参考になるものがないねえ」
「なんとも偏った意見ばかり集まったのう」
「その半分が愛っていうのがある意味すごいよね。一部できれば聞かなかった事にしたいものあるけど」
「統括すると、やはり想い人からのプレゼントが一番ということじゃな」
「それってもう完全に詰んでるって事だよね」
　木下さんに好きな人がいるかはわからないけど、仮にいたとしても僕じゃないことは確実だ。
　ノートパソコンを操作していたムッツリーニが振り返って言う。
「……木下優子の想い人を調べるのか？」
「調べるのは構わんが、仮に姉上に好きな人がいたらどうするのじゃ？」
「そりゃあ勿論、ねえムッツリーニ」
「……（こくん）」
「抹殺だよね」

「……当然」
「だと思ったのじゃ」
Ａクラスで成績優秀、容姿も文句なしの木下さんから想われる男子なんて判決も余地なく死刑だ。
票を取ったらきっと全校男子が大手を振って賛成してくれるだろう。
「学園内で殺人事件が起こってはさすがに拙いので姉上の想い人探しは却下じゃ。というか前提としてあの姉上に好きな相手がいるとは思えぬがの」
「家でそういう話とかしないの？」
「ないのう。学校でもそうじゃがワシと姉上はそもそもあまり会話をしないのじゃ。姉上も家にいる時は大抵自分の部屋に篭っておるしな」
「……兄弟姉妹とは得てしてそういうもの。俺達の年代では仲良しのほうが珍しい」
「そういえばムッツリーニも兄弟持ちじゃったな」
「……（こくん）」
秀吉の台詞に同意できる部分があるのかムッツリーニは深く頷いた。
「へぇ、じゃあ僕みたいに毎朝キスしてくる姉は珍しいんだね」
「……珍しいというか、世界中探しても玲殿一人しかおらんじゃろう」

「……ある意味レア」
　おかしいな。レアという響きがあるのに全然嬉しくない。
「なんだかどんどん話が脱線しておるぞ。今議論すべきは姉上へのプレゼントじゃ」
「まあそうなんだけど、何かいい案浮かんだ二人とも？」
「「……」」
　沈黙する秀吉とムッツリーニ。
　なんだかいろいろ盛り上がったけど肝心な部分で結局僕達は一歩も前進できていなかった。
　こうなればあまり気は進まないけど木下さんに直接伺う手段も考慮せざる負えない。
「……あまり女子と縁のない俺達が女子へのプレゼントを考えるのがそもそも無謀」
「それは前に言ったぞ。しかし数少ない女子の友人達の意見は対して役に立たぬと来てるしの。やはりここは姉上本人に直接聞いてみるのが妥当なのかの」
「逆転の発想だけど、女子と仲の良い男子って学園にいないのかな？」
「……そんな異端者は新学期初日のうちにとっくに淘汰されている」
「だよね」
「ワシとしてはその淘汰された人間の安否の方が気になるのじゃが」

「きっと桃源郷で幸せに暮らしてるよ」
「なんじゃそれは……」
世の中知らないほうが幸せの事もあるよね。
秀吉はポケットから携帯電話を取り出した。
「まあよい、いや良くはないがとりあえずこの件は保留としよう。とりあえず姉上にかけてみるかの」
「お願い秀吉、くれぐれも僕たちのことは内密にね」
「うむ、任せるのじゃ」
片手でいくつかのボタンを押して、秀吉は携帯を耳に当てた。
しばらくたつと相手の応答を待つコール音が僅かだけど僕たちにも聞こえてくる。
途端に僕は心臓がドキンと高鳴った。
不思議な緊張感が全身を支配し始める。いつのまにか無意識に手を握り締めていた。
『もしもし』
携帯も向こうからはっきりと声が聞こえてきた。
どうやら秀吉が通話モードをハンズフリーに切り替えているらしい。
秀吉は僕たちに無言で頷いた後、携帯に向かって声を掛け始めた。
「もしもし、姉上か？」

『そうだけど何？　何か用事？』
「用事というほどでもないのじゃが、姉上、今どこにおるのじゃ？」
『ん、図書室だけど』
「……」
　ムッツリーニは無言でノートパソコンを仕舞い僕は窓と教室の扉を全快に開く。
　勿論、何か感づいたお姉さんが僕達を追いかけてきた時にすぐに逃げ出すためだ。
　Ｆクラスの危険察知能力は伊達ではない。
「そうかそうか」
『??　何なの？』
「いやいや、何でもないのじゃ。それより姉上、唐突な質問なのじゃが今何かすごくほしいものとかはあるかの？」
『は？』
　怪訝な声が携帯から聞こえてきた。
『何よいきなり』
「実はワシの所属している演劇部の一人がもうすぐ誕生日での。部員のみんなでプレゼントを送ろうと考えておるのじゃ。しかし男のワシらでは女子は何を送れば喜んでくれるのかイマイチ分からなくてな。同じ女子である姉上の意見を聞いて見たくなっ

たのじゃ」
すらすらと秀吉の口から嘘の事情が出てくる。
ぶっつけでも台詞を一切噛まずに違和感なく言い切る辺り、秀吉の役者魂が垣間見えてくるようだ。
『へぇ、でも演劇部なら他の女子もいるんじゃないの？』
さすがに手放しでは信用してくれないらしいのかお姉さんはさらに問い詰めてくる。
が、秀吉は臆することなく答えた。
「意見は数は多い事に越した事はないじゃろう。それに姉上の言葉ならワシも信用できるのじゃ」
『欲しい物……ねぇ』
うーん、と携帯の向こうで悩む声が聞こえてくる。
どうやら秀吉の偽情報を信じてくれたらしい。
僕は正面に立つに秀吉に無言でガッツポーズをし賞賛を送った。
「ようやく一歩前進だね」
「……（こくん）」
これで秀吉のお姉さんの欲しがるものを聞き出す事に成功し僕がそれを用意してお姉さんに送れば完璧だ。

僕の中に息づいた不安や緊張感が潮が引く様に薄まっていく。
いや寧ろ女子に贈り物をするという事に対しての高揚感が湧き上がっていた。
一体木下さんは何が欲しいんだろう。
『アタシが欲しいのは――――』
「うおおおおお!!　明久どけぇーーーー!!!」
「っ!?」
いきなり現れた雄二が突風もかくやというスピードで僕たちの傍を通り過ぎていった。
な、何だ!?
驚きのあまり言葉をなくした僕たちを置いてけぼりにして、今度は廊下から霧島さんが現れた。
「……雄二。逃がさない」
「くそっ!?　もう追いついてきやがった。もうここしか逃げ場がねえ」
言って、雄二はさっき僕が開けておいた窓枠に手を掛けて外に飛び出した。
ていうか、ここ三階だよね？
「ちょっ!?　雄二何してんの！」
「説明してる暇はねえ!?」

突き飛ばすような言葉と共に、一瞬で雄二の姿が掻き消える。
慌てて僕は窓へ駆け寄り顔を出すと遥か下の地面に雄二の死体はなかった。
どうやら外から隣の教室へ移ったようだ。
「……逃げられた」
僕と同じく窓から顔を出していた霧島さんは平坦な声で言った。
この二人、今度は何したんだろう。
『ちょっと、何の騒ぎ？　今代表と吉井君の声が――――』
しまった！　まだ通話が続いてるんだった!?
「すまぬ姉上！　また掛け直すのじゃ！」
『ちょっ！　ひでよ――』
ピッ
木下さんが何かを言う前に秀吉は強制的に通話を切った。
ええいもうちょっとだったのにぃ!?
「……今の優子？」
「あ、うん。ちょっと用事があって、霧島さんこそどうして雄二を追いかけてるの？」
霧島さんが雄二を追い回すなんて今更だけど、なんとなく問いかけていた。
僕の問に、霧島さんはスカートのポケットから何か４つ折にしたポスターらしきもの

を取り出した。
「……これを雄二と一緒に参加したくて」
「チラシかの、えーと、何々」
秀吉が霧島さんからポスターを受け取って広げる。
どこかで見た事あるような愛らしいマスコットが描かれたそれには、大きな文字でこう書かれていた。
「わくわく召喚獣体験ｉｎ如月ハイランド……。召喚獣じゃと？」
「……如月ハイランド。あの遊園地か」
「……そう。そこで明後日に試験召喚システムを使ったイベントがある」
「へぇ、そんなのあるんだ」
気になってさらに文字を追っていくとどうやら格闘ゲームという名目で召喚獣を使ったトーナメント大会を開くらしい。
使うのは普段僕たちに馴染みのある点数を武器に戦うものとは少し違って、その場で必要なデータを打ち込んでその場限りの簡易召喚獣を作って戦うシステムのようだ。
その仕様上、参加は誰でも自由であり貴方だけの召喚獣と出会うチャンスなんてキャッチコピーが大きく飾ってある。
「……大事なのは、その先」

霧島さんが指差す先には、優勝賞品の欄があった。
代表として僕が読み上げる。
『なお、今大会に優勝されました方には我が如月ハイランドの全アトラクションを無料で遊べる団体様一日フリーパスを進呈します』だって」
「なんだか前のプレミアムチケットを思い出すフレーズじゃのう」
「あー、確かにそうだね」
如月グループの陰謀により来場したカップルを強制的に結婚させるという横暴極まりないイベントを思い出す。
そういえばあれに参加したのも雄二と霧島さんだっけ。
「まさかこれも……」
「……いや、ウェディング体験は任意参加になったらしい」
いつのまにかノートパソコンを立ち上げたムッツリーニは如月ハイランドのＨＰを開いていてイベントページの項目を読み上げた。
任意でも参加できる辺りまだ如月グループは懲りていないらしい。
前回失敗に終わった霧島さんがこれを逃す手はない。確かにこれなら雄二も裸足で逃げ出すだろう。
「……今度こそ、私は雄二と添い遂げてみせる」

いつもと変わらない声質だが、瞳の奥には決して譲らないと言わんばかりの闘志の炎が燃え上がっていた。

第7話

再び雄二を追いかけ始めた霧島さんを見送った僕達はFクラスの教室内で円陣を組んで座っていた。

僕らの中心にはさっき霧島さんが置いてった如月ハイランドで行われる簡易召喚獣トーナメント大会のポスターがある。

僕は腕組をしながら重たい声色で言った。

「これ……ひょっとしたらチャンスじゃないかな」

「優勝商品のことじゃな」

秀吉の台詞に僕は頷いた。

「結局お姉さんの欲しい物は聞き出せなかったけど、これでもプレゼントとしては悪くないと思うんだ」

「まあ確かにあの遊園地のフリーパスなら姉上も満足するじゃろうが」

「……確実に手に入るとは限らない」

「そうなんだよね」

概要がトーナメントとある以上、当然それに勝ち残り優勝しなければならない。

「大会のルールとかってどうなってるのかな？」
「……少し待て」
　ムッツリーニがノートパソコンに向き直りページをスクロールさせる。
　やがて該当する項目を見つけたのか、モニターに記載させれている一文を読み上げた。
「……年齢制限は特になし。試合形式は二対二のタッグマッチで行われる。一人での参加も可能だが、仕様上参加は二人一組であることが望ましい。とある」
「ふむ、前の清涼祭のルールに似ているの」
「二人か、霧島さんが雄二を追いかけてたのってこれが理由なのかな」
「恐らくそうじゃろうな。まあ人数に関してはワシかムッツリーニが明久の相方として入れば問題ないじゃろう」
「……召喚獣の扱いに関しても俺達に分がある」
「ていうことは、問題は」
「対戦相手じゃな」
「うん」
　確実に難敵になるのは間違いなく霧島さんと雄二だ。
　雄二自身やる気はないだろうけど、学年主席の霧島さんのことだ。どんな手を使って

雄二をその気にさせるかわかったもんじゃない。
唯一の救いがあるとすれば、今回は点数によるパワーバランスが存在しないことだ。
その点でいえば、観察処分者の雑用で召喚獣を使っていて扱いに慣れている僕が少し有利なはず。この大会、決して勝てない勝負じゃないはずだ。
「でももし霧島さんが優勝したらどうなるんだろう」
「前回のウェディング体験の焼き増しになるのではないか」
「ははは、そうなったら今度はさすがの雄二でも逃げられないよね」
あの雄二の野性味に溢れた顔に苦汁に浮かばせながら霧島さんに許しを請う姿を想像する。
「……」
見たい。それはすごく見てみたい。
木下さんへのお詫びと命乞いも大事だけど、雄二の無様な有様も捨てがたい！　ああどうしようかなっ。
ここに来て僕の心の天秤がぐらぐらと揺れ始めていた。
「何をニヤニヤしておるのじゃお主は……」
「な、なんでもないよ！　大会頑張らないとね！」
「そ、そうじゃな」

この大会。勝っても負けても絶対面白くなる！
「……あんまり悩んでる時間はないぞ」
「え、何で？」
「……エントリーの締め切りは今日までだ」
「今日って……今日!?　シンキングタイムなし！」
「唐突じゃな。ＷＥＢ上でエントリーできるのかムッツリーニ」
「……（こくん）。だが登録には名前を書く必要があるから明久の他に俺か秀吉が出るのかをここで決めなければいけない」
「ふむ、そういうことならワシが出よう。姉上の問題はワシの問題でもあるからの」
「ほんと！　嬉しいよ秀吉」
「……そんなに喜ばれるとなんだか照れくさいぞ」
その照れた顔が最高に可愛いことに秀吉は早く気づくべきだと思う。
ともあれお姉さんへのプレゼントはこれで決定だ。
大会は明後日。協力してくれた秀吉とムッツリーニ、それに木下さんの為に頑張らないと。
「じゃあムッツリーニ。エントリーよろしく」
「……了解。三十秒で終わらせる」

カタカタカタッ。と目にも留まらぬ速さでキーボードに指を走らせるムッツリーニ。
これでエントリーは完了だろう。
しかし、何故か途中で一時停止したようにムッツリーニの手の動きがピタッと止まった。
「……??」
何かあったのか、何度も画面を見直しては眉を八の字に歪め始めた。
「どうしたのムッツリーニ？」
「……エラーが出て登録できない」
「なんじゃと」
モニターを見ると、確かに『登録エラー　入力内容を再度確認してください』というメッセージが出ている。
「ほんとだ」
「どこかに入力ミスがあるのではないのか？」
「……おかしい。入力ミスはないはず」
登録フォームへ戻りエントリーシートの内容をチェックしてみると、ムッツリーニの言うとおり特に記入ミスらしい箇所は見つからなかった。
??　どういうことだろう？

「どっかの文字が入力制限に引っかかっちゃたとかかな？　エラーの理由とか分からないの？」
「……（かちっ）」
　ヘルプのリンクをクリックすると、小さい吹き出しが現れ、中にこんな一文があった。
『「木下秀吉」様はすでにエントリーされております』
「秀吉がエントリー済み？」
「そ、そんな馬鹿な！　ワシは登録した覚えはないぞ！」
　信じられないといった表情で秀吉は驚いている。
　でも確かにエラー文には木下秀吉と書いてあった。
「同姓同名の誰かがいるってことなのかな」
「……かもしれない」
「どうしよう、これじゃ秀吉が出られないよ」
「ムッツリーニならどうなのじゃ」
「……やってみる」
　名前の欄に『土屋康太』と入力して確認ボタンを押す。
『エラー　「土屋康太」様はすでにエントリーされております』
「えぇっ!?　ムッツリーニまで！」

「……明らかにおかしい。俺も登録した覚えはない」
「うむ、もしかすると誰かがワシらの名前を使って勝手に選手登録をしているのではないか?」
「どうしてそんなことするの」
「わからぬ」
「……誰かが俺達の参加を妨害している」
「もしくは文月学園の生徒は参加できない。とか」
「それじゃと明久の名もエラーになるはずじゃろう」
「……文月学園の生徒のエントリー資格は特に記載されていなかった。秀吉の言うとおり学園の生徒が出られないというルールはないはず」
「じゃ、じゃあどうすればいいの?」
「ワシらの他に誰か一緒に参加してくれる人間を探すしかないじゃろう」
「……試しに知り合いの名前を入れてみる」
ムッツリーニは再びパソコンに向き直り、名前の項目を消して、そこにまた別に名前を入力する。
が、結果はどれも同じだった。
『エラー 「島田美波」様はすでにエントリーされております』

『エラー　「姫路瑞希」様はすでにエントリーされております』
『エラー　「坂本雄二」様はすでにエントリーされております』
「駄目じゃのう」
「雄二はすでに霧島さんがエントリーしちゃったのか、それともみんなと同じで参加できないのかわからないけど、どうしよう、これじゃ出られないよ」
「最悪一人で登録するしかないのう」
　そういえば二人でなくても個人でもエントリーはできるんだっけ。
　でもその場合相方はどうなるんだろう。
「一人で参加するともう一人はどうなるの？」
「……個人参加の場合は誰か別の個人登録をした選手とランダムにタッグを組まされる」
「優勝商品は？」
「……わからない」
「やはり二人同時登録の方がメリットは大きいというわけじゃな」
「でもどうしよう。……こうなったら最悪葉月ちゃんにお願いして――」
「……（かたかたかた）、……!?　明久、見ろ」
「どしたの？」

ムッツリーニの驚いた声に僕と秀吉はつられてモニターに目をやる。
そこには、これまでに見た事のない画面が表示されていた。
画面には
『参加者は「吉井明久」様。「工藤愛子」様でよろしいですか？』
という一文と、下部に登録ボタンがある。
「あれ？　できてる？」
「……試しに工藤愛子の名前を使ったらエラーを通り抜けた」
「ますます分からん。何故ワシらの名前は駄目で工藤の名前は通るのじゃ」
「久保君はどうなの？」
「……ふむ」
ムッツリーニが工藤さんの名前を消し空欄になった箇所に『久保利光』と打ち込む。
『参加者は「吉井明久」様。「久保利光」様でよろしいですか？』
「……いけた」
「つまり、理由はわからんが参加できる者と参加できない者がいるようじゃの」
「一体どうなってるんだ……」
「……分からない（かたかたかた）」
『参加者は「吉井明久」様。「木下優子」様でよろしいですか？』

「お、姉上でもいけるのじゃな」
「これで秀吉がお姉さんに変装すれば参加できるんじゃない？」
「最悪それでもしょうがないが、できれば避けたいのう、後でバレたらどんな目に合わされるか……」
「あはは、じゃあ間違ってもこれで登録なんてしないようにしないとね」
　これでエンターキーを押そうものなら大変なことなる。
　気をつけないと。
　がららっ
「吉井！　貴様昨日書庫の整理をしろと言ったのにサボっていたな！」
「うわぁ！　鉄人!?」
　驚いて立ち上がる僕
「……うっ」
　その時後ろにいたムッツリーニに軽くぶつかる。
　かちっ
　反動で前へ仰け反ったムッツリーニの手が偶然エンターキーをプッシュ。
　ピローン♪
『ありがとうございます。「吉井明久」様。「木下優子」様のご登録完了いたしました』

モニターに表示された参加登録完了の告知文。

「「あ」」

……やっちまった。

第８話

夜。

「えーっと……、ここはこうで――こっちは――」

僕は自室の机に向き合い、今日秀吉に返してもらった写真の修復作業に取り掛かっていた。

作業道具は八枚の破片と化した写真の残骸とセロハンテープ。

大きめのものは割りと簡単に引っ付けられるが、中には極小なものもあって修復には慎重に慎重を重ねて行わなければならない。

バラバラであったものを一つにするという作業は、まるでパズルのピースを徐々に埋めていく感覚に似ていた。

「でも、ほんとよく似てるな、秀吉とお姉さん。まあ双子なんだから当たり前だけど」

上半分ぐらいの接着を完了した辺りで、ポツリとそんな言葉が漏れた。

今の所完全に見えるのは顔だけだけど、まるで映し鏡のように写真の中の木下さんは秀吉になりきっていた。

当然、双子だけあって木下さんも秀吉と同じぐらい可愛い。

気を抜くと何時間も見てしまいそうになる。
「おっと、いけないいけない。今は修復作業に集中しないと」
顔を振って雑念を払い再び机に向き直り神経を研ぎ澄ます。
これはこれで中々難しい作業だ。集中しないと。
と、そこに背後から扉をノックする音が聞こえてきた。
この時間、僕の部屋を訪れる人物といえば一人しか思い浮かばない。
「アキ君？　今少しいいですか？」
「姉さん？　うん、いいよ。入って」
失礼します。と礼儀正しく僕の部屋に入ってきたのは、吉井玲……僕の姉さんだ。
「どうしたの姉さん？」
「はい。実はアキ君にお願いしたい事があるのです」
「お願い？　珍しいね。勿論いいよ。何なの？」
「明日、学校が終わった後でいいので書店によって買ってきてほしい本があるのです」
「本？」
「はい、これです」
姉さんがスボンのポケットからメモ帳の切れ端を出し僕に手渡す。
書店で買うものといったら漫画しか思い浮かばないけど、秀才の姉さんのことだから

きっと僕では読めないような外国の書籍を買うのだろう。
　えーと、どれどれ。
『狙え必中　気になる相手を一発撃沈！』
　……なにほん？
「……何これ？」
「ただのお料理本ですよ」
「これのどこらへんが料理本なの!?」
「どこかおかしいのですか？」
「いやおかしいでしょもうタイトル的に！　ていうか誰!?　誰を撃沈する気!?　大体なんだよ撃沈って！　一体これにはどんな料理が載ってるんだ！」
　というかこの題名で料理本って辺りこれを作った作者は頭おかしいでしょ！
「何を言ってるのですかアキ君。大事なのは中身です。何事も見た目や名前だけで判断してはいけませんよ」
「落ち着くんだ姉さん。これに限っては名前だけで見限ってもいいはずだ」
「アキ君の言うことも一理あります。確かにタイトルはそれっぽくないですが、評価は確かなものですよ。私だってきちんと調べてるんです」
「えぇー」

試しにネットで検索してみると確かに悪い評判はそれほどない。
異性向け、特にデートなどのお弁当、菓子類の作り方が多く載っているらしく女性に絶大な人気を誇っているらしい。
今だに信じられないけど、斬新な題名が返って人を呼んでいるのだろうか？
「分かりましたか？」
「まあ、姉さんが薦める訳はなんとなく理解したよ」
「ではお願いしますね」
「うん。でも姉さん、ちゃんと料理の勉強もしてるんだね」
「勿論です。アキ君が勉学に励んでいるというのに姉さんが怠けているわけにはいけません」
「……姉さんは料理より先に一般常識を勉強すべきだと思う（ぼそっ）」
「何か言いましたか？」
「な、なんでもないよ！」
「む、そう言われると返って気になります――おや？」
姉さんの視線が僕の下部付近、正確には机の上に広げられている写真（修復途中）に落ちた。
そして破片の一枚を手に取り口を開く。

「これは……どうしたのですか？」
「あ、ちょ……ちょっと事故があってバラバラになっちゃったんだよ。で今修復中なんだ」
「写真ならもう一度撮ればいいではないですか」
「できるならそれが一番なんだけど、そういうわけにはいかない事情があってね……」
「はぁ……よく分かりませんが、一度破れたものをここまで直すなんてよほどこの写真に思い入れがあるのですか」
「う……まあ」
　思い入れというか、どちらかというとハングリー精神だけど。
「とにかく大事な写真だったんだよ」
「なるほど、これは秀吉君……？　ではないですね」
「えっ!?」
　今なんて言った？
　姉さんから予想外な台詞が出て僕は思わず目を丸くした。
「おや、違いましたか」
「い、いや合ってるんだけど、姉さんどうしてこれが秀吉じゃないって分かったの？」
　秀吉からは親ですら時々間違えると聞いていたのにめったに秀吉に合わない、そのお

姉さんとはさらに面識のない姉さんがただ一見しただけで相違点を見つけるなんて。

姉さんの意外な眼力を見た気がした瞬間だった。

「んー、口で説明するのは難しいのですが……強いて言うのなら目ですね」

「目？」

目に個人の特徴なんて出るの？

「なんというか、あまり秀吉君に詳しい訳ではないですが、あの子は何があっても常に冷静に周りを見る事ができると思うんです。感情の波が安定しているといいますか」

「ああ、分かるかも。秀吉は基本的にポーカーフェイスだし」

「はい。でもこの写真の秀吉君はすごく何かに焦らされている気がして、それが私の中の秀吉君像に当てはまらなかったんですね。ぶっちゃけて言えばただの勘なんですけど」

「へぇ」

改めて半分だけ直っている写真を見直すと、確かにここに写っている秀吉（木下さん）は何かを急いでいるに見える。

気づかないと気づけないというか、普通に見るだけでは絶対に分からないような違いがそこにあるようだった。

「なんかそう考えるとほんとにそれっぽく見えるよ。すごいよ姉さん。僕見直しちゃっ

た」
「ふふふ。それほどでもないですよ」
　口ではそう言ってるけど顔は少し嬉しそうに微笑んでいた。
「でも、アキ君の特徴ならもっと分かりやすいですよ」
「へ、どゆこと？」
「はい、姉さんも興奮してしまうようなブサイクな顔をしている人は世界中を探してもアキ君だけです」
「さっきの僕の台詞が台無しだよ！　返して！　数行前の僕の気持ちを返して！　ていうかブサイクな顔に興奮するって何!?　そういう趣味なの!?」
「アキ君」
「何！」
「そんなに見つめられるとムラムラしてしまいます」
「変態！　変態！　変態!!」
　せっかく姉さんの意外な長所が分かってちょっと見直したのにどうして性格はこんなに残念なんだ!?
　この人は良い所もあるはずなのに、素が変人の所為で全部無意味と化している。
　結局、暴走した姉さんを部屋を追い出してから写真の修復作業を完全に終える頃には

すでに日付を跨いでしまっていた。
「あああ〜〜、終わったーー……」
座ったまま大きく伸びをする。
達成感からか肩の辺りからパキポキと骨の軋む音が妙に心地よかった。
数時間前までバラバラの紙切れと化してた写真だったものはなんとか一つの形に収まっていた。
「でもやっぱり元のやつと比べると粗暴だなぁ」
見栄えはお世辞にもいいとは言えない写真を手に取って見上げる。
結局、完璧に修復とはいかず、要所要所でテープを貼るときにいくつがミスをした所為で所々歪に歪んでしまった。
でもまあそこらへんは仕方ない。元通りにならないのは最初から分かってたし。
それよりも今は憂いを忘れ全身を満たす達成感に身を委ねてしまいたかった。
「うん、これはこれで悪くないし」
座ったまま首を回して壁に立てかけてある時計に目を向けると、すでに草木も眠る深夜になっていた。
「うわっ。もうこんな時間か」
予想以上に時間が経過していたことに驚く。

よほど集中していたのか不思議と一度も眠気が襲いかかってくることはなかった。
あと数時間で登校しなければいけないことに溜息を吐きつつ眼下の写真をぼんやりと見下ろした。
「木下優子さんか……」
割とＡクラスとは接点が多かったけど不思議と木下さんと話す機会はほとんどなかった。
無意識にそれを普通と思っていたし、今までそれに対して疑問を抱くようなこともなかった。
だから、一昨日書庫で木下さんが現れた時は心のどこかで木下さんのはずがないと勝手に思い込んで、あろうことか告白までしてしまった。
今思い返すと顔から火を噴くほど恥ずかしい。
木下さんにしてみればはた迷惑もいいところだろう。写真を破り捨てるのも致し方ない。
「謝ったら、許してくれるかな……」
一応お詫びを用意するとは言っても、それとこれとはなんだか別問題な気がするし。
正直現状じゃ面と向き合っても僕が関節を外されて悶え苦しんで終わるビジョンしか思い浮かべない。

普段は優等生然とした木下さんだけど、時々仮面が外れたように凶暴になるらしいし（秀吉談）。

やっぱり抜本的解決が必要だよね。協力してくれた二人の為にも、僕の命の為にも。

「……ふわぁ……」

大きなあくびが漏れ出る。

慣れない考え事をした所為か、はてまた集中が切れて疲れが出たのか途端に眠気が襲ってきた。

「……いいや。明日のことは明日考えよう」

僕は本能に身を委ねることにし思考を放棄して誘われるようにベッドへ歩み寄る。

ベッドで横になり毛布を被り部屋の照明を消す。

この眠気なら一度目を瞑ればすぐに落ちるだろう。

「はぁ、何で僕こんなに悩んでるんだろう……」

心地の良いまどろみの中で最後にボソっと呟く。

自分の生命の危機というのも勿論あるが、正直そんなのFクラスで過ごす中じゃ日常茶飯事なのでそれほど驚く事でもない。

じゃあ他に何があるのだろうか。これまでの行動を振り返り考えてみる。

そうして、意識が落ちる間際……いつかの書庫の記憶が脳裏を掠めた。

記憶を失う寸前。
彼女は今にも崩れてしまいそうな体を懸命に支えているように見えた。
小さな顔に大きな瞳、その整った顔立ちは夕焼けのように真っ赤に染まっていて、瞳は涙を堪えるかのように潤んでいた。
そして、その口元はまるで感動を飲み下すような小さい、けれどとても嬉しそうな笑みが浮かべられていた。
ああ……そうか。
きっと僕は、もう一度あんな見惚れてしまうような表情が見たいんだ。
モヤがかかったようにぼんやりとする頭で、ふとそんなことを思いつきながら僕の意識は今度こそ闇の底に落ちて行った。

第9話

「……なるほどな。昨日翔子が鬼みたいな形相で俺を追いかけてきたのはそれが原因か」

僕と秀吉とムッツリーニは一つの卓袱台に集まり雄二に昨日あったことを（勿論木下さんへのお詫びのことは省いて）説明した。

「待て雄二よ。お主は霧島が何をしようとしていたのか知らなかったのか？」

「知らん。昨日廊下の突き当たりで翔子にスタンガンで気絶させられた後、目覚めたら全身をロープで縛られてて翔子の家の床に転がされていた」

「……霧島さん。相変わらず過激だね」

原因の一端は僕にもあるにせよ、時々雄二の不憫さに同情してしまう。

「だがお前らの話によると俺はエントリーできなかったんだろ？　なら安心だ」

「まあそうなんだけど」

「……先に霧島が登録してしまった可能性もあるが」

僕たちがそんな危惧を懸念するが、雄二は余裕のある態度で返してきた。

「はぁ？　ないない。機械音痴のアイツがそんな発想抱くわけないだろ　ムッツリーニ

じゃあるまいし」
「確かにエントリーができたのはムッツリーニの発想のおかげだけど」
「だろ。心配するだけど時間の無駄だ」
　そう言われればそんな気もしてくるけど、なぜだろう。コイツがそんなことを言うと盛大な地雷にしか思えない。
「それよか、俺のことよりお前らの方が大変じゃないのか？　秀吉と間違えて姉貴の方で参加申請しちまったんだろ」
「うっ……」
「……面目ない」
　木下さんを参加登録させてしまう原因を作った僕とムッツリーニは申しわけなさそうに小さくなっていた。
「過ぎた事を悔やんでも仕方なかろうて、ともかくなってしまった以上ワシが姉上に扮して明久の相方として参加するしかなかろう」
「妥当だな」
「そうだね。でもある意味予定通りだから結果だけみればまだ良かったかも」
「そうじゃな。問題は姉上にバレないことであって万が一にも姉上が如月ハイランドに来るようなことでもなければバレる心配はないじゃろうしの」

なあんだ。一時はどうなる事かと思ったけど大丈夫そうだね。
秀吉のお姉さんの変装の出来は新学期初日の試召戦争で実証済みだし、何より可愛いから問題ない。
安心して思わずホッと一息吐く。
「ここに来るまでいろいろあったけど、本番頑張ろうね秀吉」
「うむ、必ず優勝するぞ」
決意を新たにし秀吉と顔を合わせる。
……その時、何故だか秀吉にお姉さんの面影を見た気がした。
「……」
「ん？　どうしたのじゃ明久？」
「えっ!?　な、なんでもないよ！　ちょっとぼーっとしちゃった」
「大丈夫なのか？　本番は明日じゃぞ」
「大丈夫大丈夫。体もぴんぴんしてるし。頭もすっきり快調だよ。それによく言うでしょ。バカは風邪引かないって」
「今自分がバカだって認めたな」
しまった。つい口が滑って。
「ち、違うんだ！　今のはちょっとした言葉の綾で――！」

「まあ明久がバカなのは今更だからどうでもいいが」
どうでもいいとは何だ。　まるで僕がバカであるのが当たり前みたいじゃないか。
「翔子は置いておくとして、何でお前らまで遊園地のイベントに参加するんだ？　フリーパスがそんなにほしいのか？」
雄二の質問につい背筋が伸びる。
木下さんの件は僕たちだけの秘密だ。
当然、雄二に勘ぐられるわけにはいかない。
まずロクなことにならないからね。
「ま、まあね。無料で一日中遊園地で遊べるなんてすごくお得じゃない。だからとりあえずほしいなぁって思って」
「……お前、俺に何か隠してないか？」
ちぃっ。さすが雄二。こういう時だけはいやに鋭いっ。
「か、隠してることなんてあるわけないじゃないかっ。まったく何言うのさ雄二は」
「そうか。ということは差し詰め姫路か島田をデートにでも誘う魂胆か？」
「まあそんなとこ……かな。だからなるべく外部には漏らしたくないだけなんだ。あははは」
「なるほどな」

「分かってくれた？」
「ああ、勿論だ。俺達は友達だろ」
にかっと口を三日月にして笑う雄二。
普段は野蛮で卑怯で幼馴染を無碍にしてほくそ笑む外道野郎と思ってたけど、コイツにも友達を信じられる一面もあったんだね。
男の友情って素晴らしい。
「おーい、姫路ー！　島田ー！　明久が如月ハイランドのフリーパスでデートに誘ってくれるらしいぞー」
「シャラーーーップ!!」
慌てて雄二の口を封じる為蹴りを入れる。
が、まるで予期していたかのように雄二はひらりと身を屈めて回避した。
この野郎！　なんてことを！
「おっと何する明久。俺が〝友達として〟お前の恋を応援してやろうとしてるのに」
「あはは、ありがとーねゆうじー。でも気持ちだけで十分だよー」
「遠慮すんなって（ごす）」
「遠慮なんてしてないよ（がしがし）」
「またまたぁ（バキバキ）」

「いやいや（ガンガン）」
「「……!!（ガンのくれあい）」」
「どんな状況でもお主らのやることは変わらんのう」
「……ワンパターン」
　睨み合う僕らの傍で秀吉とムッツリーニが密やかに呟いていた。
「どっちにせよ島田と姫路はＡクラスに行ってるから呼んでも来ないがな」
「な、なんだぁ。焦って損しちゃった――じゃないよ！　よくも騙してくれたな雄二！」
「騙される方が悪い」
　なんて事を、やっぱり野蛮なコイツに心なんてなかったのか。
「くっ、ならば目には目を！　霧島さーーーん！」
「はっ、ついにバカが感極まったな。そんな叫んだ程度でアイツが来るわけが――」
「……呼んだ？」
「なぁっはぁっ!?」
　背後から霧島の声が聞こえバッタのように飛び引く雄二。
　おお、ほんと来ちゃった。
「翔子！　お前何しにきやがった！」
　肩で息をしながら焦りの形相で問いかける雄二。

「……雄二が私の名前を呼んだ気がした」
「確かに名前は言ったが呼んだ覚えはねえよ！　つかＡクラスにいるお前に何で聞こえてんだ！　テレパシーでもあんのか！」
「……雄二のことなら、何でもお見通し」
「怖えからやめろ！」
身体のあちこちを弄る雄二。
きっと仕掛けられた盗聴器でも探しているんだろう。
丁度良い。せっかくだしあの件のことでも聞いてみよう。
「霧島さん。昨日言ってた如月ハイランドの召喚獣大会はちゃんとエントリーできたの？」
問いかけてみると、霧島さんは顔に若干影を落としながら言葉を紡いだ。
「……それが、何故か雄二の名前が登録できなかったの」
「やはり霧島のところでも同じことが起こっておったようじゃの」
やっぱり、霧島さんのところでも同じ現象が起きてたんだ。
僕達が頭を悩ませている中、霧島さんの言葉を聞いて、雄二があからさまに胸を撫で下ろしていた。
「そうかそうか。ま、出来なかったものは仕方ないな。諦めろ翔子」

「……うん。――――だから最終手段に出た」
「は？」
なんだろう、最終手段って。
疑問が口に出る前に、霧島さんは雄二から視線を切って僕に顔を向けてきた。
「……それより吉井に聞きたいことがある」
「え？　僕？」
「……うん。吉井、優子に何かしたの？」
「うぇっ!?」
意外な名前で出たことに思わず変な声が出た。
な、何でここで木下さんの名前が出るの!?
咄嗟に秀吉の方へ振り向くが、秀吉は首を横に振って目で知らないことを告げる。
内心が軽いショック状態になってしまったが、そんなことはお構いなしに霧島さんは言葉を続けた。
「……昨日から優子に元気がない……気がするの」
「元気？」
「……（こくん）なんだか上の空の状態で私が話しかけても反応しないことが多い。さっきも授業中にぼーっとしてて先生に叱られてた」

「そうじゃったのか。家では割と普通なのじゃがの」
「……それで心配になってこっそり優子に聞き耳を立てていたの」
そこで盗聴器を仕掛けない辺り、雄二と木下さんの扱いの差が見て取れる。
「……そしたら、ぽつっと独り言で『吉井君』って言ってた。だから吉井なら何か知ってるかと思って」
昨日電話もしてたし、と付け足して問うてくる。
知ってるも何も元凶です。とはさすがに言えない。
「そうなんだ。ほ、ほかには？」
「……。そういえば、何故かいつも使ってる消しゴムをカッターで細切れにしてた」
「なんでっ!?」
「……料理がなんとか……あと、これならやれるとも言ってた気がする」
「――っ！（ダッ）」
「あ、明久！　どこへ行くのじゃ!?」
「……落ち着け！」
「離して二人とも！　僕はもうここにはいられないんだ！」
秀吉とムッツリーニに抑えられながら必死にもがく僕。
何故だ。どうして僕を止めるの。死の恐れから逃避するのはまっとうな生存本能

じゃないか！
「何だ明久。お前木下優子と何かあったのか？」
「べ、別になんでもないよ。ただちょっといろいろあって怒らせちゃっただけで……」
「ほぉ。……はははぁん、なるほど。それで例の大会に参加するわけか」
　何やら意味深な笑みをこちらに浮かべてくる雄二。まさか気づかれたか？
「ちょっ!?」
「翔子。お前の悩みを解消するてっとり早い方法があるぞ」
「……ほんとに？」
「ああ、今からコイツを木下優子と引き合わせればいい」
　あっけらかんと言う雄二。なんてことを！　そんなことをしたら僕の命が先に積んでしまうじゃないか！
　コイツはさっき何を聞いていたんだ！
　明らかに面白がっている雄二に殺意の視線を飛ばす。
　それを澄まし顔で受け流した雄二はアイコンタクトでこう語ってきた。
（さっさと死んで来い）
「この野郎クズ雄二ーーーー！」
　喉の底から張り裂けそうな勢いで罵声を飛ばす。

全身から漏れ出るほどの憤怒で暴れだそうとするが、今だに僕を抑えている秀吉とムッツリーニの所為で身動きが取れない。
ならばせめておもの手段として力の限り雄二を睨みつける。今なら視線で人が殺せそうだ。
そこで唐突に黒板の上のスピーカーから校内放送が流れてきた。
『えー、生徒のお呼び出しを申し上げます。2―Aの霧島翔子さん、木下優子さん。2―Fの坂本雄二さん、吉井明久さん。以上の方は至急学園長室までお越しください』
それは紛うことなき学園長からの呼び出しだった。
「……呼ばれた」
「学園長が僕達に用事？　なんだろう」
「どうせろくなことじゃねえだろ」
とか言いながら雄二ががっしりと僕の肩に手を回してくる。
「え？」
「それより聞いたか明久。丁度良いじゃねえか。木下優子も来るんだってよ。せっかくだ、ここで仲直りも澄ませておけ」
「ちょっ!?　まっ!?　離せ雄二！　今の状態じゃ仲直りよりも前に僕の生命活動が終わってしまう！　ていうかむしろそれが狙いか！」

「行くぞ翔子」
「……うん」
「うおおおおおっ!?　離せバカー！」
　全力が暴れるがそこはさすが雄二。ぴくりともしない。
「ひ、秀吉！　ムッツリーニ！　僕を助けて！」
「……情けは人の為ならず。これも運命、受け入れろ明久」
「嫌だー!?」
「済まぬがワシに雄二に対抗できる力は持ち合わせておらぬ。まあせめてもの抵抗として、ほれ」
　懐から何やらお面を取出し僕の手に収める。
　なるほど、これで顔を見えなくすれば大丈夫だね。
「って無理に決まってるでしょー!?　どうやってもこれじゃ隠し通せないよ！」
「遺言は済んだか？」
「待って！　タンマ！　ストップ！　まだ言いたいことが沢山――！」
「面倒くせえ。もう行くぞ」
「待ってせめて弁解くらいは言わせてぇー!?」
　ずるずると雄二に引きずられながら苦言を叫び続ける。

だが必死の抵抗も空しく、僕は学園長室へ連行されることと相成った。

……どうか、無事明日の朝日が拝めますように。

第１０話

そんなこんなでやってきた学園長室。

――コンコン

『入ってきな』

「「失礼します」」

礼儀正しく挨拶した後、きびきびとした動作で入室する霧島さんと木下さん。

そしてその後ろから付いていく僕達。

中にいた学園長は僕達を見回した後、仰々しく口を開いた。

「よく来たねお前達」

「来たくなかったけどな」

「相変わらず口の減らないガキだねお前は――少しはＡクラスの二人の礼儀正しさを見習ったらどうだい」

「そうか。……じゃあ――失礼しますババァ」

「誰もババァなんて言ってないさね！」

まったく、と机に頬杖を付いて嘆息を吐く学園長。

上に立つ人間は何かと苦労が多いみたいだ。
その学園長の眉根にしわの寄った目が、今度は僕の方を捉えた。
「……で？」
「なんですか？」
「アンタのその面はなんだい？　ついに自分のバカさ加減を自覚して素顔を晒すのが恥ずかしくなったのかい？」
なんてことを、生徒を罵倒するなんてそれが学園の長の言葉か。
実は今僕は教室を出る前に秀吉に手渡されたお面を被っているんだけど、無論こんなことで正体を晒すほど僕も甘くない。
「な、なに言ってるのかわかりませんな。ぼ――私は吉井明久の代役として来た者です――いや、来たものだ」
「ほお、じゃあ吉井はどこに行ったんだい？」
「よ、吉井君は急用とかで早退しました」
「そうかい。それで？　代理で来たっていうアンタは一体どこの誰なんだい？」
「ぼ――私は「面倒くせえな。さっさと取れバカ」って何するんだ雄二！」
いきなり上からお面を引っとられる。
この野郎、せっかく秀吉が顔隠しにくれたのにこれじゃ正体が隠せないじゃないか。

「お前がうじうじしてるのが気持ち悪いんだよ。言いたいことがあるならさっさと言っちまえよ」
「簡単に言わないでよ。そんなこと言ったって……」
恐る恐る横目で木下さんの方を見やる。
すると、向こうもこっちを見ていたようでばったり目が合い。
「……ふんっ」
そっぽを向かれた。
ああ、駄目だ。これは完全に嫌われてる。
もはや顔も合わせてもらえないなんて。
なんだろう。何故かわからないけどすごくショックな気分だ。
「……？」
何か気になることでもあったのか、霧島さんは首を振った木下さん方へ回りこんでいった。
「な、何代表……」
「……優子。顔が真っ赤」
「!?　べ、別に何でもないわよ！」
木下さんはぐいぐいと霧島さんの背中を押して元の位置へ戻そうとする。

顔が真っ赤って……、つまりそれだけ怒ってるって事？
「……そろそろ話を始めていいかい？」
「あ、すいません。どうぞ」
「ったく、私情は他所でやっとくれ。アタシらも暇じゃないんだ」
「……それで、私達を呼んだ理由はなんですか？」
「この学園でアンタ達だけが如月ハイランドの模擬召喚獣大会にエントリーしているからだよ」
「え？」
予期しない方向からの話題が出て思わず驚きの声が漏れた。
どうしてここでその話が出るんだろう。
「一度登録したアンタ達なら分かるだろう。何故か一部の人間がエントリー出来ないことを」
「っ、それは！」
「ちょっと待てババア！　俺は参加した覚えはねえぞ！」
僕の言葉を上書きするように、雄二が声を張り上げた。
「明久と翔子の話じゃ俺はエラーになって登録できないはずだろ」
「そうさね。それはこっちでも確認したさ」

「じゃあどういうことだ。何で俺までここに来る必要がある」
「百分は一見にしかず。これを見てみな」
学園長は何やらノートパソコンを操作し初め、それを僕達の方へ向けた。
どうやら参加者の一覧をまとめた資料らしい。
そして、その中に記載されている参加者の中に雄二の名前があった。……雄二の名前だけは。
メンバー１：霧島翔子
メンバー２：霧島雄二
「うおおおお!?　なんじゃこりゃぁっ！」
……いつのまに雄二は籍を入れたんだろう。
「……坂本じゃできなかったら、私の苗字を使ってみたの。そうしたらうまくいった」
「使ってみたじゃねえよ！　なんてことしてくれんだ！」
「……雄二。一緒に頑張ろう」
「抗議してんのに無視か！　人の話聞けよおい！」
「ああなるほど、だから雄二と霧島さんが呼ばれたのか」
「まあそういうことだね。正直名前を詐称するのはあまり褒められた行為じゃないんだが、状況が状況だ。使えるものは使わせてもらうさね」

「ふざけんなバカ！　大体偽名って明らかに問題あるだろ」
全力で抗議する雄二。よほど霧島さんと一緒と出たくないらしい。
変なヤツだ。霧島さんみたいな綺麗な人が一緒に参加してくれるのに嫌がるなんて。
僕なら何が何でも参加するのに。仕方ないな。
「雄二」
「明久も言ってくれ！　偽名は駄目だってな」
うるさい声を上げる雄二の肩をポンと叩く。
「バレなきゃ犯罪じゃないんだよ」
「黙れクズ野郎」
ふん、いい気味だ。
「あの」
手を上げてそう言ったのは今まで口を開かなかった木下さんだった。
「模擬召喚獣とか如月ハイランドとか話がさっぱりわからないんですけど」
「？　何を言ってるんだい。アンタも吉井と一緒に参加してるじゃないか」
「え……？」
今度こそ木下さんは目を丸くして驚いていた。
や、やばい。それは僕とムッツリーニが間違って登録してしまったやつだ。

バレなきゃいいと思って安心してたのにまさかこんなところに落とし穴があるとはっ。

じわりと背筋に冷や汗が滴る。

これ以上勝手なことをして木下さんの機嫌を損ねるのは僕の寿命的によくない……っ。

「学園長！　それは違うんです！」

「あん？　何がだい」

「実は――」

～～事情説明中～～

「なるほどね。要は弟の方と参加しようと思ったら間違えて姉の方でエントリーしてしまったというわけかい」

「……はい」

「はぁ、どうしてアンタ達はいちいち面倒くさいことをするかね」

「すいません……」

さすがに悪いことをしたと思ってるので素直に謝る。

「じゃあ姉じゃなくて弟の方の木下に来てもらわないといけないわけさね」

「木下さんもごめんね。迷惑かけて。いや、ホントごめんなさい！」
頭を下げて真剣に謝る。
ここでの誠意の伝わり方がそのまま僕のこれから人生の縮尺に直結する。
だというのに、返ってくるのは無言の空気だけだった。
「……」
「あれ、木下さん……？」
「――えっ、何？」
考え事でもしてたのか、ハッとしたように顔を上げて口を開いた。
なんだろう。何を思案してたのか非常に気になる。主に僕の生命的に。
「いや、だから……」
「アンタを呼んだのは吉井のミスによる勘違いだったってことさ」
「えっ？　じゃあアタシは……？」
「どうやら無関係のようだし下がっていいよ。わざわざ呼び出してすまなかったね」
僕の代わりに学園長が口火を切っていた。
どうやら木下さんは無関係だと理解してくれたらしい。
死に底ないの老婆とはいえ、まだぎりぎり意思疎通は可能なようだ。
「今アンタから失礼なことを言われた気がするんだが」

「あはは、何言ってるんですが。別に妖怪みたいなババァでも言葉を理解できるんだなぁとか思ってないですよ」
「アンタには一度思い知らせておかないといかないかねぇ」
「そうだぞ明久。それじゃこの怪異学園ババァに失礼だろうが」
「アンタのほうがよっぽど失礼さね！」
　さっきから学園長は怒ってばかりだな。カルシウムが足りてないのだろうか。
「バカ二人がいると話がさっぱり進まないよ。これでもアタシは急いでるんだ。手間をかけさせないでほしいね」
「あー、如月ハイランドのイベントの件ですね」
「待て待て、俺は参加するなんていった覚えはあがぁっ!?」
　糸の切れた人形みたいにかくんと雄二の体が床に倒れる。
　その隣では、霧島さんがトランシーバーに似たリモコンみたいな機械を持っていた。恐らくスタンガンだろう。
　そして喋れなくなった雄二の代わりに霧島さんが口を開いた。
「……参加します」
「そ、そうかい」
　あの学園長もちょっと引き気味で答えていた。恐るべし霧島さん……っ。

「じゃあ取りあえず弟の方の木下を呼ばないとね」
「あ、じゃあ僕が呼びます」
携帯を取り出し秀吉の番号を呼び出す。
が、そこで意外な声がかかった。
「待ってください」
ついさきほど蚊帳の外を言い渡された木下さんだ。どうしたんだろう。
「なんだい木下」
「その大会って、秀吉じゃないと出場しちゃいけないんですか?」
「いんや、そんなことはないよ。寧ろアタシとしてはアンタに出てもらうほうが安心なんだがね。アンタは前回に学園の紹介ムービーを成功させた実績もあるからね」
「は、はい……。ありがとうございます……」
褒められたというのに木下さんの表情はどこか居心地が悪そうだった。
あ、そっか。確かのあの時の木下さんって……。
暗い気分を払拭する為か、木下さんは一つ咳払いをした。
「お願いがあるんですけど――アタシをその大会に出させてもらえませんか?」
「えっ!?」
驚きの声が僕の口から飛び出た。

な、何故無関係な木下さんが出場したいなんて言うんだ……っ。
別に優勝しても木下さんにメリットはないはずなのにっ!?
「それは良いが、どうして出たいんだい？」
僕を疑問を学園長が代弁して問いかけた。
「……」
木下さんの目が一瞬だけ僕を見据える。
え？　どういうこと？
僕が口を出す前に、木下さんは学園長と向き合って切り出していた。
「学園長の雰囲気からただ事ではないと思います。それをあんなバカな弟に任せておけません」
「……ふむ」
「お願いします」
頭を下げて懇願する木下さん。
「――いいだろう。元々その予定だったんだしねぇ。じゃあ参加するのは木下、吉井と霧島夫婦で決定だね」
「ありがとうございます」
「ま、まて……っ！　俺はまだ参加するとは……！」

「……雄二。しつこい（ビリビリ）」
「おい待てこれもうただの脅迫だぁーーーーーっ!?（ガクガク）」
霧島さんが意を唱える雄二を強制的に黙らせていた。
ちょっと不憫と思わないでもないけど、僕をここまで強制連行してきたんだから同情には値しない。
それよりも僕の方が問題だ。
まさか相方が秀吉から木下さんにチェンジするなんて、これじゃ優勝する意味がないじゃないか。
一体どういう目的で木下さんは出たいなんて言い出したんだ。
怪訝な顔を浮かべる僕を余所に、木下さんは学園長に先を促していた。
「それで、何があったんですか?」
「うむ、その前に事情をまったく知らない木下の為にまずはことの起こりから説明しないといけないね」
そうして、学園長の口から如月ハイランドの模擬召喚獣大会の概要が綴られた。

第１１話

学園長の話を要約すると、こういうことらしい。
ある日、最近落ち気味の学園の評判を上げる為、学園長は遊園地を利用した大規模な召喚獣のプロモーションを企画した。
その白羽の矢が立ったのは如月ハイランド。
如月ハイランド側としても、前回のウェディング体験の失敗を挽回したかったようで、文月学園からの要望はまさに渡り舟だったらしい。
そうして、企画は恙無く進行し、本来なら試験の点数を強さとする召喚獣を一個のアトラクションとして立ち上げられたのが模擬召喚獣大会というわけだ。
学園長の目論見通り、イベントには僕達も含めた沢山の参加者が集まった。
これで世間から注目されている学園の試験召喚システムに対する疑惑、疑念を解消。そして低迷していた学園の評判も上げる。まさに一石二鳥の作戦だったらしい。
その作戦はうまく行く筈だった。
……そう。
召喚獣の起動用プログラムを如月ハイランドに提供するまでは。

「プログラム？」
「そう。言わば召喚獣の起動システムともいうべき根本の土台さね」
「……どうしてそれが問題に？」
「システム自体に不備があったとかじゃないんだ。大事なのはその中に保存してあるデータだよ」
「データ？」
「そうだ。今回の企画用に実戦のデータがほしくてね。今期で一番召喚獣を使用しているFクラスの実戦データをサンプルとして向こうに送ったんだ。だがそこで少しミスをしてね……」
眉根にしわ寄せて苦々しく口にする学園長。
一体何をやらかしたんだろう。
話を聞いた限り、何をミスしたのか分からないけど。
話の要領がつかめない僕達を置いてけぼりにして、学園長は机の引き出しから変な柄の鉄製の輪っかみたいなものを4つ取り出して卓上に置いた。
何だろう。見ようによっては、今僕が腕につけている『白金の腕輪』に少し似ている気がする。
「何ですかそれ？　また新しい腕輪ですか？」

「まあ間違っていないね。と言っても今回のは今吉井と坂本が持っている白金の腕輪と違って急ごしらえで作った使い捨ての粗悪品だが。――明日の大会当日、お前たちにはこの『潰滅の腕輪』を装備して戦ってほしいんだ」
「??　どうしてですか?」
「これはね。模擬召喚獣大会のシステムに保存されている『あるデータ』を消去する為の腕輪なんだよ」
「消去、ですか。　どうしてそんなことを」
　木下さんが控えめな調子で学園長に問いかける。
「さっきの話に戻るけどね。アタシが試験用として向こうに送ったデータにはＦクラスの個人情報が混じっていたんだよ」
「!?」
　学園長の言葉に霧島さんと木下さんが目を剥いていた。
　え?　それの何がおかしいの?
「Ａクラスの二人は理解してくれたみたいだね」
「あれ?　わかってないの僕だけ……?　どういうことなのさ?」
「アンタの残念の頭にもわかるように丁寧に説明するのは骨だねぇ」
　今僕は馬鹿にされた気がする。

なんてことを思う僕を置いて、学園長を話を続けた。
「一つ問題だが、召喚獣が召喚者にそっくりな造詣になるのはなんでだと思う？」
「はい？　えーっと……なんかよくわからないすごい技術を使ってバーン！って感じでできてるんじゃないですか？」
「……小学生みたいな回答だね」
なんてことを。
「召喚獣のオブジェクトをクリエイトするのに必要なのは召喚者の身長や座高、視力や聴力といった五感。女子の場合はスリースタイルもだね。それにスポーツテストで図る身体能力。そしてもっとも重要な各教科の試験の点数。その人間のもつあらゆる要素、情報が必要なんだ」
「ふむふむ」
「つまり、召喚獣というものは、その召喚者に関するすべての情報が詰った架空の質量の塊なんだよ。当然管理レベルだって並みのセキュリティじゃない。だが――もしそれが外部に渡ったらどうなると思う？」
「そりゃあ個人情報が漏れて大変――あっ！」
「わかったようだね」
納得した風な学園長の前で、僕はじわりと頬に冷や汗が垂れた。

実戦サンプルとして如月ハイランドに提供したＦクラスの戦闘データの中にＦクラス全員の個人情報が混入しているなんて。
つまり僕達が受けたテストの点数や身体測定、スポーツテストの結果がすべて如月ハイランド側に見られ放題ってことじゃないか。
なんてミスをやらかしたんだ。この老害ババァ。
「――あ、でも別にＦクラスなら見られても大丈夫なんじゃあ」
僕達のクラスメイトに今更点数に劣等感を持つ人間はいないだろうし。
すでにＦクラスは点数とか常識とかそういう次元を逸脱している。
が、学園長飽きられたように溜息を吐きながら、首を左右に振った。
「ほんとバカだねアンタは、問題は個人がどうのこうのじゃない。『生徒の情報が外部に流出する』ということが問題なんだ」
「……文月学園は注目を浴びている試験校」
「ただでさえ世論や風評に弱いウチがもし在校生の個人情報を外部に漏らしましたなんてことになったら、最悪閉校ものよ」
学園長に霧島さんと木下さんが続いて言葉を紡いだ。
「あっ、じゃあ雄二や秀吉が登録できなかったのって」
「恐らく内部に保存されているサンプルデータが邪魔してるんだろう。それを向こう側

が気づいているかどうかはわからんが」
「けどそれじゃあどうして吉井君だけ問題なくできたんですか？」
「吉井のものだけは送ってないからさ。物理干渉のある召喚獣を参照しちまったら、イベント自体が大変なことになるからね」
「……ああ、この間の召喚獣野球みたいになるわけか……」
　体育祭の時に召喚獣を使った野球大会をした際、学園長の勝手な仕様変更ですべての召喚獣に物理干渉、ならびのフィードバックが適応されマウンドが死屍累々になったことを思い出して思わず青ざめる。
「そういうことだよ。だから、そうなる前に如月ハイランドに保存されてしまったウチの生徒のデータをこの腕輪を使って消去してほしいのさ」
「話はなんとなくわかりましたけど、具体的にどうすればいいんですか？　これも何か合言葉を言って発動させればいいんですか？」
「いや、これは向こうで召喚獣を召喚すれば自動的に発動するから大丈夫さ。……だが少しやっかいな条件付きなんだ」
「……条件？」
「召喚獣っていうのは一体だけでも膨大な容量がある。それをクラス一つ分となると腕輪一つではまかないきれないんだ」

「なるほど、だから４つあるんですね」
「木下は察しがよくて助かるよ。如月ハイランドのサーバーにあるデータを完全消去するには、四人で同時に腕輪を発動させなければいけないんだ」
「僕達と雄二達が戦う時ってことですか。でもそれって割と運任せじゃあ」
　そもそも僕達は雄二が対戦で当たる確立もわからないのに。
　が、僕の不安要素も織り込み済みだったのか、学園長は机の引き出しから白い紙を一枚取り出して僕達に見せてきた。
「そこは大丈夫さね。対戦表はすでにここにある。これだと決勝戦にアンタ達が戦うようになってるからね」
「あーなるほど……って全然大丈夫じゃないじゃないですか!?　つまり僕達が絶対に勝ち残らないといけないって事でしょう！」
「なんだい。初めから負けるつもりで参加したのかい」
「そういうわけじゃ……」
「なら問題ないじゃないか。アンタ達は学校で召喚獣を使用している分操作慣れしてるだろう。他の参加者に比べてアドバンテージはある。変に手加減をしてミスでもしない限り負けることはないだろう」
　それはその通りだけど、学園長はもっと根本的な問題を忘れている気がする。

「……要するに私達が勝ちあがればいいんですね」
「要約するとそうだね。ただし、この『潰滅の腕輪』を装備した状態でね。タイミングが来ればあとは腕輪が勝手に召喚獣を通じてサーバーへ進入してサンプルを消去してくれるよ」
あっけらかんと言うけど、それってつまり如月ハイランドのメインコンピュータをクラッキングしろってことじゃあ……。
今も横で寝てる雄二じゃないけど、これこそ言い訳の余地のない犯罪じゃないの？
僕と同じことを考えたのか、それともまた別の疑問があるのか霧島さんと木下さんは学園長に質問を返した。
「……一つ質問があります。どうして、それを私達にやらせるんですか？」
「そうですね。問題があったのなら直接如月ハイランドに連絡して事情を説明した後にもう一度データを送り直してもらえばいいんじゃないですか？」
「……それができたら苦労はしないんだけどねえ」
苦味を噛み潰すように学園長はぼそっと呟いた。
「霧島と木下は知らないが、吉井、前の清涼際の時に竹原がしていたことを覚えているかい？」
「竹原って確か、教頭先生ですよね。そりゃまあ」

竹原教頭は今年の清涼際の時、三年の常夏先輩と結託して召喚大会の優勝商品の不備を理由に学園を陥れようとした人物だ。

忘れるわけがない。あの所為で姫路さんと美波と秀吉、それに美波の妹の葉月ちゃんが大変な目に合うところだったんだから。

この話の全容を知っているのは一部の先生と僕や雄二と秀吉とムッツリーニだけらしいけど。

話の内容がわからない木下さんと霧島さんは過去を振り返っている僕と学園長を交互に見て、首を傾げていた。

「何の話なんですか？」

「学園を快く思わない人間はどこにでもいるということさ。学園内にも、――当然学園外にもね。だから余計な情報は与えたくないんだ」

「???」

「――とにかく、事は内密に行わないといけない。当然他言は無用だ。いいね」

珍しい学園長の真面目な表情に僕達は無言で首を縦に振る。

そして僕達はそれぞれ（雄二の分は霧島さんが）『潰滅の腕輪』を受け取った。

うーん、白金の腕輪があるとなんか付けづらいなぁ。

「学園長、模擬召喚獣大会って白金の腕輪は使えるんですか？」

「無理だね。あれは試験召喚獣をベースに設計してものだから、根幹が微妙に異なる模擬召喚獣には使えないよ」
なんだ。じゃあ明日は『潰滅の腕輪』だけ持っていけばいいんだね。
まあいくらなんでも召喚獣を二体も使うのは反則だったろうけど。
「じゃあ頼んだよ。くれぐれもその腕輪を壊さないようにね。そこで寝てる坂本にはまた説明してやっておくれ」
「……はい」
「わかりました」
「はぁい」
学園長に口々に返事を返し、学園長室を後にする。
その後、霧島さんはそのまま雄二を服の襟を持ち床に引きずりながらどこかへ行ってしまった。詮索はしないほうがいいだろう。霧島さんの為に。雄二の為に。
はぁ、なんだか面倒くさいことになっちゃったなぁ。
元々僕が如月ハイランドの模擬召喚獣大会に参加したのは一昨日に機嫌を損ねちゃった木下さんへのお詫びのはずだったのに。
それが木下さんまで参加する羽目になるわ、学園長のミスで変にプレッシャーがのしかかわるわ。ほんとてんてこまいだ。

これじゃ僕達が学園長の尻拭いをしてるみたいじゃないか。学園長には後でたっぷりと報酬をもらわないと。

もう一つ、プレゼントはどうしよう。木下さんも一緒に出る以上、もうフリーパスはお詫びの品として機能しなくなってしまっている。

ひょっとして、もう許してくれたりしてくれてないだろうか……。

……、

「な、何よ人の顔をじーっと見て」

「えっ？　な、何でもないよ！」

少しだけ顔を赤らめていた木下さんが目線を逸らして口を尖らせていた。

しまった。どうやら考えに没頭するあまり無意識に木下さんの表情を伺ってしまっていたらしい。

「……」

「……」

何故か無言のまま動かない僕達。ほんとはすぐにでも教室に鞄を取りに行って家に帰りたいのに足が鉛になったかのようにピクリともしない。何か話そうにも気の利いた言葉が思いつかない。

な、なんなんだこの気まずい沈黙は。謎の緊張感が体をどんどんと侵食していき脳内

を白く染め上げる。鼓動はどんどん高鳴っていき爆発するんじゃないと心配になる。視界がぐらぐらと揺れて床は今にも崩れるんじゃないかと錯覚を覚え始める。

ていうか何で木下さんも動かないの！　まさか今ここで僕を殺る気!?　誰か助けて！　くそう、これじゃ針の莚じゃないか。

そうだ！　会話だ。ここは会話で場を繋ごう。

何かいい話題は……そうだ。丁度いい疑問が一つあったんだ。これなら多少の時間は稼げるはず。

意を決し、僕は働かない喉と口に鞭を打って問いかけた。

「木下さん！」

「な、何！」

「前から気になってた事があるんだけど、聞いてもいいかな？」

「え、ええ。どうぞ」

「ありがとう。じゃあ遠慮なく。……木下さんって……歌うの苦手なの？」

「――――」

この時は純粋にもっと木下さんのことが知りたいという気持ちから出た言葉だったけど、後になって思うと、この時の僕は本当に馬鹿だったとしか言い様が無い。

第１２話

夕暮れになり、それに呼応するように赤と黄色のコントラストで彩られた廊下の一角。

無人の一本道には、必死の形相で会話を繋ごうとしている者と絶句した少女がいた。

というか、僕達だけど。

「な」

「……？」

僕が質問をした瞬間、木下さんは故障した機械みたいに淡々と断片的な呟きを繰り返していた。

口は小さく開き目は瞬きを忘れ大きく見開かれ、その頬は徐々に夕暮れに似た色を帯び始めている。

あれ？　僕何か変な事言ったかな……。ただ質問しただけなんだけど。

「あの、木下さん？　どうかした？」

「い、今――なん……て」

震える唇から恐る恐る確認するように言葉が紡がれる。

緊張でもしてるのか指先もカタカタと震えていた。
うん？　もしかして僕が言ったことが分からなかったのかな。
仕方ない。もう少し丁寧に状況も合わせてもう一度聞いてみよう。
「うん。前に文月学園の紹介ムービーを撮ってた時があったでしょ。その時秀吉とお姉さんが入れ替わってたって知って。じゃあどうして二人は入れ替わらなくちゃいけないのかなって自分で考えたんだ。そしたらAクラスで木下さん……じゃなくて秀吉。うん。秀吉がすっごく綺麗な声で校歌を歌ってたでしょ。でもわざわざ自分が指名された仕事を秀吉に任せるってことは何か事情があったんだと思う。そこから推測して閃いたんだ。もしかしたら木下さんは歌うのは下手――」
「！」
ぶぉん！
がし！
だだだだだだだ！
突然だった。
僕が台詞を言い終わる前に木下さんは突風のような勢いで僕の胸倉を掴み上げ階段の踊り場まで駆け出した。
唐突な出来事に反応が遅れた僕はなすがままにされ、気が付くと胸倉を掴まれたまま

壁に体を押し付けられていた。
足が若干浮いている。どうやら相当な力で持ち上げているらしい。
当の木下さんは僕の眼前で顔を俯けたまま荒い息を吐いていた。
対して、吊るし上げられている僕は、今だに状況に頭が追いつかず口をパクパクさせている。
首を絞められている所為か呼吸が苦しい
「き、木下……さん？　ちょ、苦し」
「はぁ……はぁ……はぁ……」
僕の言葉を無視して僅かに間を開けて、呼吸を整えた木下さんが口を開いた。
「教師の出入りする職員室の前で何言う気よ！　アタシがこれまで死に物狂いで築き上げてきた信用を一瞬で失墜させるつもり！」
「ご、ごめんなさい……」
「ごめんで済んだら警察なんていらないのよ」
怒りに合わせる様に胸倉をさらに持ち上げられて首が圧迫されていく。呼吸が困難になり声にも苦しさが混じって吐き出された。
だがそんなことにはまったくお構いなく、木下さんはぶんぶんと荒々しく僕の体を揺らし続ける。

「大体なんて吉井君がそれを知ってるの！　いえ聞かなくても分かるわ。秀吉が漏らしたのね。……あのバカ野郎」
「あ、あの」
矢継ぎ早に紡がれる言葉に僕は完全に置いてけぼりにされてしまっている。
冷静さを失っているのか言葉が荒っぽい。
いや、性格もかなり豹変してる。
普段噂され僕も何度か見た事がある優等生の木下さんとは全然違う。
もしかしてこれが彼女の〝素〟だったりするのだろうか。
「あの、木下さん」
「何よ。命乞いでもするの」
「いやいやいや、ていうか木下さん。僕をどうする気なの……？」
「吉井君。吉井君はFクラスだから知らないかもしれないけど、世の中にはこんな言葉があるのよ」
「こ、言葉？　なに？」
「死人に口なし」
ヤバイ。彼女はここで僕を亡き者にする気だ。
一昨日、書庫で昏倒させられて以来、いつかはこうなると分かっていたがまさかそれ

が今とは――っ！

「ま、待って！　確かに木下さんには悪い事したと思ってる。反省してる。だからせめて、情状酌量の余地を！」

だからと言って、素直に殺られるほど僕は人間ができてない――！

木下さんは僅かに目を細めて、声を上げた。

「ふーん。なら聞きましょうか。その情状酌量の余地がある弁解を」

「……」

少し迷う。

昨日三人で考案した作戦。即ち木下さんに謝罪の気持ちを伝える為にプレゼント計画を話してよいものか

「どうしたの。あるんでしょ、情状酌量の余地がある弁解が」

「い、言わなきゃ駄目？」

「別に、無理して言わなくてもいいわよ」

「な、なんだ。よかっ「このまま縊死してもいいのなら」……全部白状します」

どうやら最初から僕に選択肢なんて用意されていないらしい。

観念して、僕はすべてを告白することにした。

……、

……、

……、

……、

「……、い、以上です」

夕焼けが射し赤とオレンジで彩られた学校の屋上。

僕達はお互い手にジュース（両方僕持ち）を持ってベンチに腰掛けていた。

季節の移り目だからか、体を通り抜ける風は少し冷たい。

互いの距離差、約１０ｃｍぐらい。

長くはないが、決して短くもない絶妙な距離感を保って、僕は昨日あったことをすべて木下さんに説明した。

「ふぅん。そういうこと。だから昨日家にいるとき秀吉が妙にアタシの顔色を伺ってたのね」

僕の言葉を飲み込むように木下さんは深い声音で言う。
「にしても、そんなことでアタシが怒って吉井君に危害を加えるなんて、よくもそんな思い込みをしてくれたものだわ」
「そこは間違ってないんじゃないかな。だって現にさっき」
「うん？　何？」
「なんでもないです……」
不自然な笑顔とぐしゃりと握り締めた紙コップを手にする木下さんから目を逸らす。
「それにしても遊園地のフリーパスねえ。あのイベントにそんな商品があったんだ」
急遽、如月ハイライドの模擬召喚獣大会に参加することになった木下さんは当然その優勝商品も知っているはずがない。
現物の想像でもしているのか、木下さんは目を閉じて噛み締めるように思案顔をしている。何を考えてるんだろう。
「駄目かな？　これならお姉さんも喜ぶって秀吉のお墨付きももらったんだけど」
「それはもらえるなら嬉しいけど、……聞いてもいい？」
「うん？」
「もしそれを手に入れたとして、それをどう使うつもりだったの？」
「え？　勿論これまでのお詫びとして木下さんにあげる予定だったよ。ってこれはさっ

き言ったじゃないか」
「そうじゃなくて、……その、あげてどうするの？」
「勿論それは木下さんの自由にしていいよ。友達と行くとか」
「……そんな事だろうと思った」
「？」
赤くなったかと思えば今度は気落ちしたように溜息を吐く木下さん。
なんだろう。また僕は何か間違えたのかな。
「でもアタシも出る事になった以上、それはもうプレゼントとしては成立しないんじゃないの？」
「うっ」
痛いところを付かれ思わず呻く。
そう、本来この作戦は僕と木下さんの双子の弟の秀吉がペアで組んで優勝し、その商品を木下さんにプレゼントすることで成り立っていたことだ。
それが紆余曲折あり木下さん自身が参加することになって計画の前提が崩れてしまった。
つまり、今チケットが手に入ったところでそれは大会に参加した木下さんへの正当な報酬であって、お詫びの品に昇華することはなくなってしまった。

　せっかく三人よればなんとなら思いついたとっておきの案だったのに、すべて無駄になってしまった。おのれ、学園長から受け取り腕に付けられている黒塗りの腕輪が今は恨めしい。
『潰滅の腕輪』はそんな僕の心の呻きに答えるように、表面の黒鉄が夕日に反射して光った。
「そうなんだよね……。木下さんは何かほしいものはないの？」
「えっ？　んー、急に言われても思いつかないわ」
「……だよね」
「あ、そうだ。いいこと考えた」
　手のひらの上に手を置いて声を上げる。
「アタシを怒らせた罰として、今度はアタシを喜ばせてよ」
「……はい？」
　いきなり何を言い出すんだろう。
「どういうこと？」
「難しいことじゃないわ。吉井君がアタシに尽くして、それにアタシが満足したら一昨日の件は水に流してあげるって言ってるの」
「なっ!?　それってつまり奴隷じゃ――」

「嫌なの？」
「そんなの当たり前――！」
グシャ
一度握りつぶした紙コップ再度握りつぶす木下さん。
「んー、よく聞こえなかったなー。もう一度聞くわね。い・や？」
「……是非やらせていただきます」
「ん、よろしい」
怖い！　この人怖いよ！
その紙コップは一体何を暗喩してるの!?
これで表情が怒ってるならまだいいけど、まるで僕を苛めるのを楽しいみたいに終始笑顔で言うのだから余計不気味だ。恐怖で背筋から流れる冷や汗が止まらない。
木下さんはそんな僕の心情を知ってか知らずか陽気に口を開いた。
「別にとってくいやしないわよ。手段はそっちに一任するし、どうするかも全部任せるから。全部貴方の手腕次第よ」
「そ、それっていつまでやればいいの？」
「アタシが１００点と認めるまで。ちなみに今はマイナス３０だから」
「えー!?　０からスタートじゃないの！」

「何よ、男子なんだから細かいこと気にしてんじゃないわよ。――――（そっちの方がアタシも都合いいし）」
「え？　何？」
「な、なんでもない！　とにかくそういうことだから！　いいわね！」
「は、はい……」
全然よくないよ！と反論したいけど、確かに原因が僕にあるだけに強気に出られない。
はぁ、やるしかないのか。いろいろ酷い扱いを受けるのには慣れたつもりだったけど、まさか奴隷にまで格落ちされる日がくるなんて……。
いや、そう落ち込む事もない！　別に無期限というわけじゃないんだ。ようは木下さんをめいっぱい楽しませて満足させてあげればいいんだし。
幸い明日は如月ハイランド。つまり遊園地！　点数獲得のチャンスはある！
暗い未来に明光が射したおかげか少し上機嫌になって、今度は僕から別の疑問を問いかけてみた。
「僕からも一ついいかな？」
「ん？」
「廊下の剣幕から疑問だったんだけど、木下さんって、学校では普段は猫被っちゃったり

してるの？」
「!?　そ、そうよ。悪い！　いいでしょ誰にも迷惑なんてかけてないんだから！」
捲くし立てるように言い放ってそっぽを向く木下さん。
なんて分かりやすい反応。どうやら本当らしい。
「わ、悪いなんて思ってないよ！　たださっきの剣幕にびっくりしただけで」
「……そう」
「でもなんで学校で猫被ってるの？　友達に演技で接するなんて息苦しいと思うんだけど」
「別に、誰からも慕われて、先生からの信頼もある何でも出来る理想の優等生になるのがアタシの目標だったんだもの、それぐらい苦でもなんでもないわ」
「そうなんだ」
自身満々にそう言う木下さんの顔には一片の迷いも見られない。、本当に嘘じゃないらしい。
常にいい人を演じて周りにも気を配りながら笑顔を振りまくなんてよほど意識しなきゃできないとことだろうに。時々ボロは出てたけど。
尊敬するような、心配なような、曖昧な感情を胸の奥に感じていると、木下さんは鋭い目つきで僕を睨みつけて声を上げた。

「それより、分かってるでしょうね。この事は絶対他言無用、もし話したら――」
「だ、大丈夫だよ！　絶対誰にも言わない！　誓ってもいい」
「ならいいけど」
　値踏みするような横目で僕を観察しながら、渋々と言った感じに呟く。
　もし喋ったらどうされるんだろう。想像もしたくない。
「寧ろ、僕としてはちょっと嬉しいかも」
「殴られるのが？　吉井君ってそういう趣向なの、うわぁ」
「違うよ！　僕はマゾでもサドでもないから！　そうじゃなくて」
「じゃあなんなのよ」
「……なんていうか。こう、他の誰も知らない木下さんの秘密を知ることが出来たっていうことがさ。なんだかすごく嬉しいんだ」
「!?　あ、アンタ、よくもそんな恥ずかしいこと真顔で言えるわね！」
　僕の台詞に驚いたのか、木下さんも顔を真っ赤にしながら目を見開いていた。
　――て、本人目の前にして何言ってるんだろう僕!?
　勢いに乗って身も蓋もなくとんでもない台詞を口走ってしまった。
　顔が一瞬で紅潮するのが見なくてもわかる。ああすごく恥ずかしい！
「あ、いや!?　今のあくまで純粋な感想を言ったまでで！　決して他意があったわけ

じゃあ」
「そ、そう。別にいいけど……」
「う、うん。あはは」
ぎこちない会話に思わず苦笑いする。
何だろう、このもやもやする気持ちは。さっきから鼓動がドキドキしっぱなしだ。違う！　決して僕はMではないはず！
自分の中におかしな疑念を感じ始めた所為か、はてまたさっきの台詞の所為で変に木下さんのことを意識してしまったのか、うまく言葉が話せない。
不思議な沈黙の間が僕達を包み込んでいると、俯いてる木下さんがポツリと呟いた。
「ねえ、吉井君」
「な、なにかな……」
「もし、アタシが――」
「？」
「――ごめん、やっぱりなんでもない」
「へ？」
よくわからない挙動に僕は首を傾げる。
キーンコーンカーンコーン

「あ、チャイムだわ」
　大分時間も経過していたのか、いつのまにか部活の喧騒もなくなっていることに気づいた。
　ベンチから立ち上げる木下さん。そして僕の方へ向き直る。
　その姿は背後の夕焼けも相まってすごく凛々しく僕の目に写った。
「そろそろ帰りましょうか」
「……」
「吉井君？」
「ん、ああ。そうだね」
　重いものを持ち上げるように僕はゆっくりと腰を上げる。
「どうしたの？」
「ちょっとぼーっとしちゃっただけ、なんでもないよ」
「そう」
「帰ろっか」
「ええ、……さっきの」
「うん？」
「特別にマイナス２０点にしてあげるわ」

「はい？」
「……いい。ほら、行きましょ」
よくわからない事を言った後、木下さんは呆ける僕を置いて先に歩き出す。
うん？　なんだかよくからないけど１００点に一歩近づいたってことかな。
疑問だらけで何を考えているのかさっぱり分からないけど、それはいつものことだと判断し僕はこの件の思考を保留にして後に続いた。
校舎の続く鉄扉を潜り屋上を後にする。
さっきのまでの雰囲気に少しだけ、名残惜しさを感じながら。

第１３話

放課後の帰り道。
僕は昨日姉さんからお願いされた変な料理の参考書を買うため本屋に寄り道していた。
学校から家までの通学路の途中にある小さな書店。
ほしい漫画がある時によく買いに来る行きなれた老舗だ。
といっても、今回はちょっとしたおまけ付きだけど。
「で、どうして木下さんまで付いて来るの？」
店の入り口で背後に振り返りおまけ、学校からずっといる木下さんに声を掛ける。
校門でさよならするつもりだった彼女は、何故かこうして本屋の前までずっと僕の後ろをついてきていた。
件の木下さんは表情を変えず単々と口を開く。
「アタシも本屋で買いたいものがあったの、それだけよ。別に吉井君についてきたわけじゃないわ」
「へえ。何買うの？　やっぱり参考書とか？」

「ま、まあね」
　呟いたように小さく言った言葉は微妙に歯切れ悪い。
「吉井君は？　やっぱり漫画とか？」
「ううん、昨日姉さんから買ってきてほしい本があるって頼まれたんだ」
「そうなの、って吉井君ってお姉さんいたの？」
　そういえば木下さんには姉さんのことを話したことなかったっけ。
「うん、前までは海外に住んでたんだけど事情があって最近戻ってきたんだ。いろいろ曰くありげな姉だけどね」
「なにそれ」
「気にしないで、僕もあんまり自信もって紹介できる人じゃないから」
「??」
「じゃあ入ろっか」
「ええ」
　早々に姉の話題を打ち切り、二人並んで店内に入店する。
　ウーッと音を立てて自動ドアが左右に開くと中から溢れ出る暖かい暖房の風を肌に感じた。
　夕方という時刻もあってか、学校帰りの学生や会社帰りっぽいサラリーマンで店内は

それなりに混んでいる。
　えーっと、料理関係の本ってどこだったっけ？
　店内を軽く見回していると、隣で木下さんが声を掛けてきた。
「じゃあアタシはこっち見てくるから」
「あ、うん。いってらっしゃい」
　言うが早く木下さんは目当ての本があるらしいコーナーに向かって歩き出す。
　どんな本が目当てだったのかちょっとだけ気になったけど、今は自分の用事を優先させることにして木下さんの背中から視線を切った。
　さて、僕も探さなきゃ。
　どこかあるかもわからないので、取りあえず店内を適当に歩く。
　漫画、小説、法律会計、いろいろな資格の参考書と様々なコーナーを横目にしながら料理の本列を探す。
　そうして本棚を大体５つほど見送るといろんな料理の表紙が置かれているコーナーを見つけた。
　ここかな。えーっと題名はなんだっけ。
　昨日姉さんからもらった紙切れをポケットから取り出して名前を確認する。
『狙え必中　気になる相手を一発撃沈！』

何度見てもこれが料理の本の名前とは思えない。
「でもこんな変な題名なら簡単に探せそうだけど――ってあったし」
探す手間もなく本当に目の前にあった。
眼下に山積みになっている他の本の中で、そこだけは何故かスコップで掘り起こしたように異様に底が深かったので余計に目に付いた。
周りの本はまだまだ在庫がありそうなのに対して、目当てだったその本はすでに残り一冊しか残っていない。
近くを観察していると、値札が書かれているポップの傍に本店オリジナルらしき直筆の紹介文句の書かれたラミネート加工されたカードがあった。この店でもお勧めされているらしい。
うわぁ。本当に人気だったんだ。
目で見た現実が未だに信じられない。
ここまでくると姉さんじゃないけど僕もちょっと中身が気になってきた。
「まいいや。これを買えば任務完了だし」
『狙え必中　気になる相手を一発撃沈！』に手を伸ばす。
パシッ
「あ」

本を取ろうとした僕の手の上から誰かが手を乗せてきた。
どうやら僕と同じものを買う人がいたらしい。これはもしかして被ったかな。
誰の手なのか確認するべく顔を上げると。
「って。木下さん？」
「吉井君!?　何でここに！」
見上げると、目の前にはついさっき別れた木下さんがいた。
僕がいたことによほど驚いたのか、木下さんは手を伸ばしたままの姿勢で半歩後ずさる。
「何でって、僕の目当ての本がこれだから」
言いながら残り一冊だった『狙え必中　気になる相手を一発撃沈！』を手に取る。
「と言ってもほしいのは僕じゃなくて姉さんなんだけどね。――ひょっとして、木下さんもこれを買いに来たの？」
「う、うん。昨日ネットで調べた時に一度作ってみたいレシピが載ってたから。――――明日にも使えるかもしれないし」
「？」
最後の部分だけごにょごにょ声になってよく聞こえなかった。
秀吉から聞いた限りじゃ木下さんは料理しないって思ってたけど、何か心境の変化で

もあったのかな。
しかし困った。この本は後一冊しか残っていない。
これを逃したら少し遠回りをして大通りの本屋までいかないといけなくなる。そうなったら完全に日も暮れてしまうだろう。
僕はともかく、女の子の木下さんをそんな時間まで一人で歩かせるのは危ない。
姉さんも事情を話せばきっと納得してくれるだろう。
手に持っている本に一瞬だけ視線を落とした後、少しだけ後ろ髪が引かれる思いを抱いたままそれを木下さんに差し出した。
「はい。じゃあこれ木下さんが買ってよ」
「え、いいの？」
「うん。本屋はここだけじゃないし。ここからちょっと先にも本屋はあるから、僕はそこで買うよ」
「でもそれじゃ夜になるわよ。吉井君が先に取ったんだから吉井君が買って、アタシは別のやつ探すから」
「いいから、はい」
「あっ」
半ば強引に本を木下さんの手に納める。

男として、一度言った言葉は曲げらないのだ。
両手に抱えるように本を握りしめた木下さんは本と僕を交互に見た後、蚊のように小さい声でお礼の言葉を言った。
「あ、ありがとう……」
「気にしないで、作りたい料理があってワクワクする気持ちは僕もよく分かるから」
「別にワクワクなんて……、……そういえば吉井君って料理できるんだっけ」
「うん。ていっても僕の場合家で誰も作る人がいなかったから仕方なく作ってたんだけどね。おかげで料理だけは数少ない僕の特技なんだ」
「そう、羨ましいわね。料理ができるって」
「木下さんは料理しない……んだっけ？」
「秀吉から聞いたの？　まあね。普段はママが用意してくれたりお昼は購買でサンドイッチ買ってるからあんまり作る必要性を感じなかったんだけど、今思うと手伝い程度でもいいからちゃんとやっておくんだったわ」
「練習すれば出来るようになるよ。難しいことなんてないんだし。レシピ通りに作れば絶対間違えないから。……変な調味料さえ入れなければ……」
「変って……？」
「硝酸とか塩酸とか酢酸とか」

「何それ？　化学の実験じゃなるまいし、そんなの入れる人いるわけないじゃない」
いるんです、それが。結構身近に。
でも料理か。今の反応からすると木下さんはおかしな具材や薬品も使わなそうだしまともな料理が期待できそうだ。
脳裏で台所にエプロン姿で調理をする木下さんの姿を想像する。
鼻歌を歌いながら包丁を手に持ち肉を切り分けフライパンを優雅に使いこなし。狭い台所を縦横無尽に駆け回り色とりどりの食材や食器を取り出す。そして出来上がった料理を持ってテーブルに並べていく木下さん。
……、
「……（ごくん）」
いかん、思わず生唾を飲んでしまった。
いい。すごくいい。
まさに理想の若奥様だ。
男子なら誰もが夢見る理想を見事に体言する姿がそこにあった。
あわよくばその隣にいるのが僕であったら……。
「って何考えてるんだ僕は!?　そんな夢みたいな事あるわけないじゃないか！」
「は？」

「な、なんでもないよ！　ははは」
急いでピンク色の想像を振り払う。
駄目だ駄目だ。これじゃいつもみたいに変人扱いされるだけじゃないか。
心を氷に、クールになれ吉井明久。
冷静になれと脳に訴えるように深く深呼吸して気持ちを落ち着かせる。
「うん、落ち着いた。もう大丈夫」
「……よくわからないけど、じゃあ会計済ませましょ」
二人でレジまで行って支払いを済ませる。
本の入った薄い袋を手に店を出た時には、すでに日落ちも間近という空模様だった。
隣では木下さんが携帯を開いて時間を確認している。
きっと今の時刻と帰宅まで時間を計算しているんだろう。
僕はこれからもう一つの本屋へいかないといけない。さて、これじゃ家に付く頃には何時になるやら。
「夜もすぐだ。早く帰らないとね」
「うん。改めて本譲ってくれてありがとうね」
「全然、料理がんばってね」
「できるかぎりやってみる。うまくできるかはわからないけど」

「できるよ。木下さんなら、これまでだって何でもできたんだから。自信もって」
「歌唱力は上がってないけどね」
「あ、ごめん。そんなつもりじゃ……」
「ふふ、冗談よ」
「な、なんだ。びっくりした……。また痛めつけられるのかと思った」
「アンタはアタシをどんな目で見てるのよ……。吉井君が故意に秘密をばらしたりしない限りそんなことしないわよ」
それは逆にばらしたら命の保障はないということでは。
気にはなるけど怖くて聞き返せなかった。
「……」
「……」
何か話すべきなのにお互いが共に何を言うべきかわからない状態になり僕達の間に沈黙が訪れる。
木下さんはこのまま直通で家に帰るのだろう。
自宅についたらさっそく買った本を広げて台所に立つのかな。慣れない手先で怪我でもしないか心配だけど、それはさすがに過保護すぎだろうか。
何故か、このまま木下さんを家に帰すのに僕はひどい喪失感を覚え始めていた。

まるで、体の一部がどこかへ行ってしまうかのような感覚。もう少し話していたい。もうちょっとだけ一緒にいたいと僕の中にいる僕の心が訴えてくる。

どうしたんだろう。こんな気持ちは初めてだ。

「あの、木下さん。……よかったら僕が料理教えてあげようか？」

気が付くと、こんなことを口走っていた。

あれ？　僕何言ってるんだ？

「えっ……？」

きょとんとした声で返事をする木下さん。

無理もない。僕自身が一番驚いてるんだから。

自分の言っていることがようやく理解できた途端、唐突に恥ずかしさが全身を襲ってきた。

「い、いやその!?　僕もそれなりにできるからよかったらどうかなって思っただけで!?　木下さんが嫌なら全然それで構わないなんだけど！」

「あ、えと……。それは嬉しいけど」

どうしていいかわからずお互い顔を紅潮させる。

僕はとにかく頭に浮かんだ単語を矢継ぎ早に口に出す事しかできなかった。

ああ何言ってるんだ僕は……！

なんてください口説き文句。これじゃまるでナンパみたいじゃないか。
針の筵のような緊張感の中、秋の夕暮れなのに頬に汗が流れるのを感じながら返事を待つ。
しばらくすると、目を上下左右に揺らして困惑していた木下さんは小さく口を開いた。
「……一つだけ聞いていい？」
「う、うん？」
「それはアタシへ点数稼ぎの為に言ってるの？」
「てんすう……？」
木下さんの台詞を理解するのに数秒かかった。
そういえば、ここに来る前に学校でそんな約束をしていたことを思い出した。
僕が木下さんに尽くし、それに木下さんが満足できれば一昨日と今日の件は許してくれるという約束。
正直、そんなこと微塵も忘れていた。
この状況で点数がどうだのなんて考える余裕なんてなかったぐらいだ。
が、正直に話すのもなんだか恥ずかしくて照れ隠しに嘘を付いた。
「ま……まあ、それもあるかな」

「……」
「でも純粋に木下さんの料理の腕が上達してほしいって気持ちもある。僕みたいな駄目な人間でも手伝える事があるなら何でもしたいんだ。――それじゃダメ、かな」
最後はほとんど懇願するような声だった。
自分でも無茶を言ってるのは分かってる。
突然男子からそんなこと言われても困るだけだろう。
それでも言わずには言られなかったのは、どこからくる感情なんだろうか。
軽い後悔と淡い期待を胸に返事を待っていると、しょぼしょぼと本当に聞こえるか聞こえないかの震える声が僕の耳に響いた
「……じゃない」
「え？」
「だめ、じゃない」
暴れる体を抑えるように顔を俯かせたまま夏の風鈴のような声色で呟いた。
今度ははっきり聞こえた。
「じゃ、じゃあ」
「……吉井君さえよければ、アタシに料理を教えて」
「……！」

その瞬間、僕は脳内に花畑が咲き乱れる幻想を見た。
今自分がどんな顔をしているかわからないけど、きっと雄二辺りがみたら全力で引くような表情をしていることだろう。
いろいろな感情がごちゃまでになって、うまく整理できない。
全身がどうしようもない歓喜に震えだす。
ただ分かるのは、今自分はとんでもなく幸せを感じているという事だった。
「も、勿論！　僕なんかでよければいくらでも教えるよ！」
「――っ！　言ったわね。もう訂正なんてしないから。吉井君が嫌になってやめたくなって付き合ってもらうからね」
「僕は大丈夫だよ、どっちかというと木下さんが根を上げるのが先かもしれないよ」
「上等じゃない。じゃあそれを証明するためにさっそく行きましょうか」
「え？　どこへ？」
「吉井君の家に決まってるでしょ」
「今からするの!?」
「当たり前でしょ。時間がないんだから」
「時間？」
「な、なんでもない！　とにかくもたもたするのは嫌いなの！　っとその前に本屋に寄

るんだったわね。これじゃどっちが買っても結局寄り道することになるんじゃない」
「あはは、そうだね」
「笑い事じゃないわよまったく」
お互い談笑しながら歩き出す。
うーん、傍目から見ると僕達ってどんな風に見えてるのかな。
なんとく人目が気になって回りを見渡しているとまた木下さんに不審がられた。
しかし、いいのかなこんなに幸運で。
これじゃ、後でどんなしっぺ返しが来るか想像もできない。
「あ、そういえばこれって何点なの？」
「０点よ」
「えーっ!?　何で!?」
「まだ何も教えてもらってないじゃない」
「あ、そっか」
「そうよ」
まあいいや、今はこの幸せを全力で噛み締めよう。
すっかり暗くなった夜道を僕は明るい気分で進んでいった。

第１４話

「ただいまー」
「あ、おかえりなさいアキ君」
家に帰り玄関口で声を上げると、リビングから姉さんが顔を出した。
そして淡い微笑みを浮かべながら静かな足取りで玄関までやってくる。
「ただいま姉さん。はいこれ、頼まれてた本」
「ありがとうございますアキ君。――おや、そちらの方は？」
本の入った袋を受け取ると、姉さんは僕の隣にいる木下さんに顔を向けた。
「おじゃまします」
「こんばんわ秀吉君。どうぞゆっくりしてくださいね」
「違うんだ姉さん」
「はい？」
姉さんの言葉はある程度予想していた。
僕は一歩だけ前に出てなるべく自然な感じに木下さんを紹介した。
「この人は秀吉の双子のお姉さんで木下優子さん。いろいろあってこれから僕が料理を

教えてあげることになったんだ」
「こんばんわ。始めまして。秀吉の姉の木下優子です」
僕に続くように木下さんは姉さんの方へ向き優等生スマイルで恭しくお辞儀する。
秀吉と間違われた部分に関しては特に突っ込みはないらしい。
慣れているのか。それとも笑顔の内心に怒りを隠しているのか、後者だと危険だ。特に僕の身が。
礼儀正しい態度に姉さんは「まあ」と口元に手を当てた後、木下さんを真似るように丁寧語で自己紹介した。
「そうなんですか。これは失礼しました。改めましてこんばんわ、私はアキ君の姉で吉井玲と申します。よろしくお願いしますね優子さん」
「こちらこそ、今日はよろしくお願いします」
「いえいえ、狭い家ですがどうぞゆっくりしていってください」
お互いすごく礼儀正しい態度と言葉で微笑み合う。
とても常識的な対応で見ていて安心できるやりとりだけど、この中で僕だけがこの二人の本性を知っているだけになんともいえない気持ちが胸の内に込み上がる。
姉さんは僕が異性と親しくする事に対して異常とも呼べるぐらいの嫌悪感を抱いている。

表面上は穏やかだけど、内心では僕にどんな拷問をするかなんて考えていてもおかしくない。

木下さんは木下さんで優等生の性格は仮面だと今日知って、本当はどんな人なのかよく把握できていないし。

……人間、知らないほうがいいこともあるって、ほんとなんだね。

「立ち話もなんだし、上がってよ木下さん」

二人の間を遮るように口を開いて木下さんが通れるように体を横にずらす。

再度「おじゃまします」と言って木下さんは靴を揃えた後、姉さんの後に続いてリビングに歩いていった。

僕は最後尾で玄関の鍵とチェーンロックを閉めた後に自室に鞄を置いて部屋着に着替える。

小さい手鏡でどこか変なところがないか確認し、微妙に緊張する体に一つ気合を入れてから自室を出て廊下を歩く。

そして二人が待つリビングへ入ると、

「これがアキ君の夏の期末テストの点数です」

「うわぁ……」

ずっしゃぁーーーーー

!?!?!?

テーブルの上に僕の答案用紙を広げている木下さんと姉さんがいた。
「何をしているのですがアキ君。家でヘッドスライディングなんてしたら摩擦で火傷しますよ」
「姉さんの所為でしょ！　姉さんこそ初対面の人に何見せてるのさ！」
「優子さんがどうして姉さんが急遽帰国することになったのかを知りたいと言いましたので」
「なら口頭で説明すればいいでしょ！　これじゃただの公開処刑だよ！」
まったく！　せっかく来てくれたお客様になんてものを見せるんだ！
やっぱり姉さんは僕が女の子を連れてきたことを怒ってるのか。
「姉さん、もしかして怒ってる？」
「はい？　何をですか？」
「だから、何の連絡もなしに急に女の子の友達を連れてきたこと」
「いいえ、ちっとも怒ってません」
「な、なんだ……よかった」
「そういえばアキ君」
「どうしたの？」
「昨日姉さんが用意した体操服とブルマをどこへ置いたか知りませんか？　あれがない

と今日は組み体操ごっこができませんね」
やっぱり　姉さんは僕が突然女の子を連れてきたから怒ってるんだ。
「は、ははは、何言ってるのさ姉さん。それじゃまるで僕が常日頃から姉さんと体操服来て組み体操してるみたいじゃないか」
「何を言ってるのですか。昨日だってあんなに激しく――」
「違うよ木下さん！　僕は普段から姉さんとそんなことするような奇抜な間柄じゃないからね！　御願いだから僕を信じて！」
「そ、そう……」
辛うじて優等生スマイルを保っていたが木下さんの表情は微妙に引きつっていた。
ちぃっ!?　肉体的拷問の次は精神攻撃に移行したのか!?
急いでテーブル上の答案用紙を引ったくり折りたたんでズボンのポケットに仕舞う。
まったく、油断も隙もあったもんじゃないよ。
また姉さんが何かおかしな真似をしないか気を配りながら僕は台所へ立って二人分のエプロンを持ってくる。
その片方、猫のイラストがプリントされた方を木下さんに差し出した。
「はい、これ木下さんの分ね」
「ありがと……って何で猫？」

「え？　そっちの方が木下さんにあってるかなと思ったんだけど」
「……まあいいけど」
なにやら微妙な顔でエプロンの猫と見つめ合っている。
あれ？　ひょっとして猫は嫌いだったのかな？
「料理の指南を受けるという事は、今日はアキ君と優子さんの二人で台所に立つのですね」
「うん。まあね」
「でしたら姉さんも一緒に――」
僕達の傍で話を聞いていた姉さんがとんでもないことを言い出した。
「い、いや!?　姉さんはゆっくりしてていいよ！　晩御飯は全部僕達に任せてもらっていいから！」
「ですがお客様を働かせてのんびりしているわけには」
いやいや、むしろそっちの方が大変なことになるから。
「大丈夫だよ！　それにいくらなんでも台所に三人も入ったら少し手狭になるし」
「？　何を言うのですか。この前は雄二君と康太君と一緒に調理していたではないですか」
ちっ、余計なことばかり覚えてるな！

「そうだけど。ほら、今回は木下さんに料理を教えなきゃいけないからさ。僕としてもマンツーマンの方がやりやすいし！」
「……そうですか。でしたらしかたありませんね」
「うんうん。姉さんは仕事で疲れてるんだからゆっくりしてて、いやしてください」
「アキ君がそこまで言うのでしたらお言葉に甘えましょうか」
　よし！　なんとか最悪の展開は回避できた。
「では姉さんは食後のデザートを担当しましょう」
　なんだか事態が悪化した気がする。
「いやいやデザートも全部僕がやるから！　姉さんは何もしなくていいんだよ」
「そういうわけにいきません。姉としてアキ君の友達には感謝の念を込めて対応をしなければなりません」
「そう思ってるならお願いだからおとなしくテレビを見ててください」
「……アキ君。もしかしてまだ姉さんの料理の腕を疑っているのですか？」
　少し怒ったようなにむすっとした顔をする姉さん。
　そりゃそうだ。洗剤や食べ物かすらも怪しいものを平然と鍋に突っ込む料理をどう信用すればいいのか教えて欲しい。
「姉さんだってアキ君が少しずつ勉強をするようになっていくように、日々の短い自由

時間の中で練習しているのですよ」
「いやでも……」
「大丈夫です。姉さんを信じてください」
　姉さんは頑なだ。これはどう説得しても無駄かもしれない。
「むぅ……、そこまで言うなら」
「分かってもらえましたか。ではさっそく姉さんも準備に取り掛からなくてはいけません。ふふ、さっそくアキ君に買ってきてもらった本を実践してみましょうか」
　そう言って、姉さんは椅子から立ち上がる。
　大丈夫かなぁ。不器用な姉さんのことだから料理を作ろうとして間違えて化学兵器を製造してしまわないか心配だ。
　言いようのない不安を胸中に抱いていると、立ち上がった時に腕が当たったのか今日僕と木下さんがそれぞれ一冊ずつ買った例の本、『狙え必中　気になる相手を一発撃沈！』が床に落ちてパサリと中身が開いた。
「あ」
　姉さんが呟くのと、僕と木下さんが拾おうと手を伸ばして眼下の見開いた本に視線が向けたのはほぼ同時だった。
　偶然開かれたページにはメロンジュースにような緑色の飲み物の見本写真と、

『一滴飲むだけで効果覿面の惚れ薬の作り方』
なんて言葉が書かれていた。
「……」
「あらあら、私としたことが」
「待って姉さん！　今料理本にあるまじきものが載ってるのが見えたんだけど！」
「これはメロンジュースです」
「いやいや今明らかに惚れ薬って言葉が見えたよ！それって本当に料理の指南書なの？
実は化学の教本とかじゃないよね！」
「そんなことはありません。これは立派なお料理テキストです。アキ君は姉さんを信じてくれたのではないですか」
「今の一瞬で姉さんの信用が地に落ちたよ！　なし！　さっきのやっぱりなし！」
「さて、何を作りましょうか」
「ねえさぁん!!」
ああもう僕の言うことなんて聞いちゃいない。
きっと僕がなんと言おうと姉さんは止まらないだろう。
必死に引き止める僕の抵抗も空しく、姉さんはいつもの柔和な微笑みを浮かべたままリビングを出て行った。

拙い、僕はひょっとしたらとんでもない地雷を踏んでしまったのかもしれない。
このまま姉さんを放置すれば食卓の料理にあるまじき『何か』が出てきてもおかしくない。
「……玲さんって個性的な人ね」
「いいんだよ素直に変って言ってもらって」
個性的は変の同義語だと僕は思う。
と、そこで偶然木下さんの足元の通学鞄と薄い紙袋が眼に入った。
そういえば木下さんも姉さんと同じ本を買ってたよね。
まさか木下さんも惚れ薬を作ろうとしてるのか……。
「あの、木下さん」
「ん？」
「できれば惚れ薬なんて作らないほうが」
「作らないわよ！　アタシだって今始めて知ったんだから！」
な、なんだ。よかった。
好きな人がいるなら惚れ薬なんて使わず正々堂々と挑むべきだよね。
「まったく。それより聞いたわよ。玲さんが帰国した理由」
「うっ、それは……」

「ウチにも秀吉がいるからあんまり強くは言えないけど、ちょっとは真面目に勉強しなさいよ。そうしたら玲さんだって安心させてあげられるんだから。一日５分でも１０分でも復習すればあれよりは良い点数とれるわよ」
「僕だってやれるだけはやってるんだよ。でもどうしても解らない問題があると詰まって集中力が切れちゃって、そのままつい放置を」
「それをなんとかするのが復習でしょ。解らない問題なら誰かに聞けばいいじゃない――ってＦクラスで教えられそうな人って姫路さんぐらいよね」
　さすが木下さん。頭の回転が速い。
「あはは。どうせなら木下さんにも教えてもらおうかな」
「いいわよ」
「へ？」
　おや。冗談のつもりで言ったんだけど、何故か了承されてしまった。
「人に教えることだって立派な勉強だし、吉井君にはこれから料理を教わるんだからギブアンドテイクの条件としては悪くないわね」
「え、いや。いいの？」
「良いも何も吉井君から言い出したことじゃない」
「そうだけど……」

罵倒でもされるのかと身構えながら言ったつもりが何故かあっさり勉強を教えてもらうなんて予想外の展開に発展して思わず言葉に詰まる。

木下さんの表情は特に相手をからかっているような感じには見えない。きっと彼女なりの善意の気持ちで言ってくれているんだろう。

うーん、教えてくれるのは嬉しいけどやっぱり勉強は嫌だなぁ。

「ありがとう。じゃあ定期テスト前にでもお願いするよ」

「本当は毎日した方がいいんだけど……。仕方ないわね」

毎日!?　いくらなんでも無理だ。そんな人生の無駄遣いはできない。

さ、さすが学年最高成績者の集まるＡクラス。バカのＦクラスの僕らとは根本的な価値観が違うようだ。

せっかく近づいたと思った距離が再び遠のいた気がした。

少しだけ沈んだ気分を振り払うように、僕は気持ちを切り替えて横目で台所を見ながら言う。

「じゃあ姉さんが帰って来る前に始めようか」

「そうね。じゃあよろしくお願いします。〝先生〟」

「せ、先生って。なんだか恥ずかしいな」

背中が妙にすーすーするのを感じる。

でもこれはこれで悪くない。
普段はいつも教えられる側の人間の僕にとってはちょっとだけ心地よい気分だ。

第１５話

「そういえば吉井君。晩御飯って何にするの？」
　冷蔵庫を覗き込んでいると、制服の白シャツの上から猫のエプロンを身に着けた木下さんが横から問いかけてきた。
「うーん、まだ冷蔵庫に残った具材があったはずだからそれを使って作ろうと思ってるんだけど――って姉さん。またパエリアの材料こんなに買い込んで」
「パエリア？　……ほんとね。同じ食材がいっぱいある。でもどうしてパエリアなの？」
「僕の好物なんだ。それで前も姉さんたくさんパエリア作ってたから」
「へぇ、吉井君ってパエリア好きなんだ」
「うん。まあね」
「弟の好物を作るために頑張って練習してるなんて、なんだかんだで弟思いのお姉さんじゃない」
「それは嬉しいけど、姉さんには料理よりも倫理とか常識を学んでほしいよ」
「常識がないのは吉井君も同じじゃない。何をされてるのかは知らないけど玲さんは間

違いなく吉井君のことが好きでしてるんでしょ。それを思っての行動なんだからある程度は許してあげたら？」

妙に姉さんを擁護する木下さん。同じ姉同士何か通ずるものでもあるのかな。

でもその意見に納得しかねる。

いくら弟思いでも毎朝キスを強請り、そして僕が異性と接する度に折檻してくるのはもうすでに正常な姉弟関係を逸脱していると思うんだ。

そういえば木下さんもこれまで何度か秀吉を絞めてた事があったっけ。まさか、木下さんも姉さんと同じ趣味が!?

「木下さん……。まさか木下さんも普段は秀吉にひどい扱いをしながらも裏じゃ毎朝秀吉の部屋に侵入しておはようのキスとかしてるの……っっ」

それは、僕的にはすごく興奮するシチュエーションなんだけど！

ゲシッ！

「ぶっ飛ばされたいの？」

木下さんの一撃がひどく理不尽に感じる。

そしてその台詞はせめて殴る前に言ってほしい。

「アタシは実の弟に接吻するような変態じゃないわよ。気持ちの悪い想像しないで」

そっぽを向きながら吐き捨てるように言い放つ。

「だ、だよね。ははは。よかった常識的な対応してくれる人がいて、危うく僕の中の良心が犯されるところだったよ」
「……よく分からないけど苦労してるのね」
「何故か僕の周りには個性的な人が多いからね……。ほんとどうしてだろう」
「類友でしょ」
　そんなことはない。
「さて、今晩どうしようかな……。これだけあればいろいろできるけど。木下さん何か食べたいものとかある？」
「パエリアにしない？　これだけ材料あるんだし」
「パエリアを？　僕は構わないけど。木下さんはそれでいいの？　結構手間隙かかるけど」
「いいわよ。アタシも興味あるし。パエリアの作り方」
　そうか。木下さんがそう言うなら文句はない。
「じゃあ米は無洗米だからいいとして、木下さんは野菜と鶏肉を切っていってくれる？」
「わかったわ。ここにあるやつだけでいいの？」
「うん。パプリカとトマトは一口サイズぐらい。玉ねぎはみじん切りでね。みじん切りってできる？」

「バカにしないで。料理はしないって言っても学校の調理実習ぐらいはやってたんだから。それぐらい朝飯前よ」

あ、そっか。学校の授業でも偶にやるもんね。それなら安心だ。

野菜は木下さんに任せて僕は海鮮類を担当しよう。

サフランはいい感じになるまで時間が掛かるので先に鍋に入れておく。これで後のスープ作りが楽になるからね。

その後、冷蔵庫に保管されていた海老を取り出して背わたを取る作業に入った。

「木下さん。どうして急に料理をしようなんて思ったの？」

背わたを取りながら横で難しそうな顔でまな板の上の野菜を切っている木下さんに質問する。

木下さんは包丁を動かしながら、視線を野菜に落としたままの姿勢で言葉を紡いだ。

「大した理由じゃないわよ。ただ、最近になって食べてもらいたい人ができただけ」

「へぇ、それってやっぱり家族に？」

「……そうね。それも少しあるかな」

それも？　他に誰か食べてもらい人がいるのかな。

考えられるとすると同じＡクラスの霧島さんとか工藤さん辺りだろうか。工藤さんはわからないけど霧島さんは料理うまそうだもんね。

その辺に対抗意識でも燃やしているのかな？
それとも、まさか男子とかだったりするのかな。今日買った本もどっちかと言うとデート向けのやつだし。
……まさか、木下さんって好きな人がいたりするのどろうか。
「……ぬぅ」
作業をこなしながら悶々とする。
「ん、何よ人のことジロジロ見て。　アタシ何か間違えた？」
「あっ、ううん！　なんでもないよ！　切り方はそれで問題ないからそのまま続けて」
「？？？　そう」
うう……、気になる。気になるけど聞き出す勇気ももてない！
迂闊なことを口走ってしまえば僕が木下さんのことを異性として意識してると思われるし。
木下さんぐらい可愛くて頭もいい人が気になる相手っていうと、やっぱり同じＡクラスだろうなぁ。
僕の知ってる中で一番成績が良くて性格もいい男子と言ったら学年次席の久保君の顔が思い浮かぶ。
確かに彼と木下さんなら横に並んだらすごく絵になるしお似合いだろうと思う。

僕の知ってる久保君は特に弱点らしいものもないし、上っ面とはいえ優等生の木下さんとの相性はバッチリだろう。

そうなんだけど、そうなんだけど――。

ああ駄目だ。考えるたびに嫌なビジョンが脳内に湧きあがっていく……っ。

この悪循環から抜け出すには自分で事の真偽を確かめるしかない――っ！

「……久保君って良い人だよね」

「え？　まあそうね。誠実だし真面目で頭も良いし。ルックスも十分。ある意味理想の男子像の体現と言えるんじゃないかしら。よく女子からプレゼントをもらったりもしてるみたいだし」

残念だよ久保君。どうやら僕と君は一生分かり合えない運命にあるようだ。

「いきなり何？」

「う、ううん別に。ただ女の子が彼氏にするならやっぱり久保君みたいな人がいいのかなって考えてただけ」

「あのね。そういうのは男子の偏見よ。女子にだって十人十色でいろいろな好みの人がいるんだから。まあそれでも久保君に悪い印象を持つ人なんてほとんどいないと思うけど」

「そうなんだ。……じゃあ、木下さんも……？」

「――――っ」
ぴたり、と木下さんの手の動きが止まった。
しまった。深追いしすぎたか？
「……気になるの？」
囁くような声。だがその内にはまるで僕の心を探ろうとしているような目に見えない凄みを感じる。
その問いに僕は少し萎縮しながら、なるべく木下さんと目が合わないよう正面のリビングに視線を向けて答えた。
「ま、まあ。木下さんほど綺麗で可愛い人の好みとあれば、一男子としては気にならないと言えば嘘になるというか……」
「ふうん……、吉井君」
「な、なに？」
「……仮にアタシが久保君を異性として意識してたなら、今頃料理の師事も久保君にお願いしてるわ」
「え？」
「この意味、分かる……？」
さっきとは打って変わったしおらしい口調で問いかけてくる。

その変化が気になって木下さんの方へ顔を向けると、そこには頬を少し紅潮させながら僕を見据える木下さんがいた。

その表情は、まるでテストの結果が返ってくる直前のように不安と期待が入り混じった時の気持ちのイメージを僕の脳内に思い浮かばせる。

えっと、つまり久保君に料理を教わってもいいけど、今は僕に教わってるということは――。

「久保君も料理が得意ってこと？」

「……アンタって、鈍感だわ」

木下さんの重たい溜息と共に、止まっていた時間が再び動き出したようにトントントンと包丁を動かす手が活動を再開した。

??? よく分からないけど、今の所久保君は木下さんの眼中にはないってことでいいんだろうか。

なんだか煙に巻かれたようで、奥歯のものが詰まった気分のままタコを一口大に切り分けていく。

それからしばらくして、そろそろパエジェーラを用意しようと動き出したところ、最後の鶏肉を切っていた木下さんがおもむろに問いかけてきた。

「じゃあ、吉井君の好みは女の子は誰なの？」

「うぇ？」
　不意打ちの質問に手に持っていた海鮮類の入ったボールを落としそうになる。
「ななななんで!?」
「アタシのことは聞いておいて吉井君の好みは知らないなんて、なんかずるいじゃない。で、どうなの？」
「えー、そ、そんなの恥ずかしくて言えないよ」
「何よ。人に聞いておいて自分は答えないなんて言う気？」
「うぐっ……」
　なんだかその理屈には異論があるけど、意地になっているのか木下さんの視線は僕を注視していて誤魔化せる雰囲気じゃない。
　うーん、好みか。
　……そりゃ僕も男だから勿論だから女性の理想像はあるけど、それを木下さん、というか異性に言うのは物凄く恥ずかしい。
　かといってここは僕の家、逃げ出す事もできない。
　くぅ、観念するしかないのかっ！
「ひ……」
「ひ？」

「……秀吉」
「吉井君。この包丁ってとってもよく切れるわね」
「ごめんなさい！　僕が悪かったですからお願いですから刃先にこっちに向けるのはやめてください」
　おかしいな。別に嘘は吐いてないのに。
「真面目に答えなさいよ」
「僕は大真面目のつもりで言ったんだけど……」
「はぁ？　……ってそういえば前にもそれで勘違いの告白をしてくれたわね。何、吉井君って女より男が好きなの？　ＢＬ？」
「ち、違うよ！　僕はちゃんと女の子が好きな正常な男だから！　あと木下さんＢＬなんて言葉よく知ってるね」
　日常会話でＢＬなんて単語、滅多に出てこないと思うんだけど。
「っ！　そ、それはどうでもいいことよ。　それで……じゃあ〝普通〟の〝女の子〟の好みは？」
　普通と女の子を妙に強調して問いかけてくる。
　な、なんかやけの突っかかるな。そんなに自分だけ話したことが納得いかないのだろうか。

　とはいえ、人に尋ねておいて自分は言わないというのに確かに卑怯だと思い、なんとなく頭に浮かんだ印象をそのまま口に出した。
「うーん。……一生懸命な人かな」
「一生懸命って、何に？」
「何でも良いよ。どんなことでも目指すべき目標があってそれにまっすぐ努力できる人はすごく尊敬するし女の人なら魅力的にも思う。だから僕は僕が心から応援してあげたいって思える人が――ってだぁ!?　これ以上は恥ずかしいよ！」
　恥ずかしさのあまり頭が一瞬で沸騰する。
　罰か！　これは何かの罰ゲームのなのか!?
「大体木下さんが僕の好みなんて聞いてどうするのさ！」
「そ、それは……い、いろいろよ！　いろいろ！」
　いろいろ？　なんだろう。女の子同士で異性についての会話のネタにでもするつもりだろうか。
「それに吉井君だって今日一日でアタシの隠してた秘密を知ったんだし、これでお相子でしょ。お相子」
「う。それは……まあ」
「本当はこんなことじゃ全然まったくつりあってないんだけど、料理の師事をしてくれ

たことに免じて今日はこれぐらいで許してあげるわ」
「今日⁉　これで終わりじゃないの⁉」
「当たり前でしょ。この程度で帳消しになるわけないじゃない」
　血も涙もない。僕はこのまま一生奴隷として使い潰されるのだろうか。
「次はどうすればいいの？」
「あ、ああ。じゃあこれ。パエジェーラって言ってパエリア用のフライパンなんだけど、これにオリーブオイルで入れてからこっちのエビとタコ、その後に切った野菜と肉をどんどん炒めていって。僕はその間にスープを作っちゃうから」
「オッケー」
　木下さんは材料を投入したフライパンを軽やかな手先で振るう。
　すでにサフランで色はつけているのでコンソメを入れるだけでスープは出来上がり僕の作業は比較的すぐに終わった。やっぱり人がいると調理も楽だね。
　木下さん。学校外で料理をした経験はほとんどないって言ってたけど、パエジェーラの上の食材を菜箸で炒めている様子はすごく手慣れているように見えて、安心して経過を任せられた。
　頭が良いことと料理の腕前は直結しないことは姉さんと姫路さんで実証済みだけど、どうやら木下さんにその方式は当てはまらないようだ。良かった。本当に良かった

……っ！

第16話

「おまたせ姉さん。ご飯出来たよ」
出来上がったパエリアを両手に持って姉さんのいるテーブルまで持っていく。
僕の後ろには木下さんも追従してリビングテーブルの上にそれぞれ皿を並べていった。
その様子を座りながら眺めていた姉さんは、目の前にパエリアの入った皿を置いた木下さんに向けて声をかける。
「ありがとうございます優子さん。せっかく来てくださったのに何もお手伝いできなくて申し訳ありません」
「気にしないでください。好きでやってくることですから」
軽やかな口調とにこやかな笑みで答える。それから木下さんは回りこむように歩き姉さんの対面に移動した。
僕は姉さんの正面の席に腰を下ろし、木下さんはその隣に座る。
全員が着席すると、姉さんは眼下のパエリアに視線をやりながら口を開いた。
「今晩はパエリアにしたのですか」

「うん。冷蔵庫にいっぱい材料があったからね。あれ買ったのって姉さんでしょ」
「ええ。……ではこれは優子さんが？」
「はい。でもアタシなんて全然。ただ吉井君に言われた事をしていただけですから。調理も分担でやりましたし」
「そんなことないよ。木下さんすっごい手際よかったし。僕びっくりしちゃった」
ほとんど料理をしたことがないって言ってたのに、実際にキッチンに立つと木下さんはまるで使い慣れたペンで字を書くかの如く一つ一つの作業を完璧にこなしていった。
僕のした作業量なんて全体の３割にも満たない。
僕はあくまで隣から木下さんの補助をしただけで何かわからないことを教えたり指導したりするような出来事はなかった。
そう思うと本屋の前でえらそうに息巻いて『僕が教えてあげる』なんて言った自分が情けない。
結局、僕ができたのは調理の手順の説明だけだったし。
「あ、ありがとう……」
褒められたことが恥ずかしかったのか、木下さんは頬を染めて小さく呟いた。
「僕こそなんかごめんね。自分から誘っておいて結局大したことしてあげられなくて」
「そんなことないわよ。吉井君がいないとアタシ一人じゃ何も出来なかったんだから。

寧ろ感謝してるわ」
「あはは、そう言ってもらえると嬉しいよ。僕も木下さんと一緒に料理しててすっごく楽しかったから。僕の方こそありがとうね」
「そ、そう。　ア、アタシも……ちょっと、（楽しかった……わよ）」
「え……？　ごめんよく聞こえなかった。なんて？」
「なんでもない！　さあ、せっかく作った料理が冷めないうちに食べましょう」
「？？　そうだね。いただきます」
「「いただきます」」
　僕たちは手を合わせて目の前の料理に取り掛かった。
「……うん。お米の焦がし加減も絶妙でとても美味しいですね」
「本当ですかっ？　嬉しいです」
「ええ。それに味付けがアキ君の作るパエリアとよく似ています」
「そりゃあそうだよ。調味料と食材の配分を決めたのは僕だし。実際に作ったのは木下さんだけど」
「なるほど。少し優子さんが羨ましくなりました。私では中々上手くできず今だ練習中の身ですから、とてもこうはできません」
　それは姉さんがちゃんとレシピ通りに作らないからだよ。

なんて感想は喉元で飲み込んで、僕もスプーンを手に取り一口食べる。
「……ど、どう、吉井君？」
不安そうに揺れる横目で僕を見ながら木下さんが控えめな調子で聞いてくる。
「うん。すごく美味しいよ。初めてパエリア作ったのに。やっぱりすごいね木下さんは」
「っ！　良かった……」
パァッと嬉しそうな微笑みを浮かべると木下さんもパエリアに手をつけ始めた。
それを見た僕は思わず持っていたスプーンを取りこぼしそうになる。
……うう、どうして女の子の笑顔ってこんなに可愛いんだろう。悪い事だと分かっていつもその顔から視線を逸らせない。
おかげでせっかく作ったパエリアに目がいかなくなってしまう。
数時間前に木下さんの本性の一部を垣間見て、彼女がただの優等生でなくどちらかというと美波系暴力少女だと分かっていてもその笑顔は十二分に僕の胸を穿つ威力があった。
そんな感じでちらちらと見つめていると、正面から姉さんに声をかけられた。
「アキ君、食べないのですか？」
「えっ!?　た、食べるよちゃんと！　あはは」

いかんいかん。いつまでも見つめてたら木下さんに失礼だし姉さんにも不信がられる。

僕は胸の内の動悸を誤魔化すように、手を早く動かしてパエリアを口に運ぶ。

うん、やっぱり美味しい。

一口一口を運んでいくたび、口の中がなんともいえない幸福感に満たされる。

パエリアが好物というのもあるけど、何より女の子の手で作られたというのが僕にとって最高の調味料だ。

これだけでご飯三杯はいける。空腹は調味料と同じ理屈だ。

別に僕はフェミニストじゃないけど、もし目の前に高級食品であるキャビアと女の子の手作りのおにぎりがあったのなら僕は迷わずおにぎりに手を伸ばす男だと思ってる。

ああ、それにしてもパエリア美味しい。

スプーンを持つ手が止まらない。

「……」

そんな感じに料理に向かっていると、姉さんがじっとこっちを見てる事に気がついた。

「ん……、何姉さん？」

「なんだか嬉しそうですね。アキ君」

「そ、そう……？」
「はい。何かいいことでもあったのですか？」
「うぐっ……、そ、そんなことないよ。僕はいつも通りだって！」
「……そうですか」
口ではそんなこと言っても、目は全然納得していないと言わんばかりに僕を凝視する。
ぐっ、姉さんは僕が異性と親しくする事を嫌っているからなぁ。
おまけに姉さんと木下さんは今日が初対面だ。姉さんが妙な警戒心を抱くのも無理はない。
これは僕と木下さんの仲を見定めているのだろう。
どう説明すればいいか考えていると、姉さんの視線は、ゆっくりと僕から木下さんへと移って行った。
「優子さん。優子さんはアキ君とはどういう関係なのですか？」
「か、関係っ!?」
「はい。秀吉君とはお勉強会や海へ行った時などよく顔を合わせますが優子さんとは初対面ですから、姉として弟が女性を家に連れてきたとなれば、その関係性が気になるというのはごく普通のことです」

おかしい。姉さんが言うと全然普通に聞こえない。
「べべ別にっ。アタシと吉井君はただのっ！　ただの――」
「ただの？」
「――ただの……」
木下さん顔を赤くして小さく口を開けたまま僕を見て、
「……どんな関係なんだろ？」
おかしな問いを投げかけてきた。
「えっと。普通に友達じゃないかな？」
「そうなんだけど、でもこれまでほとんどまともに顔を合わせる機会なかったじゃない。今日ほど話をしたこともなかったし。……アタシ達って友達なのかな？」
「そりゃあ秀吉のお姉さんだし、秀吉は友達だから木下さんも友達だよ」
「その理屈はなんか変でしょ。それだと玲さんもアタシの友達ってことになるじゃない」
「あ、そっか」
あれ？　じゃあ僕達ってどんな関係なんだろう。
うーん、僕として友達だと思ってるんだけど、そう言われるとなんか自信がなくなっちゃうな。

こうして一緒にいるのも偶然放課後で木下さんの秘密を知っちゃったからで、
それで……あっ！
それだ！
「わかったよ。僕と木下さんの関係」
「えっ？　何？」
「脅迫犯とその被害者だ」
「ふんっ」
「ぐひっ!?」
ぐあっ!?　あ、足が……！　木下さんの足の踵が僕の足を床に縫い付けて痛ぁ!?
「ごめんなさいい。よく聞こえなかったわ。今なんて言ったの？」
「だ、だから脅し脅される（ぐぎぃっ）友達！　僕と木下さんは何のやましいこともない正真正銘ただの友達です！」
「……」
「あがぁっ!?」
踏んだ足をさらにぐりぐりと圧し付けられる。
おかしい。僕は何一つ間違った事は言ってないはずなのにっ！
「どうしたんですかアキ君。顔が苦痛に歪んでいますよ？」

「な……なんでもないよ。ちょっと貝の殻で口の中を切っただけだから……」
「そうですか。それで、結局お二人は友達ということでいいんですか？」
「う……うん。ね、木下さん」
「ええ」
「……なるほど、わかりました。いろいろ個人的な疑問はありますがそういうことしておきましょう」
「??　疑問って何さ？」
「言ってほしいのですか？」
「気にはなるけど、何その不吉な前フリ」
「はい。アキ君の返答次第では姉さんは大切な家族の一人を失ってしまいます」
「言わなくて結構です！」
「そうですか」
　一体何を言う気だったんだ姉さんは……。
「あの、すみません。アタシちょっと飲み物入れてきますね」
「あ。いいですよ優子さん。私が入れますから」
「ありがとうございます」
「アキ君はいいですか？」

「いいの？　じゃあ僕のもお願い」
「はい」
　姉さんは配膳用のトレーにコップを３つ置いてキッチンへ歩いていった。
　それを後ろから眺めつつパエリアを食べていると、突然横から服の袖を引っ張られた。
「ん？」
「吉井君。なんで玲さんって執拗に吉井君の交友関係を気にしてるの？」
　さすがに姉さんの詰問攻めがおかしいと思っていたらしい。
「姉さんは僕が異性と一緒にいることを禁止してるんだ。最近はちょっとマシになったんだけど、木下さんは初対面だから警戒してるんだと思う」
「禁止って……どうして？」
「それは……姉さんが僕のことを愛してる……から」
「??　それって別に普通じゃないの」
「一人の異性として」
「……」
　可愛そうな人を見る目を向けられた。
「おまたせしました。……おや、どうかなさいましたか？」

「……なんでもないです。ありがとうございます」

若干苦笑い気味にお茶を受けるとる木下さん。

うん、その気持ちはよーく分かるよ。

確信した。やっぱり姉さんと木下さんは同じ姉という種族でも違う世界の住人だ。

第１７話

そうこうしている間に晩御飯を食べ終わった。
まったく、今日のパエリアは最高だった。
おこげの歯応えとご飯の焼き加減も良かったし具材の火の通り具合もバッチリだった。
口に入れた瞬間にふわりと膨らみ、そしてゆっくりと溶けていくような滑らかかつ長く残る風味が今も尚僕の口内を包み込んでいる。
スプーンに乗ったご飯とタコや貝といった色取り々のおかずを歯と舌で噛み締め味わった感触は今でも忘れられない。
ああ、どうしてパエリアはこんなに美味しいんだろう。
この料理を好物として生まれ育った僕は心底幸せ者だと思う。
これだけで僕は明後日の分の腹まで満たせてしまいそうだ。
今日もお腹いっぱい食べた。これ以上はもう何も入らない。満腹だ。至福だ。満足だ。
だから、だから。

「木下さん。もう遅いから帰らなきゃ。暗い夜道は危険だから家まで送って行くよ」
「え？　別にアタシはまだ――」
「駄目だよ。最近は何かと物騒なんだから。あ、僕のことは気にしなくて良いから。大丈夫。遠慮しないで、食べた分はきちんと運動しなきゃいけないからね」
「何を言っているのですかアキ君。まだデザートを食べていませんよ」
　もう、何も食べたくない――！
「いやいや姉さん。今はもう夜の８時だよ？　僕や雄二ならともかく木下さんのような女の子がこんな遅くまで家に帰らなかったら親御さんが心配しちゃうよ」
「……」
「確かに姉さんのデザートはすごく、それはもう別腹の別腹を作れるぐらい楽しみだったけどね。でも思いのほかパエリアを作るのに時間も掛かっちゃったしさ。もう外は普段背景の一部と化している街頭が町の主役を張れるぐらい真っ暗闇だ。だからここは姉さんの料理に対するプライドより木下さんの安全を考慮すべきだと思うんだ。当然夜道を歩いて帰るんだから僕も男として安全だと確信できるまで送っていく義務がある。こんな時間に木下さんを一人で帰らせるなんて心配で夜も眠れないからね。そういうわけだからここはこれでお開きするということにしようよ。料理はいつでもできるけど事件は起きてからじゃ遅いんだから」

僕は口からペラペラと逃げ口上を並べ立てる。
もはや説明するまでもないが、姉さんの料理は戦略級に危険だ。
ここでなんとしても姉さんがデザートを作る時間を消費させないと事件なんて生易しいと思えるぐらいの最悪の事態に発展しかねない。
やる気を出してくれた姉さんには少し申し訳ないと思うけど、ある意味これは人助けなんだ。
手段を選んじゃいられない。中途半端な偽善は返って寿命を縮めるだけだ――！
「……アキ君の言い分は分かりました。そういうことでしたら仕方がありません」
僕の真正面で姉さんは目を閉じ感じ入るようにそう言う。
「ほんとに？　はぁ……よかった。いやぁあ話の分かる姉さんで僕は嬉しいよ」
「ふふ、人のいる前でそう褒められると照れてしまいます」
「そんなことないって、姉さんは素直に喜んでいいんだよ」
何しろ殺人事件が未然に防がれようとしているんだ。
人として越えてはならない一線を一歩前で立ち止まれたその勇気は敬意を表するに値するだろう。
もっとも、本人に自覚があれば。の話だが。
ともあれ危機は去った。

そのことに密かに胸を撫で下ろしていると、隣の木下さんが遠慮しがちに口を開いた。

「吉井君。玲さん。アタシならまだ大丈夫ですから。家にも連絡は入れていますし。まだ洗い物も終わってませんから。最後までいさせてください」

「木下さんっ!? それはちょっとっ」

「いいの！ アタシがそうしたいんだから。まったく、吉井君は気を使いすぎ。気持ちは嬉しいけどアタシも中途半端は嫌なの。それに玲さんの作るデザートも食べてみたいし」

木下さんの台詞が自殺志願者のそれにしか聞こえない僕はすでに末期なのかもしれない。

「いや、でも……」

拙いな。

すでの体内に耐性ができた僕ならともかく、姉さんや姫路さんの料理を食べた事のない木下さんはかなりやばい。

あれは決して素人が手を出していい料理じゃないんだっ！

事の次第によっては最悪吉井家と木下家で裁判沙汰にもなりかねない。

穏便に事を済ますために木下さんに真実を伝えるという手段もあるが、姉さんの名誉

の為にできればそれは最後の手段にしたいところだ。
　うううう、どうすれば……。
「アキ君。そんなに悩まなくても大丈夫ですよ」
「え？」
「姉さんはアキ君の考えていることはちゃんと分かっています」
　まるで子供をあやす時の包み込むような声で姉さんは僕を見る。
　??　分かってるってどういうことだろう？
　正直これまで経験を省みても、激しく嫌な予感しかしないんだけど。
「時間を掛けずとも、すでに出来ていますから。何の心配もありません」
「……」
　そして、こういう時に限って僕の勘は良く当たるのだ。
　ああ、なんて無常。
　きっとこれは、それほど親しくなった女の子を急遽家に招くなんていう素敵イベントの起こした僕に対しての神様からの嫉妬なんだろう。

☆

「おまたせしました」
執行人が僕と木下さんの前に小皿を置く。
姉さんが作っていたのはプリンだった。
側面は卵黄の黄色いつるつるした弾力のありそうな光沢が天井の明かりに反射して光っていて上にはカラメルがかけられている。見た感じカラメルも手作りみたいだ。
パッと見は本当にどこにでもある普通のプリンだった。
これが今日買った本に載っていたデザートなんだろうか。
パエリアができるまで僕と木下さんがキッチンを使用していたのに一体いつのまに、どこで作っていたのだろう。
「どうぞ。遠慮せず召し上がってくださいね」
「……」
どうしよう。普通に美味しそうだ。
いやっ、だ……騙されるな吉井明久！
惚れ薬の作り方なんて載っている雑誌のプリンなんて絶対ろくなもんじゃない。
きっとこれにも何らかの効果があるに違いないっ。
「ね、姉さん。一つだけ聞いてもいいかな？」
「はい？　なんですかアキ君」

「これはちゃんと、その……手順通りに作ったの？　余計な事とかしてない？」
「あら、よく気がつきましたねアキ君。そうです。作っている途中に味見をしてみたのですが少し味が薄いと思ったので姉さんなりのオリジナルの味を出してみました」
　駄目だ！　もう不安材料しか見つからない！
「玲さん。玲さんの分はどうしたんですか？」
　自分の所に皿を置かない姉さんを見て、木下さんは眼下に出されたプリンと姉さんを見比べるように視線を動かして問いかける。
「それが冷蔵庫にある材料の関係で二人分しか作れなかったんです。やはりろくに用意もせず意気込みだけでやろうとしたのがいけなかったですね。二人は私に気にせず食べてください」
「そうなんですか……。なんだか申し訳ないです」
「いえいえ、アキ君と優子さんが私の作ったデザートを食べている姿を見れるだけでも私は満足ですから。さあ、どうぞ」
　姉さんの促す手が僕には絞首台に上れと言われているようにしか思えない。
「はい、いただきます」
　何にも知らない木下さんは柔和な笑みと共にスプーンを手に取る。
「あの、木下さん。それほんとに食べるの……？」

「食べるに決まってるでしょ。玲さんの好意を無碍にはできないじゃない」
「だ、だよね……」
どうしよう、止めるべきだろうか。いやでもここで変な真似をすれば姉さんに僕達の関係性について余計な不信感を抱かせてしまう。
でもここで木下さんに卒倒されるのはもっと拙い。
ああでもどうやって姉さんの料理の危険性を伝えればいいんだ。こればっかりは一度食べないと理解してもらないし。この様子からして食べないという選択肢は彼女の中にはないだろう。
仮にここで僕が無理やり皿を奪っても結局は僕がただ女の子が使用した皿を奪って不埒な真似をしようとする変態という最低なレッテルを貼られるだけ。
くっ、なんて板ばさみなんだ。二者択一のどっちを選んでも最後は奈落の底にダイブだなんて。こんなのってない。
そんな苦悩をする僕を他所に、木下さんはプリンを一つすくい口に運んだ。それが殺傷能力を持つ毒薬だとも知らずに。
「……うっ」
「き、木下さんっ!?　大丈夫！　意識ははっきりしてるっ!?」
「アキ君。その質問はおかしいです。それで、お味の方はいかがですか？」

「うぐ……っ　お、おいしい……です、とっても……」
口元を手で押さえながらも必死に笑顔を取り繕って言葉を紡ぐ。
すごい！　今僕は鋼の精神力を目の当たりにしているっ！
「ただ……ちょっとさっきからお腹の調子が悪いようなので、おトイレを借りてもいいですか？」
「もちろんです。どうぞ」
「すいません……、では少し失礼します」
そう言う傍らで、開いているもう一方の手が僕の服を引っ張る。
どうやらついて来いということらしい。
「ね、姉さん。僕自分の部屋の電気を付けっぱなしだったこと思い出したよ！　ちょっと消してくるね！」
「あっ――」
姉さんの返事を聞く前に僕は席を立った。
そのまま廊下に出る。
木下さんは廊下で相変わず手で口を抑えたまま恨めしそうに僕を睨んでいた。
「な、なんなのよこれ……。アンタ一体何したわけ……」
僕の肩に手を置いて舌足らずに言う。

「僕のせいじゃないよっ。あれが姉さんの腕前なんだ。姉さんは極度の料理オンチで何を作らせても絶対にゲテモノにしちゃうんだよ」
「だ、だからってあれはないでしょう、不味いなんてレベルじゃないわよ。びっくりして思わず叫びそうになったわ。あうぅ……。まだ舌が変な感じがする」
料理を食べて叫ぶなんてあきらかに普通じゃない。
「後で水を思いっきり飲んで口を潤しておいたほうがいいよ。きちんと消毒しとかないと後遺症とか出るかもしれないし」
「う～……、そんなプリン聞いたことないわよ」
まったく同感である。
「……でもちゃんと意識があって安心したよ。もし倒れられたらどうしようか不安で不安で」
「何よそれ」
あーもう。とか言いながらまだ気持ち悪いのか口をモゴモゴさせながら悪態を吐く。
関係ないけど、ちょっと涙目になっている顔は秀吉に似ていて不覚にも可愛いとか思ってしまった。
「はぁ、なんで事前に言わないのよ」
「言おうと思ったけど、でももし僕が『そのプリンは実は化学兵器で食べると命に関わる

よ』って言ったら信じた？」
「信じないわね」
　でしょ？
「つまりこれは実際に食べないと理解を得られない悪質なトラップなんだ」
「前例があるなら玲さんに直接言えばいいでしょう。なんでずっと放置してるわけ？」
「口で言って治るなら吉井家の食事事情はここまで切迫してないよ。一度でも苦情を言えば今度は治るまで延々食べさせられるんだから」
「それは地獄ね……」
　分かってもらえてなによりだ。
「でもすごいよ木下さんは。姉さんの料理を食べてなお笑顔で応対できるなんて」
「当たり前でしょ。せっかく作ってくれたのに失礼な真似なんてできないじゃない。それに食卓の前で嘔吐するなんて無様な醜態を晒したくもなかったし」

　毅然と言う。
　何があっても人前では絶対に醜い姿を晒さない。
　これまで仮面を被って優等生を続けてきた木下さんのプライドの高さが伺える台詞だった。

「ちなみに、さ」
「うん？　何よ」
「あのプリン、どんな味だったの？」
「……えっと」
嫌な記憶が蘇ったのか木下さんの表情は歪む。
そして、苦いものを吐き出すように言った。
「酸っぱかった。口の中の水分が全部吸い取られるぐらい酸っぱかった」
「そ、そうなんだ……」
プリンなのに酸っぱいとはこれいかに。
やはり姉さんの調理技術は異次元の領域だ。
まさか卵黄だと思ってた黄色い面はすべてレモンだったのか？
とりあえずいつまでも廊下にいるわけにもいかないので、僕達はリビングに戻った。
さっきと同じ席に腰を下ろす。
……すでにこの時、僕はある一つの決意を固めていた。
これ以上客人である木下さんに迷惑はかけられない。
これは吉井家の問題だ。
ならばその責任は長男である僕が取らなければならない。

ふぅ、仕方がない。
――両方、僕が食ってやる――――！
「木下さん。もし僕が死んでも骨は拾ってね」
「はい？　あの、ちょっ、何してんの！」
両手にそれぞれ乱暴に皿を掴み口元へ持っていく。
へっ、スプーンなんていらないね。
だってプリンは飲み物だもの。
こんなもの、どんな味だって舌が味を認識する前に飲み込んでしまえば――っ！
「ふん――っ」
飲み込む。
あ、ダメだこれ。
がくんっ
「吉井くーーんっっ!?」
口と喉を焼く酸味と叫び声を最後に僕は気を失った。

※おまけ　バカとサンタと潜入ミッション！

１２月２４日

世間一般がクリスマスイブで浮かれ盛り上がるこの日。

僕達は霧島さんのご好意で霧島さんの家で泊りがけのクリスマスパーティを執り行っていた。

参加メンバーは僕、雄二、秀吉、ムッツリーニの男子勢。

女子には木下さん、姫路さん、美波、工藤さん、そして霧島さんという豪華で色取々メンバーだ。

お昼から集合し、これまでの出来事を振り返る雑談に耽った後、豪勢な夕食を頂き、そして入浴が終わり、最後には工藤さん主体で始まった王様ゲームで大変な目にあったりした。

そんな急がしすぎるも楽しくて、一生残るであろう思い出になるこの日。

その夜。２４日から２５日に日付が変わる一時間前に僕、秀吉、ムッツリーニの三人は割り当てられた部屋の中で顔を突き合わせていた。

「……ついに、この時が来たね」

僕は両隣の二人に向かい小さい声で宣言するように告げる。
「うむ」
「……（こくん）」
「ムッツリーニ。準備は？」
「……ぬかりはない」
低い声で肯定するムッツリーニの傍には３つの紙袋がある。
恐らくその中に例のブツがあるのだろう。
「秀吉、今の時間は？」
「２３：００時。作戦決行まであと一時間じゃ」
「オッケー。じゃあ開始前に中身の確認をしておこうか。ムッツリーニ、お願い」
「……承知」
ムッツリーニは紙袋の一つを持ち袋の中に手を突っ込んだ。
そしてガサゴソという音を立てながら、中から赤と白の何かを取り出す。
広げると、正体は先端に白くて丸い綿が付けられた尖がり帽子と白ひげのような大きな綿だった。
それらを床に置きながらムッツリーニはどんどん袋に手を入れて中身を取り出していく。

すべて出し終えて確認すると、それは、まごうことなきサンタクロースの衣装だった。
「……不足なし。きちんと三人分用意してある」
「おお、すごいね」
「元はワシの演劇用の衣装なのじゃがの。顧問にお願いして少しだけ借りる事ができたのじゃ。しかし驚いたのう。まさか明久が皆に内緒でサンタクロースになってプレゼントを贈ろうなどと言い出すとは」
「あはは、せっかくこうしてみんな集まれたからさ。何かあっと驚かせるイベントをしてみかったんだよね」
照れくさくなって秀吉の視線を受け流しながら言う僕。
そう、これはクリスマスという年の一回の一大イベントに僕が発案した題して『クリスマスプレゼントを贈ろうトｉｎ霧島家』なのだ！
秀吉は衣装担当。ムッツリーニは女子の可愛い寝顔の撮影を取引条件に協力を取り付けたというわけだ。
「ところで明久よ。雄二の姿が見えぬがどうしたのじゃ？」
いつものバカ４人組の一人がいないことに首を傾げる秀吉。
「うん？　雄二はもう霧島さんにプレゼントを渡しに行ったよ」
「ほう、まだイブの夜は終わっておらぬのに気が早いのう。普段はそっけなく接しても

おってもやはり心の奥では霧島のことを大事にしておるのじゃな」
「いやいや秀吉。プレゼントは雄二だよ」
「なぬ？」
今回のクリスマスイベント。
寝室は女子は女子部屋。男子は男子部屋に分かれてるんだけど、霧島さんだけは自室で睡眠をとっているのだ。
その理由は簡単。
僕がこの企画を思いついたときに霧島さんに相談した際、何かほしいものを尋ねたとき、
『……雄二の愛がほしい。それ以外はいらない』
と答えたからだ。
さすがに男子と女子が一緒の部屋で寝るのは反対意見が出るだろうと踏んだ僕は交換条件として霧島さんには雄二と自室で一夜を過ごすこと条件に合意した。
きっと今頃はムッツリーニが持ってきたスタンガンで気絶させられた雄二を抱き枕に霧島さんは幸せな夢を見ている事だろう。
「なるほどの。なんというか、クリスマスでも雄二の不憫さは変わらんの」
「なに言ってるのさ秀吉。あんな美人で可愛い霧島さんと一緒に一夜を過ごせるなんて

幸せなことじゃないか」
「……（こくん）羨ましい」
「そう思うなら明久は霧島と交渉して姉上と同室してしてもらえばよかったじゃろうに」
「うっ、それは……」
「何せ明久と姉上と正真正銘の〝恋人同士〟なのじゃからな」
「うわぁっ!?　そんな大声で言わないで！　羞恥心に殺される！」
全身駆け巡る鳥肌に身悶える。痒い！　体がむず痒い！
秀吉の言うとおり、実は僕と秀吉のお姉さんである木下優子さんは紆余曲折あり彼氏彼女の、いわゆる恋人関係にある。
その詳細について仔細に説明すると長くなるのでここでは割愛させてもらう。
最初は恋人であることを隠していたのでそれほどでもなかったんだけど、すでに広く知れ渡ってしまった今ではそれを突かれる度に羞恥に身を悶えさせていた。
勿論、彼女である木下さんのことは、その……好きだけど……。だからって同室になるのとそれは話が別だ。
ただでさえ普段一緒にいるだけでえも言われぬ緊張感で体が凍ってしまうのに、同じ部屋で身心を共にするなんて羞恥と興奮でどうなってしまうかわからない。

だ、大体僕達はまだ高校生なんだから、そういうのはまだ早いよ！
「何を今更。すでに実質同棲状態まで発展しておるくせに」
「しー！　駄目だよ秀吉！　それは重大なネタバレだから！」
「……挽肉にしてしまいたいほど妬ましい」
隣では歯を噛み砕く勢いで口を噛み締めているムッツリーニが怨念の言葉を唱えていた。
「し、しない！　木下さんと同室になんてなってないから！　大体それ言うならムッツリーニだって最近工藤さんと良い関係じゃないか！」
「……（ぶんぶん）そんなことはない」
「そんなこと言って。この前だって二人で喫茶店でデートしたっていう情報はすでに僕達に耳に届いているんだ！」
「……あれは新しいカメラのレンズを買うついでに寄ったにすぎない」
ふっ。甘いよムッツリーニ。そんな言い訳が僕達に通用する訳ないじゃないか。
休日に女の子と二人で出かけるという行為。それだけで立派なデートだ。
「落ち着くのじゃ二人とも。もう二人には意中の相手がおるのじゃから女がどうとかの恨み妬みは卒業せい」
「た、確かに。それもそうだね。ごめんムッツリーニ」

「……お互い様」

秀吉の言うとおりだ。危ない。危うく不毛な言い争いをするところだった。想い人がいる同士嫉妬し合ってもお互いブーメランにしかならないのに。

「まったく、彼女ができてもお主らは変わらんのう。……ん？　そうなると独り身の男子はワシだけなのか？」

「……彼女じゃない」

「そんなことないよ。秀吉は僕の愛人だよ」

「やめてくれ！　そんなこともし誰かに聞かれたらワシが姉上に殺される。というか明久よ。お主には姉上がおるのにまだ諦めておらぬのか！」

「……秀吉はＦクラスの共有財産。特定個人のものになることは俺が認めない」

「なんでそうなるのじゃ！」

すでに僕達の中で秀吉は象徴的存在へと昇華されつつあった。

そもそも木下さんと秀吉は双子だけど別人なんだから同列に扱うなんてできないよね。

好きなのはお姉さんの方でも、それで秀吉は可愛さが上下するわけではないし。

秀吉には秀吉の。木下さんには木下さんのそれぞれ違う魅力があるんだから。

閑話休題。

「まあその話はまた折を見て議論するとして、とりあえず今は秀吉の用意してくれたサンタの衣装を着てみようよ。直前でサイズが合わないなんてなったら困るし」
「そ、そうじゃな」
「……秀吉はこっちを、明久はこれで。俺は床に広げた衣装を着る」
「了解」
「わかったのじゃ」
　ムッツリーニからそれぞれ衣装の入った紙袋を受ける僕達。
「それじゃさっそく試着してみようかの」
「そう？　なら僕達は廊下に出てるね」
「……グッドラック」
「待つのじゃ。どうして男同士なのに出て行こうとしてるのじゃ」
　背中を向ける僕たちを引き止める。
　何を言ってるのだろう秀吉は。そんなの当たり前じゃないか。
「そりゃあそうだよ。だっていくら秀吉とお姉さんが別人って言っても顔はそっくりなんだから僕としてはいろいろな意味で恥ずかしいというかなんというか……」
「……右に同じ」
「む、むぅ。そう言われると納得じゃが。なんだか腑に落ちぬのう」

「じゃ、がんばってね」
「……応援している」
納得いかないような顔で紙袋を見つめている秀吉をおいて、僕達は廊下へ出てきた。

☆

そんなこんなで全員の着替えが終わり、決行の時間となったので僕達は女子が眠る寝室の前に立っていた。
「ふう、なんかドキドキするね」
「……焦りは禁物。平常心を保て」
「そうじゃの。……ところで、どうしてワシの衣装だけ丈が短いのじゃ？」
それに関しては持ってきた秀吉の自業自得だと思う。
赤い服に三角の帽子、それに白いひげを付けた僕達はそれぞれプレゼントの入った白い袋を肩に背負っている。
これならどこからどう見たって立派なサンタクローズだ。疑われる箇所などどこにもない。
僕は浮きたつを気持ちを抑えながら静かな声でムッツリーニに言った。

「じゃあムッツリーニ。鍵をお願い」
「……十秒待て」
懐から銀色に光る何か何かを取り出したムッツリーニは、それを鍵穴に差込んで上下左右に動かす。
ほどなくして、扉はカチャンという音が鳴り開錠に成功した。
「……クリア」
「よし」
「全員寝ておるかのう……」
「しっ。開けるよ……」
先陣を切った僕はノブに手を掛けて慎重に回す。
そして針の穴に糸を通すかのように、ゆっくり、繊細な動作で扉を押し開けた。
キィー……と心臓に悪いを音を立てながら、扉は完全に開ききり、ついに女子の寝室に足を踏み入れる。
当然ながら、中は真っ暗だった。
視線を左右に向けて中の状態を確認する。よし、無事全員眠っているようだ
……さあ、ここから勝負だ。
「(それじゃあ各自それぞれの担当の人にプレゼントを置こう。健康を祈る)」

「(……ラジャー)」
「(了解じゃ)」
3手に分かれて行動を開始する。
僕の担当は当然ながら彼女である木下さんだ。
今回は隠密ということでこういった仕事に慣れたムッツリーニが姫路さんと工藤さんの二人を担当することになっている。
きっとあの寡黙なる性識者なら完璧に任務を遂行するだろう。
『……っ!!!!(パシャパシャパシャ)』
『(む、ムッツリーニ! シャッターを切る前に鼻血を抑えるのじゃ)』
『……この血は名誉の出血だ』
『(言っておる場合か!)』
配役をミスったかもしれない。
どうでもいいけど、フラッシュも焚かずこんな暗がりで撮ってきちんと写るのだろうか。
「(……と言っても、これだけ暗いと誰が誰だか……)」
つま先立ちで進みながらなるべく音を立てずに寝顔を確認していく。
通り過ぎていく度見える寝顔は、皆天使ように純真で可愛らしい顔で寝息を立ててい

た。

……あー。みんなの寝顔可愛いな。許されるならずっと見ていたいぐらいだ。

思わず見惚れそうなって、僕は慌てて頭を振った。

っていけないいけない！　僕にはちゃんと将来を誓い合った人がいるんだ。こんな煩悩に負けていられない！

「（煩悩退散悪霊退散……性欲よ今だけ消え去れ）」

精神を清めながら目的の場所まで歩く。

そうして部屋まで端まで行くと、ようやく目当ての人物の姿を見つけた。

「（いた……）」

恐る恐る顔を近づけると、布団から顔だけ出して、すーすーと寝息を立てて木下さんは静かに眠っていた。

思わず安堵の溜息を吐く。

長い睫毛に、普段は強気なイメージを醸し出す大きな瞳が今は閉じられている。すごく綺麗な顔だ。

意識は完全に落ちているようで掛け布団の上から胸が上下しているのが分かる。

「……（ごくんっ）」

その寝顔になんとも言えない気持ちが湧いてきて無意識に生唾を飲み込んでしまっ

た。

うう、やっぱりこういうのは心臓に悪いよ。

規則正しい寝息を立てるその唇を見てると脳裏にいけない考えが浮かんでしまう。

僕は知っている。

その唇の感触も、柔らかさも、味も……。

考える度、だんだんと僕の中に『キスがしたい』という欲求が理性を飲み込んでいく。

「だ。駄目だ駄目だ！　そんな不意打ち卑怯じゃないか。どうせやるなら正々堂々――ってああ。これは別にそういう意味じゃなくて――！」

「（明久！　声が大きいぞい！）」

「っ!?」

しまった。つい我を忘れて。

は、早く枕元にプレゼントを置いて退散しよう。でないと僕の中の本能が暴れだしてしまう――っ！

気分を紛らわす意味も込めて、肩に担いでいた袋を下ろして中身を確認する。

そういえば木下さんって何がほしいんだっけ。

「えーと、よいしょっ」

↓明利と康二の男の友情（ラブ）↓ＢＬ本

とても複雑な気分だ。

「(ま、まあ木下さんの趣味を理解した上で僕はこの人が好きになったんだし。今更びっくりするようなこともないよね)」

内心の気持ちをぐっと飲み込んで僕は包装されたままの本を枕元にそっと近づける。

その時、気配に気づいたのか木下さんは「ん」と寝言のような呟きと共に寝返りを打った。

「!!!」

き、気づかれた!?

心臓が爆発しそうなぐらい驚き中腰のまま全身が硬直する。

「ん、……すー」

「……」

お、起きてない。起きてないよね？

まあ起きてたらその時点で叫び声を上げられて僕の人生はゲームオーバーになるだろうけど。

大丈夫だと心の中で唱えつつ念のため回りこんで顔を確認する。

「き、木下さ～ん……？」

「――――」

返事はない。よし、大丈夫だ！
後はプレゼントを置けば任務完了だ。
きっと翌朝になって枕下にプレゼントが置いてあるのがわかったらみんな驚いて喜ぶに違いない。
その時の表情が今から楽しみだ。
すでの確定された未来予想に声が出ないよう俯きながら微笑む。
その時。
むくり
木下さんの隣で眠っていた姫路さんが突然起き上がった。
「?……ん、誰かいるんですか？」
「!?!?!?」
姫路さん――っっっ!?!?　どうしてこのタイミングで起きるの!?
まさかムッツリーニがしくったのか！
急いで周囲を見回し奴の姿を探す。どこだ。どこに行った！
必死に視線を回すも暗闇の所為もあって中々見つからない。くそっ！　あの野郎！
「あれ、今人影が……」
「――っ！」

咄嗟に目の前の布団に飛び込む。そして掛け布団顔まで被った。
とにかく今だけでも姫路さんの視界から離れないと！
お願い姫路さん。こっちに気づかないで！
胸中の不安と恐怖から逃れる為目の前の何かに必死にしがみ付きながら何度も祈る。
「んぎゅっ」
そうしている、突然抱き枕が呻き声を上げた。
こら、音を立てると姫路さんにバレちゃうじゃないか。
「??」
――って、ちょっと待って。
僕は今何にしがみ付いているんだ？
確かにこれはすごく柔らかいけど抱き枕の感触とはまた違う柔らかさだ。
そもそも抱き枕が声を出すなんておかしいしそれ以前にこの部屋に抱き枕なんてあったっけ？
「（違う。これは抱き枕じゃないぞ）」
冷静になって目の前の物体を恐る恐る確認する。
カバーにしては異様に薄い布切れは上下に揺れていて、視線を上に辿っていくと途中で低い山のような凹凸があった。

これは抱き枕というより、人肌の感触。
ああそうか。これは抱き枕じゃなくて僕の恋人の木下優子さんじゃないか。
まったく、僕ったら急いでたからって自分の彼女に抱きつくなんてどれだけ欲求不満なんだよ。あははは。
…………。
嫌な汗が全身に流れ始める。
僕の中の危険信号が逃げろ逃げろと緊急サイレンを鳴らしている。
やばい。ヤバイ!!!!!
あまりのバカさ加減に泣きそうになる。ここまでくるともう尊敬ものだ。
震えながら視線を顔の方へやると。
「……吉井君、何、やってるの…………?」
ほんの一センチ先に細目で僕を見る――否。睨む彼女の姿があった。
「(きききき木下さん――っっ!?!? 違うんだ。これには深い事情があって!!)」
「事情ね。なら教えてくれない。こんな夜中に女の子の部屋に入ってしかも恋人に抱きついている理由を。その姿と合わせて」

「（え、えっと……）」
くっ、うまい言い回しが思いつかない。
かといってここで『吉井サンタです♪』なんてふざけたら確実に僕の社会生命は死に絶える。
落ち着け。まだ回避ポイントはあるはずだ。
冷静になって自分の現状を俯瞰的に確認するんだ。
僕の姿→サンクロースの衣装。
状態→起き上がった姫路さんから隠れるために愛しの彼女に抱きついている。
木下さん→現状は理解できてないが取り合えず怒ってる。
結論→救いがたい変態による強行。
あれ、回避ポイントなし？
「こ、これは」
「??　優子ちゃん？　どうかしたんですか？」
――――っ!?!?
木下さんの体越しに姫路さんの寝ぼけた声が聞こえてきた。
「ひめじさむぐっ!?」
声を出しそうになった木下さんの口を慌てて手で塞ぐ。

ああ。余計誤解を招く状況になってるぅっ！
「（お願いしますお願いします。後で何でもしますから今だけは黙っててください！）」
「――っ！　――っ！」
「（痛っ！　痛いっ　つねらないで！）」
くっ。片手は木下さんの体を抑えるのに使ってもう片方の手は口を押さえてるからつねる手を止める手段がない。
かといって口を塞いでいる手を離したら絶対大声を出されて終わりだ。
どうしたらいいんだ――っ！
何か、何か変わりに木下さんの口を塞ぐものは。
絶望的な未来を認めかけた時、そこで暗闇に一筋の光が差し込むように、僕の脳裏で一つの解決策が浮かび上がった。
……けど、いいのかな？　これをやったら後でなんて言われるか。
「……？　優子ちゃん？　寝てるのでしょうか？」
「!?」
駄目だ。このままじゃ気づかれる！　ええい迷ってる時間はない！
怒られて鉄拳制裁ならまだよし。もしこれを気に別れ話を持ち出されたら何が何でも許してもらうよう懇願する。

今は一分一秒が惜しい！　こうなったらやるしかない！
心の中でカウントを取り、それが０になると同時に僕は口を塞いでいた手を離した。
「――ぷはっ。ちょ、よし――んむ――っ!?!?!」
同時に、僕は手を入れ替わるように自分の唇を木下さんの柔らかい唇に押し当てた。
「あ、よしい……くん。……んんっ」
「んっ」
繋がれた部分から暖かくて柔らかくて、甘い感触が僕の唇を通して脳の隅から隅まで伝わってくる。
ああ、今キスしてるんだ。僕の好きな。大好きな木下さんと。
ただ無理やり唇を押し付けただけのロマンのカケラもない力任せのキスだけど、体のほうはどうしようもない興奮と歓喜に震えている。
うっすらと目を開けると、目の前には長い睫毛と大きな瞳を丸めて顔を真っ赤にした木下さんがいた。
今の自分の状態をゆっくり整理、理解していっているのか、驚き丸くなっていた瞳はだんだんと薄く――やがて完全に閉じられる。
僕の行動によほど驚いたのか、さっきまで釣られた魚のように暴れていた体が凍ったように身じろぎしない。

それでも僕はこの人がどこにもいかないように、両手でしっかりと彼女の姿を抱きしめた。
「ふぁ――ん、……んふ」
喘ぎ声にも似た音が目の前から発せられる。
次の瞬間、背中に暖かい何かが当たった。
どうやら木下さんの手が僕の背中に回されているらしい。
「……気のせいみたいですね」
そんな声が部屋の奥の方から聞こえ、そして体を横にする気配が感じる。
ふぅ、どうやら気づかれなかったようだ。
姫路さんの寝息を確認した後で、僕は背中に回した手はそのままゆっくりと唇を離した。
「……よ、吉井……君」
息切れしたのか、顔を真っ赤したまま僕の名前を途切れ途切れに紡ぐ。
「ごめん、こんなことするつもりじゃなかったんだけど……」
「……バカ。い、いきなり……しておいて何言ってるのよ……」
「うっ」
「それに……この手も」

「手？　あっ」
そういえば僕木下さんのこと抱きしめっぱなしだった！
慌てて手を離そうとすると。

「はーいそこまでー」

途端、パッと部屋の照明が付きいきなり目の前が明るくなった。
「え？」
「んふふー。中々面白い催しだったけどボクを驚かせるには少しだけ力不足だったカナー」
「やられたのじゃ……」
「……無念だ」
「ん～？　……眠ぅ。もう、なんなのよ」
「あれ？　土屋君？　それに木下君も。どうしたんですかサンタの格好なんてして」
あちこちからいろいろな声が飛び交う。
どうやらこの明かりでみんな起きてしまったらしい。
顔まで布団を被っている僕では何が起きてるのかさっぱり分からない。

静かに成り行きを見守っていると、また工藤さんの陽気な声が聞こえてきた。
「まあやり方は駄目だけどプレゼント自体は嬉しかったよ。ありがとうね」
「え？　あっほんとだ。何よこれ」
「わぁっ。これ私のほしかった調理器具のセットです。土屋君、木下君。ありがとうございます」
「ふぅ、計画には失敗じゃが、そう言ってくれると嬉しいのじゃ」
「だからって無断で女の子の部屋に忍び込んだ罪は軽減されないけどネー」
「……非常な！」
どうやらプレゼントは喜んでくれたらしい。良かった。
密かに安心していると、眼前の木下さんがボソボソと小さい声で言った。
「(その姿からある程度察してたけど、ほんとにプレゼントを配ってたのね)」
「(ま、まあね。それが目的だったし。木下さんにも一応あるんだよ)」
「(……それって、さっきのキス？)」
「(いや、そうじゃなくて)」
バサリ
続きを言おうとした瞬間、突然僕達の頭上を覆っていた布団が捲くれ上がった。
「じゃーん。おはよう吉井君。優子？」

「あれ？　……工藤さん？」
「あ、愛子？」
「うん。ボクは工藤愛子ダヨ。良かった。きちんと意識はあるんだね二人とも。……で、君達はボクらを置いて何してるのカナ？」
「「え？」」
工藤さんはニマニマといたずらっ子のような笑みを浮かべて問うてくる。
一体何を言ってるんだろうか。
「な、何やってるのよアキ！」
「ゆ、優子ちゃんっ。明久君っ。そ、そんな大胆な――っ」
「ほう、姉上もやる時はやるのじゃな」
「……残飯にしてゴミ箱に捨ててしまいたいほど妬ましい」
部屋にいるみんなは僕たちを見て各々の感想を言っている。
訳の分からない僕はそんな様子を見て首を傾げるしかない。
??　よくわからないけどとりあえず立とう。そう思い体を動かそうとしたところでようやく自分がどういう状態なのか気がついた。
僕の両手は木下さんの背中。木下の手は僕の背中に回されている。
ああ。そういえば僕と木下さん。あれからずっと抱き合いっぱなしだったんだ。

なるほど、それなら確かにみんなが僕達を見て驚くのも無理はない。そうかそうか。

「二人の関係はもう周知の事実だけど、なるべくそういうのは二人きりの時にね。新婚さん」

「「誤解だぁ（よぉ）ーーーーーー!!!!!」」

草木も眠る深夜の霧島家に一対の悲鳴が鳴り響く。

２４日のクリスマスイブ。そして２５日のこの日。

……いろんな意味で、今日は僕にとって忘れられない日となった。